



甲南高等學校
山岳部報告

創刊號

1927

甲南高等學校山岳部報告

創刊號

1927



甲南高等學校山岳部報告

創刊號目次

創刊の辭	部長 伏見 義夫	一
アルピニスム		四
山 旅	伊 藤	五
白峯三山甲斐駒嶺走	香 月 慶 太	五
タレメンツ・ルツベン (翻譯)	石 川 欣 一 氏	五
小 槍	懷	六
ひとりたび	ハンス・モルゲンターレル	六
瀧澤谷洞澤岳登攀	伊 藤	六
岩場の幻想	藤 木 九 三 氏	七
青屋 ROCK-GARDEN の遺體		
故郷の言葉 (詩時)	ヘンリー・ヘーグ	八
登山の危険に就いて (翻譯)	G. D. エブラハム	八
穂高の遭難		
記 録	救援記	二



市本松 望む岳ヶ槍より越乗澤黄硫 市

挿 圖

- 一、硫黄澤乗越より槍ヶ岳を望む……………松 本 市
- 一、槍平室堂より穂高連峯を望む……………伊 藤 郷
- 一、南アルプス大門小屋スケツチ……………前 田 敏 文
- 一、ドブ井ネ・アルプス エクラン峯……………藤 木 九 三 氏
- 一、芦屋ロツクガーデン萬物相……………
- 一、芦屋ロツクガーデン奥高座ガリ……………

圖 版

小槍レポート圖

創刊の辭

部長 伏見 義夫

日本親山の多い國は、廣い世界にも餘り多くはない。従つて我國民の殆ど悉くが山に親しみを持つてゐる。殊に私の如く四國の山間に育つて、京の田舎で教育を受けた者には山は人一倍懐しく、山は宛ら我家の如き感じがする。また小學校へは二十町、中學校、高等學校、大學へは共に一里に餘る道を通はねばならなかつた私は、遠道を歩く以外には、運動競技などのつくものは何一つ経験せずして尊い學生時代を通してしまつた。全く私は此の世へ強歩するために生れて來たやうなものである。此の多年に亘る、山家に育つて強歩を餘蘊なくせしめられたさ云ふことが、今日私をして地理學を専攻し、山岳部長の重任を負はしめたかと思ふと、習慣の力の如何に偉大であるかをしみじみ感じる。

私が山に親しみ、旅行を好むやうになつたのは恐らく中學の四五年の頃からであらう。その頃は既に一日の日曜祭日も之を食ふやうにして、未明から或は京洛の山々に、或は近府縣の古社寺に出掛け、表に入つて歸るのが常であつた。もし休暇にでもなれば毎日草鞋掛けで之を連續的に行つた。借し外泊するやうなことは殆どなく、多くは日歸りの遠足であつたから餘り遠方までは出られなかつた。それ故、後には成るべく早く家を出て、一日に幾里歩いたかを記録して楽しむやうになつた。今日でも記憶に残つてゐるのは、午前四時頃に洛北修學院村なる自宅を立つて比叡山を越へ、坂本から唐崎、大津を経て石山に出で、そこで晝食を済し、更に坂道を辿つて岩間寺に詣で、峠を越して宇治から桃山御陵に参拜し、京都市内に入

つた時には全く夜になつてゐた。それから一人旅の氣樂さに寺町邊の古本の賣店(録日のこ)を素見して午後十時過ぎに漸く自宅に歸り着いたと云ふ有様で、その日の行程は二つの山を越えながら約十五里に垂々としてゐた。而してその日の費用は僅々四十錢であつた。元來私の家は貧しかつたので、その當時の私の遠足は概ねこの額で、最少の費用で最遠の地に遊ばうと云ふ、所謂經濟學の原則を實際に行ふのが目的でもあり、且樂みでもあつたのである。かゝる遠足を前後約十年間も續けたのであるから、餘り遠方こそ知らね、京洛の内外殆ど遠く見盡した。それがまた今日大に役立つてゐる。その頃の最も好んで登つたのは比叡山であつて、幾回登つたか今は覚えてゐないが、その登山道の如きは十餘も知つてゐる。今日でも私のやうな登山者がいないではなからうが、多くの新しい人々の登山振りは私等の行つたものとは全く趣を異にし、費用の如きは餘り念頭に置かないで、なるべく他人の登らない人跡稀なる高山を求めて、五貫も七貫も食料さが防具の填込まれた、はち切れさうなリュックサックを擔ひ、ビッケル片手に、或はピトンを打込みつ、新コースを作り、或はザイルの援けを請りて絶壁を攀ち登るなど、數日に亘つて有らゆる艱難を嘗めて喜ぶと云つた風である。そして誰でも登り得るやうになるに間もなく之を棄て、願ず、また新しい山を求めて之を繰返し恰も新しい山岳巡禮を試みてゐるやうである。従つて費用の如きも時には随分多額に上ることが稀ではない。そこに時代の推移が認められる。

幾々たる高山は、之を仰ぐ者をして壯嚴崇高の念を抱かしめるものである。こゝに宗教が生れて来る。故に昔の人々は高山を神聖視し、之を懼れた。之に反して現今の登山者はその崇高な高山を我先きに征服せんと思はれてゐる。山を懼れるのは消極的であつて、山を征服するのは積極的である。前者は今日では老人さか小兒に多い見方とせられ、後者は青壯年の元氣溢れたる希望である。高山を征服し得て、その頂上から下界を俯瞰した時の氣持は何とも云ひ表せない壯快なものである。

殊に未明山嶺に立つて御來迎を拜する時の壯嚴さに至つては登山者にして初めて味ひ得る獨占的愉悅である。こゝにも亦山の宗教味がある。併し先きのものに比すれば一歩進んだ宗教味である。

古來我國には山の文學は少くない。また狩獵の如き山のスポーツもないではなかつた。併し商人未到の高山深谷を跋渉して、平地に於ては全く味ひ得ない原始的な自然そのものを鑑賞するに云ふ登山の妙味は餘り味はれなかつた。然るに今日に於ては登山の技術も進歩して、垂直的距離も水平的距離と同様に著しく短縮せられ、日本アルプスの如きも今や全國學生の活躍場と化しつ、ある有様で、もはや決して神秘境でも仙境でもなくなつてしまつた。即ちこゝに新しい一つのスポーツが生れ出で、文學にも山岳趣味が多分に盛られて、大正、昭和の一新境を開拓するに至つたのは喜ぶべきことである。その新文學の片鱗を自任して、我甲南高等校學山岳部より新たに「報告」を出すに聞く。部長としての欣快や云ふ言葉を知らない。

由來我山岳部は歴史は短いが、我國稀に見る古來の名山六甲に背まれ、狭くはあるが、青星のロッタガーデンを以て登山學の教室として蝦へに蝦へた熟練せる多數の部員に依つて發達して來たものであるから、その手に成る「報告」の將來に於ける隆昌や、期して待つべきものがあらう。些か所懐を述べて創刊の辭とする。

アルピニスム

四

宣言

現時我國の山岳界はその澎湃たる登山流行の大潮流の只中にあつて、大なる一飛躍をなさんとしてゐる。即ち今や、登山概念に於ける、將又、登山形式に於ける進展段階に立つてゐるのである。

山岳の客観性研究は主觀的内容を帯び、登山概念の主觀的發展は必然的にその上層建築たる登山形式の變遷を齎したのである。理論形式の進展は必然的に實行形式の發展に結果したのである。登山術の概念に就いての煩雜なる論争は今や存在の合理性を失つて了つた。

斯くして今や新しき概念は主觀的傾向を帯び、登山形式に於ては Ohne Feind の主張となつたのである。

然らば又 Alpengen に就いても、Alpengen が登山概念の Kategorie 外なり。こは誰が斷言し得るか。

遙英、荒れ狂ふ嵐の中の稀時間、冷き岩稜、高鳴る胸、緊張の一瞬間、寒冷、寂寥の岩小屋に送る思慕の十數日、その眞摯なる態度、遂り出る若き生命の躍動、山行く男の子、これこそ我等若人の精進する姿である。

(創刊の辭に代へて 二七・二・二三)



松平山麓より徳高嶺峰を望む 伊藤 寛

山 旅 (單獨行)

伊 藤 愿

徳本越え上高地へ

信州松本から島々へ向ふ電車の中にひこりほつちの自分を見い出した。汽車旅で寝足らぬ眠に、早や、アルプスの前衛である常念山脈が映ってくる。

登山客はない。未だ時期が少し早いからだらう。島々からは川に沿つて朝露に濡れたトロツコの枕木の上を歩いて行く。谷が段々深くなる、雨側の峰が迫ってくる。

正午前に岩魚止の茶屋に着く。汗を拭つて飯よりも先ず力餅にありついた。飯は冷飯だったがうまかつた。岩魚がないのが残念だった。

これから徳本の上りだ。荷物がこたへ出した。徳本峠の頂上の茶屋に着いたのが一時半、八高や慶應の人達と會ふ。

今日は素晴らしい上天氣、穂高に雲一つかつてゐない。正面に明神岳がその細い一つ／＼の坡迄見せてゐる。徳本越へには惜しい様な日だ。随分長く休んで人達と一緒に下る。荷物が重い時には下りが苦しい、脚にこたへる。

何さ云つても上りに比して下りは早い、林番の小屋を過ぎ丸太橋を越えて、力餅の古城屋も素通りする。いよ／＼小梨平に入った。河童橋を渡る。梓川は水量が多い、川には流水が夥しい、雪に伐された木の残骸がいた／＼しい。

六時半清水屋に着く。お客は少ない。登山期には鮮結めにされたり時によると断はられたりするの一人一室でゆつくりしてゐる。湯槽に下りたが誰も入つてゐない。食膳には岩魚のフライが三尾もついでゐる。お給仕付だ、山でこんな待遇を受けるのは稀有の事。私の様な書生ツボがこんな待遇に合ふのも未だひまだからだ。疲れが出たから早く寝入つた。川音を枕に聞きつゝ……………

蒲田温泉へ

眼が醒めたが五時になつてゐない。暫くすると朝日が照つてゐるのに朝立の雨が降る。輝いてゐる池面にしのびやかにザワ／＼と、それこそ如露の掛水の様な朝立だ。陽に映れて美しい、心配する間もなくやんだ。一湯浸つてから朝飯。

湯當をもらつて清水屋を出る。又荷が重くなつて七貫を大分越えて了つた。愈々峠道に入る。白樺の林の中にくつきり一路が開かれてゐる。氣持の良い道だ。それを過ぎると峠だ、脊丈もある位におい茂つた熊笹が道をふさいでゐる。大正池のわきを過ぎると上りになる。この峠は途中これより先は水がないので水筒につめる。

中腹から見る上高地谷の美しさ、田代池が碧々とした水を湛へて、白樺に囲まれてゐる。十二時半峠の頂上——と云つても焼岳と硫黄との間に着いた。

食食をしたが水筒の水が残り少なかつたので困つた。途中飲むまい／＼としたのだが。焼岳に登つて硫黄孔をのぞく。随分臭い。

日が暮るれば中尾泊り、ゆつくりしすぎた。降りは早いが然し脚にこたへる。喉がかはく、水は一滴もない。谷をさがすが無い。洞の様な所を一つ／＼さがし乍ら下りる。洞穴には水のかはり光りけが黄金色に美しい光を出してゐる。めずらしいものだ。たへられなくなつて草の露をなめて見たが、たよりない事おびたらしい。遂に谷間の岩のゴ／＼した所で水たまりを見つけて蘇生の思をした。

この峠は案外に長い、麓まで近くなつて溪流に出合ふ。一回徒渉をする。六時過ぎより雨模様、空は暗くなる、遂に降り出した。然し中尾に近くの細道の雨わきで、草原の中に多くの野百合の清楚なる花を輝け、穂積たる香りの未だ残る雨氣と合してその心地の良かった事は得も云はれなかつた。

沛然たる夕立の中を足を速めて中尾へ急ぐ。中尾で一夜の宿を懸望したが養蚕期まで氣毒相に断りを云ふ。村はずれの地藏堂に暫し雨泊りをする。もう七時だ。雨勢益々熾きなる。瓢盆の如き雨の中をやむなく蒲田へ向ふ。吊橋を渡つて對岸へ移る。ラヂオの淡い光に僅かに足元のあたりのみをしてらしつゝ、先日の出水で抜けてゐる危なげな所を過ぎる。八時今田旅館に着く全身濡れ肌。濡れもの等の仕末を頼んで早速裸のまゝで膳に向ふ。大きな鉢に一杯うどんを湯がいて盛つてある膳の上にはコッブと醤油と、并鉢には大根おろし、それが今夜の食事になるのだ。珍らしいのさうまいのでたら腹たべた。拓大、醫専の人達と一緒に。お客は只これきりだ。山の温泉宿は淋しいそれでもその一行六名と私と合せて七名。愉快な山話をして仲々盡きない。

旅館の主の弟由勝がやつて来る。さう／＼十二時過ぎ迄話し込む。

鍋杖へ

六時前に目が醒める。蒲田川が轟々たる音を立てゝゐる。昨夜の夕立のせいか今日はからりつゝとした上天気。主をわすらはして川原の湯へ入りに行く。實際は宿の真ぐ前の川原に降ればそこ迄頼で引いてあつたのだが、出水で橋が壊れたこの事で川上の湯元迄行く。湯の出る河原迄は五六丁ある。草深い所を下りねばならぬ。主は鎌で草を刈つてくれた。初めて鎌を操るに際取つたわけが解つた。

湯槽はさても原始的なもので氣に入つた。湯の沸き出る所は熱い。その次に石を只つんでしきりがしてある。それが湯槽だ。それは丁度入りごろだ。その次のは自分にはぬるすぎる。之が所謂蒲田温泉だ。二町程離れた所には蒲田川の濁流が湯を巻き、しぶきを飛ばして流れてゐる。

この湯の出るあたりは過ぐる大正四年の煙の噴出の時迄は今田の屋敷だつた由、彼はあたりを見廻しつゝ、當時を回想しつゝ、ほつり／＼語り出す。その態度如何にも柔順なまきらめきつた様子である。その當座は文字通り着たもの一枚で、身一つのまゝで逃げ出したさうだ。直ぐその日の食事にさへ事かいたさ。現今の所に住む事になつてからも彼等が如何に努力に努力を重ねたが、多くの人達は他の土地へ移つた。彼等はよくしのんだ。蒲田云ふ村は今も只四軒の戸数だ。飛騨の人達は良く働くが、彼等であつてこそ、迄平担したのだ。

彼は私獨りを湯槽に残して歸つて行く。心地良い酒酔でうさ／＼ねむくなつた。手ごろな岩にタオルを置いて頭をのせて湯に浸り乍らねそべつた。谷底から仰ぎ見る蒼空は狭い一條の帯だ。白雲がひつきりなしに去來する。雲の時間、雨の山の迫つて丁度ひつついた所に槍が見える。こんないでゆが又さあらうか、この湯槽は今では私に取つて忘れ難いものゝなつた。若し許されるならば此の湯の後に書く槍半の室堂だけは缺かさず毎年訪れ度い。此の湯あるが爲には蒲田の人達が

きれ程の貴い犠牲を拂つてゐる事やら。

こゝを通る旅人はさより蒲田の人達すら焼岳の事をさすれば忘れて終ふ。常に焼は噴いてゐるのだがそのおそろしさは前の山にかくされて見えないから人々はさすれば忘れ勝ちになるのだ。灰を降らし煙岩を押し出しその威力を以つて完全この村——今ではたつた四五軒の寂しい村の死所を握つてゐる。この従順な人達の寂しい村が深い夜の眠りに惑ふて居る時も、村人が晝間遙大の土地で暮るにいそしんでゐる時も、焼の煙はこの前の山麓からそつこの村をのぞいてゐる。焼こそこの村の運命を一番良く知つてゐるのだ。自然の偉力をまぎ／＼見せつけられた様な氣がした。その代償がこの湯ではないか、貴い湯だ。寂しい村よ！ 忘れ難い、いでゆよ！ 例へ上高地は俗化してもおまへだけは原始な姿を失はいで呉れ。

あまりつかり過ぎて少し上せた様なので川の流れに手を入れた。その冷さ！ 無理もない。萬年雪の下をくゞつて来る水だもの、軀が冷めたので又入りなほして、岩にかけて置いた湯衣を着て路を引きかへす。

漸く朝日が前の山越しに光を投げてゐる。昨夜の濡れものを干してある。今朝は假、岩魚の干したのを煮て出してくれた何時さうして食べてもうまい魚だ。

濡物を干すのに随取つて出発は九時を過ぎて了つた。宿の人に別を告げて鍋杖へ向ふ。道は良い、三時間程でクイヤ谷の流れに出合ふ。谷の兩側は岩壁だ、流は瀧をなしてゐる。汗にしつゝ濡れたシャツを脱いで日向に干す、今迄木藪ばかりの道だつたのに、上りこ、荷物までシャツがしほる程だ。一時間だから辨當をあける。鍋杖の頂が見える。良い天気だ。然し由勝が今朝、荷物を整理してゐる時に來て、今朝は鍋が多いから三時頃迄には岩小屋につく様について忠告してくれた。

朝、縄が多いと必ず夕立があるそうだ。

腹も出来、シャツも乾いたので氣持の良いトカク——日向の岩の上にトカクの様に寝てねそべる事——をやめて歩き出した。小屋掛けの跡らしいもの、ある先は路が不確だ。様子が見付からぬ。色々探すが見付からぬ。

さう／＼夕立がやつて来た、よいいにわからなくなる。色々歩いた末、一寸した岩穴があるのでそこへ一先づ落ち付く四時だ、こゝで一夜を明すより仕方がない。さうせ岩小屋へ行つても此處と同じ調子だからさするを決める。雨で飯は焚けぬ。煮飯の残りさ黒パンで夕食をする。キューブでスープをこしらへたがうまくない。岩をつたつて雨だけが落ちる、あたりは露が罩めて了つた。火が燐しいので未だそう暗いさ云ふ程ではないがラタルネに火を燈す。持つてゐるだけの防塵具をせまい岩穴の中で苦心をして着込む。シュラーフザツタの内にもぐり込む、まるで半虫だ。幸な事にはこの下は砂があつて石塊を取り除いたから良い寢床だ。焚火が出来ぬのがもの足りぬだけだ。

未だ早くて寝れぬまゝに頼杖をついてマドロスを咬へて燈を見凝めてゐる。露のしのび寄る氣配する感ぜられる様な静けさだ。この寂しさこそ求めに求めたものではないか、畢竟するに私のこの一人旅の目的もこゝに在るのだ。言葉さ云ふものから隔離された無言の境地。おそらく人間の觸感を一度も知らない岩穴だらう。聞けつ放した、すまいは嵐の時には到底辛抱する事は出来ぬだらう。

寒さの爲か目が醒めた。シュラーフザツタの鎖をはずして手さぐりでラタルネを探して、火を入れる。十二時半だ。夜氣でヒヤリする。これから朝迄とても起きてゐられぬから寝やうと思つて目をつむるが駄目だ、寒さがこたへる。アルコールでココアを沸す。一人飲むには惜しい様な味。こんな夜には心の友さ語りあかし度い。又寂しさを靜かに味はい度い。この二つの氣持は決して矛盾しないものだ。岩をかむ水音のみが響いてくる。……

岩小屋の一日

シュラーフザツタから首を出すに依然としとして露がはれない。五時過ぎだ。今朝は飯をたき度いと思つて米を研ぐ。お菜にハタと困つた。昨日今田でもらつた梅干がない。確かに昨夜寝る時置いたのだが、まだ大分残つてゐたのに、チエツ、土鼠に失敬されたんだ。彼等が如何に飢えて瘦せ細つてゐるかを考へて可憐想になつた。然し鼠が梅干を取る。皮肉な氣持になつて腹も立たない。仕方がないあたりに生れてゐる山路を料理しよう。

薪を集めてゐたら又雨だ、折角集めた薪を濡らしては大變だから狭い穴の中へ取り入れた。小やみになつた時に對岸に、てごろな場所を見つけて火をこしらへて、飯を煮たく。薪の味付はキューブで鹽だ。味噌も醤油もないのだ。それを持つには荷物が許さなかつた。然し何は置いても味噌を缺かせないさ云ふ事を知つた。飯はうまく出来た。汁はさう／＼飲めなかつた。然し香りの高い山菜はもうけものであつた。残りを大事にしまつて置く。

雨で餘儀なくゆつくりして九時半になつた。丁度その時一夜寒霜田で一緒に泊つた人達が下りて来た。笠の手前迄行つてキューブしたが、雨がひきくて天幕が漏つた爲に睡眠不足で、今朝は飯を未だ食はないさの事で、私のあまりでもよろしければさす。めたが今田に歸るからさて遠慮をされる。多分私の貧弱な食料を減らさまいとする心づかひからの遠慮であらうさう云つても辭退される。

丁度自分も少し行きすぎだから下らうと考へてゐたので途中迄一緒に行く。別れて又別の谷を上る。十二時頃岩小屋らしいものを見つけたがやはり人の一度も泊つた事はないらしい。用模様になつたから荷物をそこへ置いて少さいリュックミザイルを持って色々さがして見た。これも登れそうにない。三時過ぎにはさうく木降りさなつたので荷物を置いてある岩小屋に引きかへす。今夜はこゝへ泊るさ。無理をすれば三人位寝られそうさ。然し底は岩がガラガラでほんこの岩小屋だ。おまけに段がついてゐる。何さか寝られぬ事もあるまいと高をくゝる。

雨も降つたり晴れたりだから、濡れものの、仕束や汚れものを整理したりする。晝飯のさきの飯がまだ多少あつた、かいからコッヘルでカレーをこしらへてカレーライスとしやれ込んだ。中味は今朝の路、之も山に於ての珍味だ。

入口に結核をわたしてそれに濡れた雨外套をかけて脱ぎ出した。雨の吹き込むのがこれで大分助かつた。丁度この岩小屋は中央に岩でしきりが出来てゐるので一方は倉庫として荷物を置ける。

岩小屋の右には水流が滴々を音を立てゝゐる。左からも水が流れてゐる。あたりの様子には藤木さんから教へてもらつたのによく似てゐるのだが、肝心の岩小屋がちがふのだ。暗くなる、露はさきにも無い込んで了つた。雨は未だ止まぬらしい。

若し明日も天氣がなほなければ蒲田に歸らうと云ふ氣持が起る。これで二日も無駄にうろついたのである。そう決めるさ今更にこの岩小屋の佗しい、何さ云へない氣分をより充分に味はつて置きたいと思つた。

防塵具を着込んでシュラフザブタの中で辛虫を極め込んでゴッ／＼の岩の上へ寝ころんだ。低い天井、その岩が今にも落ちて来さうだ。ゴトリッ！水滴、岩は濡れてゐる。ラチルネの光に照らされてさす黒く光つてゐる。何だが像力を持つてゐるさうだ。若しこの天井の岩が落ちたら……さ考へ到つた時。ツツツと壁の内を突つ走しつたものを感じた。クインタラーの機にその行方を知られずに、無言の自然と共に久遠の夢を見出せるかも知れないと考へた。静かな氣配だ。言葉を出すすら恐ろしい様な静寂さだ。

落ちる水滴が多くなつた。地圖や手帳等を仕束して底を水が流れても濡れない様に岩をあらこちらと動かした。荷物の中にマダネシユームのあつた事を思ひ出してピッケルに寫眞機を吊して自分を撮した。

なす事を爲して了つた氣安さで袋の内に首をちめてうご／＼する。背中が痛いが身動きも自由でない。ラチルネはつけたまゝ、多分錫杖の岩小屋の最後であるであらう夜は、無言の内に靜かに、佗しく、人の子一人を護つて更けて行く……

蒲田へ

天氣はやつぱり悪い。昨夜背中が痛くて良く寝られなかつた。今日は谷を下るさ。天氣のせいで出發が遅くなつて一時半にもなる。クッヤ本谷と出合ふ所は——昨日もだが——やつぱり河の流れを渡渉する。靴の中は水がジャブ／＼だ。昨日の道を引きかへして行く。荷物だけせめて吊懸の所へ置いておけば、明日それだけ助かると思つて中尾の方へ出た。橋の上手にヤムプが見ゆる。神戸高商ではないか知ら？ 三好の一行が自分と前後して来るこの事だつたから行つて見た。

天幕は松高の人達だつた。うまいコッヒをよばれ乍ら失敗だつた事を話す。この一行は明日から笠の方へ行くこの事で、私が今日蒲田へ歸つて、明日槍平へ行くさ云ふさ、それではこゝから蒲田への往復は無駄なものだから今夜ヤムプに泊つたらさすゝめられる。然し槍平の室堂に米がなかつたら困るからと思つてさうさ迷つた。然し偶然通つた人夫が槍平へのせおい、こだつたので聞くと室堂にはたくさんあるこの事で安心して、今夜は蒲田へ歸らずにこゝでヤムプの御見介

にならうと思つた。

一四

この河原は氣持の良い所だ。すぐ左側を蒲田川が轟々として流れてゐる。右手は一たいの河原だ。そこに又もつもない巨岩がたつた一つごりりと轉つてゐる。この様な巨岩は珍らしい。その底部が凹んで、屈んだ人の四五人も雨宿りが出来そうな所がある。そこを背景として天幕が張つてある。松高の一行は人夫と四人だ。天幕は廣いので自分が今夜厄介になるのだ。話に無中になつて、晝飯を済ましたのが三時。

山は霧や少雨でも下に上天氣だ。河原に濡れたものを乾し廣げる。まるで西洋乞食が一世帯の虫干をしてゐます云ふか、タチだ。乞食云へば實際自分達の姿は乞食、ツツ、ツツ、だらう。西洋乞食には苦笑させられる。天氣が良いのにノビて了つた。素足になつた、物珍しさに河原をぶらつく。巨岩がさても氣に入つた。河原の續きに炭酸水が出るのだが出水で之もだめだ。人達の雑談で時は過ぎ行く。

早稻田の人達が七八人右俣を下つて来る。この一行のリーダーのM氏は後に瀧谷の岩小屋で知り合ひになつた人だ。八時過ぎ、素晴しく焚火の上、焚火のそばでうまい夕食をする。美味いおかずを恵まれて悦んだ。食事だけは友に愉快に談話をし乍らたべ度いものだ。よし、食物は不味くとも心から悦び合つて食べられるのは何と云つても仲間のあるに如くはない。あゝ早く仲間と會ひ度い、十八日には檜ヶ岳の小屋で友に會へるだらう。伊藤！うまいものを食はしてやるぞ。と云つてゐるが、そして上高地に降りれば學校の小さい人達も来てゐるやう。二十四日に上高地へ入つて来る確定だから、もうあと十日だ。他の學校の人達の愉快な様子を見て、うちの部の連中が鬱しくなつた。人夫を連れて歩ける人達を見るに羨ましくある。それもその筈だ、朝起きた頃は温い飯に汁が出来てゐるし。いろいろの難用は辨してくれるのだもの。

焚火の傍での山話も済んで、火には大きな「根ツコ」をくべて置いて皆んな天幕へ入る。良い寢床だ毛布の下には「葉っぱ」が厚く敷いてある。昨夜岩のゴロゴロした所に寝た身には過ぎたもてなした。流の岩をかむ音は耳中に響く、山男には之が母の子守歌だ。シューベルトの子守歌にもかへ難い。金殿玉種に寝ねた夢でも見そうな心地で敷いてある草の香を身にふさ／＼とまこひつ、蒲田の河原の眠りに誘はれて行く。

右俣を靈堂へ

昨夜は夜中に一度も目を醒さずに良く睡眠を摂る事が出来た。四時頃人夫が起きるので自分も天幕を出た。蒲田の川面を塞いでゐた藁が次第に薄らぎ行く。山の頂で見る様な御來光の華やかさはないが谷で見る事も亦美しいものである。朝日が東から輝き初める。谷一杯を埋めてゐた雲、霧？の一番上層が美しい五色の彩りを呈し初める。次第々々にその美しい五色が下へおいて来る。宛然、天上の名繪師が雲にほかしをかけてゐる様である。その前兆がある。東の昇つた空から黄金の光が矢の様に谷の隅々迄限なく行き渡る。手の凍む様な流で久し振りに齒磨を使つた、ぜいたくな事だ。

一緒に朝飯を済まして荷物を整理する七時。リーダーのO氏や其他の人々に昨夜のお禮を云つて、御禮儀よう。槍竿と笠の方へさ別れた。

林の中の道を左へ左へ進んで行く。茂つた木の間にぐれに等しい雪のかゝつた山が見える。林道を抜けて河原へ出る今日の道は河原と林の中との連続だ。林道を抜ける。河原に出るし、河原が済めば林道だ。右俣を上つて第一に入つて来る

澤は右から順に外ヶ谷、小鍋谷、柳谷（見堀谷の方が蒲田の人には通りが良い）白出し、瀧澤だ。

外ヶ谷から一里許りで右俣と左俣との合合に著く。こゝから笠へは穴毛谷を登るのだが今年は橋が落ちてゐるようだ。皮肉なものだ。今日は錫杖が朝日を受けて映れてゐる、奇怪な岩の姿、紫色を帯びた朝色の岩山、おまへはさう／＼私の入るのを許して呉れなかつた。私は遂に兜を脱いだのだ。若し出来るなら来月の下旬、も一度お前を訪れるつもりだ。さうかその時は私の近寄る事を許してお呉れ。今度は御く退却するから。奇怪な山よ。然しまあ何と魅力を持った岩だらう。

兩俣の合合のあたりは廣い河原だ、穴毛谷が正面に見ゆる。残雪がひさい。登つて見たいと云ふ氣が心の内にむら／＼湧いてくる。笠の全容がくつきり體より見上げる事が出来る。然し頂は霧がかゝつてゐるほんの暫しの間顔を見せただけだ。美しい山だ。凄さを有つた岩ばかりの男性的のあたりの山の中にまあ何と云ふ美しさだ。女性の山と云つて悪ければ一々の雄々しい美少年の姿だ。然し仲々露のよく／＼る山だ。笠に引きつけられて左俣へ行つて見たくなつた、之を行けば薩摩澤乗越へ行けるのだ。そして双六にも行く事が出来るし。然し残念な事には、橋が無い。又瀧澤も見度いので笠の窠を一枚擡つて右俣を進む。中崎山を左に見て進むのだが、まあ何と云ふ美しい山だ。枯木がすく／＼立ち枯れたまゝ、山の様子は云ふ所々には痛々しい赤い地肌が見えてゐる。麓の山麓高に威嚇されたのか、その麓物の息に測されたのか、憐れな姿よ、笠の襟にはなれないのか。弱い山よ！ 麓飛びの所で橋を渡つてすん／＼進んだが二丁ばかり先でしまつたと思つた。道が抜けてゐる。出水の言は新しく遠人達の作つた事に對して費を強いるのだ。流は早いし、水量も多くてとても渡れないから又引きかへして、橋を渡り流の右を行く。このあたりは地圖も誤りがあつたらしい。この道は多分白出しの強高小屋に通ずる道だらうと思つて通りすぎたのだ。道もはか／＼白出しの入口へ着いた。或は白出しだ。白いガラ／＼石が一杯押し出されてゐる川を距てた對岸は鐵嶺の巔まで切り立つた様な絶壁だ。川は深く淵をなしてゐる。覗いて見ると水は碧々として凄味を帯びてゐる。谷に臨んだ巨岩の上でゆつ／＼休む、この邊の道は河よりもすつ／＼高みについてゐる。前面には巨人懸高が天鷹の様な姿で人の子の近付くを呪つてゐる様だ。まあ何と云ふ恐ろしい姿だ。瀧谷の手前の河原で荷物を下ろす。河原が美しいので、で盡にする。傾は無いので黒パンミチーズ。水が素敵にうまい。水のうまさだけは山に来る者はほんさ／＼にめづれてゐる。山水は冷たさのみが一種の靜かな風味を持つてゐるのだ。

昨日キヤムプ地で遭つたせお、こゝに又遭つた。瀧谷を覗き乍らさほりすぎる、瀧が見えてゐる。暫くすると残雪が谷一杯を埋めてゐる所に來た。その上を通る。表面は木の枝で黒く汚れてゐる。南澤から出てゐるらしいガラを通る。落葉の深い、踏み度毎に足のめり込む様な靜かな奥深い感のする森の中を通る。流の響は絶間なく耳にある。何かメルヘンの國へ來た様な氣持。

森を抜けて急に豁然とした明るい廣々とした河原に出た。美しい所、氣の晴れる様な景色。槍平。室堂。何と云ふ良い場所だらう。中崎山からズレた谷が來てゐるのが見ゆる。然しその谷も残雪を持つてゐる。森の一方を切り開いてその上に室堂が立つてゐる。前には右俣の上流がその清澄なせ、らぎの川音をかなで午ら流れてゐる。こんな奥深い山には勿體ない位、シヤレエ作りでも云ひ度い様。中央から一本煙突が立つてゐる。いや空氣抜きたらう。板ばかりで面白く作つてゐる。三間に六間の山小屋作りで通し土間だ。雪にも風にも強い様に周圍は石積みだ。聲を掛けて中に入る。裏から「オーイ」返事がある。狐を小脇にかゝへた遠付姿の男が入つて來た。後で知つたが番人の大島のおつさん。自在から下つてゐる鐵瓶から湯茶を注いで呉れた。二三日さめてもらふ由を話すさ、さあ／＼氣の良い返事。飛彈もんは横着でかまはねわだ。さ付け加

へる。懸崖の小屋だから自分勝手に泊れば良いものだ。槍の肩の小屋から人夫衆が通つてゐる。こゝに槍尾からの荷物が一度置かれてゐるのだ。大島のおつさんの山語で黄昏近くなつた。小屋の外へ出て夕陽のあか／＼さす槍平の景色にあかす眺め入つた。

流を距て、岩ばつかりの穂高が宛も神懸で荒削りをした様な男性的の姿、力そのものと云ふやうな様子をして澄み切つた蒼空に高く高く、天崖の如くに聳れてゐる。黄金の夕陽を浴びて輝いてゐる。飛騨側の穂高もこんな美しい所があるのかと我を忘れて佇んだ。その穂高からの二つの大きな谷がグリ込んでゐる。左なるは南澤谷、右なるは源澤谷だ。残雪が白銀の様に光る。然しその麓は流石に穂高の峻しさを偲ばせる。何と懸さうと茂つてゐるであらう。その密林は槍平の河原迄續いてゐる河原は廣い。石が白い。流は澄み切つて心地よいせゝらぎの音を絶間なく響かせてゐる。穂高の左手の峰麓きに低くなつてゐる所がある。之を登れば飛騨乗越へさつゝいて槍へ行けるのだ。人夫衆の通ふ道だそう。宝雲の裏は直ぐ森だ、小さい祠がある。ナルプス神社だとか、日本武尊を祭つてゐると云つてゐる。

この小屋は雪崩に破壊される事はあるまい。良い地勢の所に建てゝある。あたりの暗くなる迄立ちつくした。ヲナルネを掲げ溪流に米を洗ひに行く、冷めたくて良く洗ひない。自在に飯盒を掛け飯の出来るのを待つ、火が良いので飯の出来具合も申し分ない。然しおつさんは山の飯で良ければと云つて冷飯だが鍋でいたのを茶碗によそつて呉た、厚意は有難い、汁をもらつて飯を食ふ。飛騨の人は冷飯の茶漬が好きだそう。そしてそれを一日に四回でも五回でも腹の空いた時いつでも食ふのだそう。上高地に働きに行つても、あまつた冷飯を食ふので宿屋では大悦びだそう。

「コアラ等を沸してそれを一緒に飲んだ。然し静かに火をみつめ乍ら山小屋でつきぬ興味の話に聞きふける時は流石がうまい。室堂には大したものはお備付けてないが鍋釜はある。番人は通常は居ないのだが肩の小屋のある時はその人達が番をしに来る。大島のおつさんも肩の小屋に居してゐるのだ。床板の上には筵が二枚敷いてある。寝る時には大島のおつさんが自分の蒲團を一枚かして呉れた。大きな枯木をくべて竈に付く。焚火がばつと明るくなつて一しきりもぬたかと思ふと又暗くなつて行く。……谷底の憩ひ、睡み。森の樹々も囁をやめて自然は底知れぬ沈黙の内にひそまり返つてゆく。

南澤を下る日

良い天気だ、久し振りで屋根の下でしかも清園にくるまつて眠る事が出来た。良く眠れた。流で顔を洗ふ。黄昏の景色も美しかったが、朝の景色も亦麗しい眺めだ。明日は朝露の晴れぬ間に起きて見度い。今日は散歩がてら槍迄往復して来れば良いのだ、天気は良いが休養だ。

大島のおつさんが御幣餅を作つてくれた。飯を鍋ですりつぶして串にさしたのだ。小さい團扇位の大きさだ。それに味噌をつけてはんがり焼くのだ。うまい。然し一本食へば腹は一杯だ、一本で一合五勺位ある。それにおつさんは乗炊一合お粥が二合、米三合、お萩四合に御幣五合つて御幣餅は五本食はねば何んて喰いてゐる。一本は晝飯の時と思つて餘分に一本をもらつて出かけたのが九時。

中崎の林道に出れば穂高連峰が一目に見ゆると云ふので尾根にさつ付いた。要領が悪かつたので林道に出る迄に二時間半も費して了つた。實際ひさい目だつた。もうあそこは樂だ、槍迄良い道が付いてゐた。残雪がある。その雪の上に兎の糞が多い。西鎌を登つて槍へ出た。穂高も上天氣だ、披戸や笠の方も見える。良い天氣で眺めが良い、丁度一年振りだ。槍にも登

つたりして四時近くなつた。ふさ南澤を下つて見たくなつた。人は通らないが行けそうだらうこの事だつたから大して氣にもさめずに穂高の縦走路の通り南へ尾根を辿つた。大喧を越した所に大雪渓があつたのでドリツェツドをやつて一寸失敗をやつた。然し大した事はなかつたが二十分ばかり隙取つた。時間が遅くなつたので霧がかゝり出した。防寒具を一寸も用意してゐなかつた。ネルのワイシャツの上にチョツキだけより着てゐない。霧がかゝる寒さを感じるので岩角に身を潜めてうづくまる。

隙取つて辿り通り南岳に着いたのは六時四十分だ、こんな事ならず、められた通り肩の小屋に泊るのだつた。然し今から引き返す事は不可能に近い。リュックは小さい方だからラテルキもない。未だ陽があるからやつぱり南澤を下らうと思つてガラ／＼岩を下り初めた。幸ひアイゼンとピッケルは持つてゐたから助つた。雪渓を下るのだから之が無かつたら困るのだ。突然、雪渓が絶えてゐる。瀧だ！谷が馬蹄形になつて中央と兩側と三方から瀧が落ちてゐる。日は影つて了つた。路は――否、初めから路はない所だがその下りられる様な所は見出せぬ。絶壁になつてゐるから仕方がない。瀧の中には足がかりがありそうだ。然かも水量の最も大な中央の瀧に足がかりが多い。濡れるのを覺悟しなければならぬ。地圖をリュックの奥深くしまつて、ピッケルを入れて緊くしめた。水流に入つた。浅い。岩を試みた、確からしい。岩に腹をつけてヘバリついたまゝ、そろ／＼下り出した。勿論頭から瀧を浴びての事だから全身濡れ果た。水の中に飛び込んだのさびりはない。

陽は既に落ちて鳥影も見えず身にはひし／＼と寒さが迫つて来る。休む事も出来ない。ピッケルを取り出して雪渓の上を走るが如くして下へ急いだ。さたん、轟然たる異様の響に耳を打たれてヒョイツと後を振り返つた。何たる幸運、雪渓が陥没したので、一瞬で渡つたらさう云ふ考へに想到した時思はずに然るした。寒さが御はもひし／＼と襲ひ来るので下へ急ぐ

場ッ。又瀧だ。今度は「つた。さつきに懲つたので何でか免れ度いものさよくあたりを注意した。今度はそれは弱めそうだが左の崖付を行かう。柳松がはびこつて歩きにくい。焦る心を押へつ、細心の注意でこれも過ぎた。これはひさ目に遭つたぞ、と思つて私に心中恐怖の念が起つて来た。雪がさだへさだへになる。幸にもう瀧はなかつた、然し又失敗をやつた。仲々出口が来ない。ガラ／＼石がしまいにならぬので瘴瘴がりの内にあたりをすかして見た。右手に一つの尾根が見ゆる雪堂はその上手の方だから之を越せば直ぐ峰島に槍平へ出られると思つた。之が思へば失敗の原因だつた。行けさも行けさもゴロゴロした岩ミ、雪崩になぎ伐された樹ミに苦しめられて歩けない。眞のぬば玉の暗夜だ。之も後で考へるに月が出る前の間であつたらしい。リュックを下ろして鐘に入れてあつたマツチを取り出した。おほつかないマツチの微光で地圖と磁石を合はすに苦心する。自分の理想と違はない。不思議な事だ、萬事休矣。まついぐらに谷を下つた。すれば溪流に出られると思つた。そして流に入る迄に道に出會へるだらうこの考だ。轉びつゝ、岩に膝を打ちつゝけつゝ進んだ。石コロ、森。森に入つた。向はも目的の方向に進む。路だ、それを傳つて北の方（右手の方）方へ進んだ。さうやら昨日通つた道らしい。河原に出た。あゝ火が見ゆる、おゝ槍平。いつにかはらぬあたりの静けさ。自分の焦つてゐる心が羞ずかしい様だ。廻つて橋を渡るのが待たれず流を渡つて直ぐ小屋に近づいた。「歸りましたぞ――お客さんカッ」懐しい聲。焚火のそばにへたばつた丁度八時だ。

今夜は賑かだ。肩の小屋の衆だ。皆で四人、私の南澤を下つたので驚いてゐる。三年許り前に一度人の通つた事があるきりでこの澤については色々な事が云はれてゐるが事實は人の通らない澤だ云ふ事だ。丁度人達も未だだつて鍋の飯の焚けるのを待つてゐた。あつらへ向だ、肩の小屋からわけて貰つたカレーの罐を切る。自分も一緒に食べさせてもらふ。カレー！

が大變よろこばれる。大島のおつさんは「あまりおそいで肩の小屋で泊つてくるかと思つた」と云ふ。中崎の林道も私が初めて通つたその肩の小屋での話だつた。あまり愉快な夜だつたのでマダネシウムを焼いて寫眞を一枚さつた。

この室堂は南側に窓があいてゐる。さつき見た火もこの窓から洩れたものだつたんだ。その窓から急に明りがさし込んだ、月が出た。黝黒い死人の様な冷い魔の山穂高から満月らしい月が登つたんだ。夜は更けて話も途絶へてしまふ。

ランプも消えて只焚火の明さ窓から差し入る月明りで静けさはいよ／＼寄つて来る。外の人は寝たのに大島のおつさんと二人で火の消かけも氣付かず話に話し込む。人なつこい山男だ。十二時になつた。明日は緊張を要するのだ寢る事にする。用意をして小屋の外へ出て見た、この凄味を帯びた穂高の夜をおそらく私は一生忘れまい。ひそまり返つたあたりの密林。槍平の河原、水の音のみは細間なく傳はつて来る。岩ばかりの山、魔の山穂、高壓迫される様な姿だ。牙を切つた空には雲一つない、月光皎々、凄絶さでも云ふか。

自然の偉力、潜んだ力を默示する姿、私はこの景色に嚴肅さ以外のものを感じなかつた。美を味ふさ云ふ様な氣持に超越して了つて無言の内に小屋へ入つた。窓は私の頼みで開けたまゝにしてある。小屋の内で寢ながらにしてこの景色を眺めた。寢やうとしても頭はますます寄つて来る。

瀧谷から穂高へ

昨夜晩く寢たのに四時にならない内に目が醒めた。焚火が消えて、寒くなつたせいだ。一くすべしてうつら／＼したが良くは醒れぬ。河原に出て見た、谷を埋めつくした朝霧が白んで又何時さもなく散つて了つた。朝日だ。然かも、見よ。

その麗しさ、潤澤奥穂の頂の東面が黄金色に輝き初める。次第に明るさが増して来る。曙の美、背後の杜から美しい駒鳥の啼りが長閑な野園氣の内に響き込んで来る。毎年必ず一番宛この杜に住ふさか。河原や密林を抜けて八時には早やくも瀧谷の入口に着いた。瀧を沿ひたり、岩雪崩に遭遇したりして緊張の幾時が續いた。小さい人の子が只獨り偉大な自然の魅力に憧れてその内心深く入つて行つたのだ。岩さ雪さの戦ひ、苦しい時間だつた。この瀧を登り切つて穂高縦走路の細い通路に跨つて一人、平和な氣分で眺めたあの横尾谷の美しさ。常念も午後の光を浴びて靜かにその姿を見せると。それに比して飛弾の方は一體の霧に包まれてゐた。然し瀧を登り乍ら休んでは振り返つて眺めた右保の谷。密林の中に河原を控へて建つてゐる槍平の室堂は美しいものであつた。幾度聲を出して呼ばはつたか知れない。こうしたアルバートの後には無心に映いてゐる名も知れない高山の植物にも無限の愛着を感じる。沈黙の内に聳いてゐるピークにも限らない親しさを感ずる事が出来る。瀧を上り切つた時涙の出る様な喜びを感じたのも私の心に包み切れぬ感激のあつた爲なのだ。潤澤の頂に立つた時あたりはすつきり露に蔽はれてゐたが何か知ら美しきものが感じられた。

穂高小屋の前の岩に腰を下ろして五色に彩られた雲の内にその姿を没さうとする雄大な關の入り、焚煙を風になぶらせ乍ら無心に見入つた。黄昏れ行く高い山。深い谷を遙かに眺めて、思ひ出の多いその日の記憶を辿つた。

嵐の穂高

昨夜は小屋は満員で鮮詰めだつた。然し疲勞のせいか良く眠れた。六時頃起きて見る外はひどい暴風雨だ。四時頃には空一面銀砂子をふりまいた様な星だつた云ふのに、急に模様が変わつたんだ。一歩外は大變な事だ。嵐が吹き荒んでゐる。

岩を動かし尾根に突つかる風の音、谷から吹き上げる雨は小屋の隙間から吹き込んで来る。籠城するより仕方がない。雨へも立てない様な荒れ方だ、岳の風は凄まじい。

晝前の一寸おだやかになつた間を利用して大部分の人達は横尾谷を上高地に下つて了つた。然し飛瀬側へはさても出られない。天候の爲ならば一日や二日の滞在もしかたあるまいと思つてこゝで一日休養する。寒さが小屋の内に居ても身に沁たへる程だ。重太郎の厚意でストーブを貸してくれた。小屋の人達はかり毛布にくるまつて蒲團にもぐつた。盛夏だ云ふのに山では冬籠りだ。霧の時間から微明りの太陽が暫くの間あたりを明るくするが、又もこの嵐の中に引き戻されて了ふ。嵐のお蔭で山小屋の味をしみる味ふ事が出来た。一步外には冷い身に喰ひ入る様な嵐が雷鳴さへ伴つてわめいてゐるのにストーブのお蔭で小屋の内は温かい。何も考へない。眠り、眠り、只眠りだけだ。睡魔に魅された様に一日中心地良い眠りのみを食つた。

雨の白出しを下つて

眼を醒したが嵐はまだやまぬ。昨日の通りで少しも勢は落ちて居らぬ。然し今日も滞在となるさ一寸困る。そして友が槍の肩の小屋へ来てゐたら、只それだけが氣難い。天気を待つて下るさしたら槍平へ半日、槍平から槍迄半日、丁度一日かゝるわけだ。天氣の良いのに一日もまつてゐてくれるかさうか疑問だ。今日槍平迄下つて置けば明日の晝迄槍へ行ける。天氣が回復しなくても雨を待つて白出しを下らうかと思つた。するさ山本云ふ人夫が中尾の自宅に歸るさ云ふので途中迄一緒に下らう云ふ。雨の日に良い伴が出来たので悦んだ。も一日滞在しようかと思つてゐたが重太郎も伴のある時が安

全だからさ云つてすゝめるので一緒に下る事にする。今日は薪が缺乏してこれ以上ストーブをたけば飯がたけないさ云ふのでストーブなしだ。あたゝかいものを腹一杯食つて下らんさ賑が冷ゆるさ云つて晝飯にはうまい燗炊をたいてくれた。雨具を用意してゐなかつたので下に毛シャツを着込んで、別を告げて白出しのガスを下つた、雨と霧の中を悪い路を走るのだから大抵でない。雪渓がある。ガンヂキをつけて走つて下る。シュランドがあつてヒヤットする。この谷にも矢張り大きな淵がある。上を右へ廻む路がある。時々霧の時間から中崎の山らしい緑の山が見える。下は天氣らしい、漸く一時に槍平への路に出る事が出来た。しばらく此處で休憩する、山本と別れて又右俣を辿つて中崎山の林道を行つて三角標のあたり迄登つてゐる霧の爲に誤つて大雪の澤を下りた。腰迄水の中へ浸つたりして磁石は止つて了つた。右俣の急な流を苦心の末渡つて道へ出た。四時間ばかりかゝつてたつた二三丁進んださ云ふ様な失策をやつた。道を誤つたら知つた所迄引き返へすが一番良い。道谷を覗いて見る様な裕りはなかつた。さつき迄陽が照つてゐたのに又土砂降りだ。岩を蹴つて槍平へ急ぐ。大鳥のおつさんが一日がかりでかけたさ云ふ丸太橋も、昨日来の荒れで流れてゐる。懐しい河原に來た、槍平だ。小屋に着いたのは七時だつたおつさんも心配してゐてくれた。明日になれば槍にこそづけを頼もうと思つてゐたさうだ。安心してくれた。あたりは段々夜の帳の内に隠れて行く。焚火は益々明るさを増して来る。飯を食へさしてもらふ。細詰を切る。歸つたんださ云ふのんびりした気分になつた。重荷を下ろした悦びだ。着物はきれいに整理がしてあつた。濡物も乾いてゐた。

落着いた氣分で焚火にあたり乍ら冬の話を聞いている。笠谷が面白いさうだ。あまり人の氣の付かぬ谷だ。春の雪解けが面白い眺めださうな。嵐の形が見えたり二匹の鳩の接吻の形があらはれたりするさうだ。丁度銀岳に殘雪で蝶の形が畫かれるのさ似てゐる話だ。新しくして槍平の最後の夜は更けて行く。

今日はいよいよ槍平さもさらばをしなければならぬ。十五日に此處に来てより既に指折り數へて六日目になる。思へば長い滞留であつた、忘れ得ぬ山小屋だ。そのあたりのたゞすまいは恐らく私を毎年此處を訪れさすであらう。駒鳥の音を聞きに毎年やつて来るだらう。河原に寝そべつてあたりの景色を心ゆく迄眺め度い。一介の漂泊の旅人として訪れ度い。

荷物の整理を済ませて靴を穿く。「お土産に御幣をしるから」この事で暫く待つた。大きな奴を三本もこしらへてくれる。一本は其場でよばれた。さてもうまい、あそこは槍で待つてゐる誓の友への土産にする云へば、五葉云ふ大きな草の葉につゝんでくれた。女房衆が居れば扇餅云ふ程に、御幣は位があるつて云ひますださうだ。長らく世話になつた心ばかりのしるしに少し許りを贈つたが仲々取つてくれぬ。漸く納得させて立ち上つた。「御機嫌よう」……槍平よ、さらば。静かな山ふでころよ。長い間私を留まらしてくれた答問よ。河原よ。出来れば冬にも来たい。平和な杜よ。駒鳥よ。私の心をはぐくんでくれた槍平よ、さらば。……

乗越へて荷物を負つて歩き出した。大鳥のおつさんは暫く見送つてくれた。林の中を通つて行く、雪が残つてゐる。暫くするに後から増つさんが追つて来た。肩の小屋へ荷物を運び上げるのだ。美しい花畑が出来てゐる。石楠が咲いてゐる。飛弾から吹き上げる風で涼しい。笠が良く見ゆる、いつ見ても美しい笠岳。今日は天氣が良いので煙の出してゐる姿。乗鞍の方迄見ゆる。休み休みゆつくりと乗越へ着いた。もうあそこ一丁だ。

肩の小屋へ着いた。が宛にした友の一行は居らなかつた。十八日に濡れ鼠になつて西郷を辿つてやつて来たのださうだ。

さうも双六池の畔りにキャムプしてゐたらしい。天氣が悪いので今日迄滞在してゐたのださうだが、小槍に成功して上高地に下つたこの事。一時間の相違だ。彼等一行もそんなに自分を待つてゐてくれただらう。折角「五葉」に包んで御餅餅を持つて来たのに、残念だが仕方がない。遅い道を済ましてさうせうかと考へた。丁度飛弾から霧が吹き上げるし悪い天氣になりさうだつたから今日は滞在して、明日晴天ならば總高縦走して上高地に下る事にする。

小槍は今年になつてからは彼等友の一行が初めてださうだ。一緒にやれなかつたのがかへすがへすも残念だ。その爲に此處で會ふ約束をして置いたのだから。友の私宛に残した名刺がある。待つてゐたさ書いてゐる。然し小槍はそんなコースを取つたのか不明だ。

此處では飯は半煮だ。然し贅澤は云へぬ、用水はすべて天水だから、薪も一里も下へ取りに行くのだ。米は槍平の室堂で毎日大鳥のおつさんの洗つたものだ。手の切れる様な水で、それにつけても槍平は懐しい。薪は豊富にあるし、清流は近くにあるし。

二階の窓から度々槍が隠見する。小槍の頂も少し見ゆる。朝が天氣だつたから小屋は満員だ。

一 萬尺の山小屋

御來光を見る人達の騒ぎで眠りから醒めた。然しあまり良い天氣ではない。穂高は霧で行けそうもない。上高地や燕の方へ行く人達は皆出て了つた。私と蕎麦家一人になつて了つた。廣い山小屋もひっそり静まつて了つた。この蕎麦家はN氏。山登りのこんな一般的なにならない前に苦心をしてあちらこちら歩られたんだ。その時代は地圖も未だ無かつたさうだ。嘉

門次爺さんを連れて歩かれた云ふ。色々その當時の面白い今からは想像の様な苦心の山登りの話を聞く。

さういふ醜態な模様だったのが嵐となった。

今夜は小屋はゆつくりだ。お蔭で温たかく寝に付く事が出来た。夢はなくとも……

小 槍

今日もあり良い天気ではなさそうだが。御來先の美しさが見られない。小屋は静かにひっそりしてゐる。霧の往來がはげしい。山にあつては天候難氣にかゝるものはない。單純な心に只一つの心配はこの天候の事だ。霧の中にも槍に登つてゐる人があるらしい。しきりに呼んでゐる。無聊なものだから重い山靴をつゝかけて槍へ上つて見た。岩に接近すればそう大した霧でもない。十二時頃槍の頂上に腰掛けて雲の海を下に眺めてゐる時急に霧の晴れそうな氣配を感じた。まだ晝が潰んでゐないので小屋に歸つてそゝくさに食事を終へて、小さいリュックサックにハンマーやザイルを入れて、マウエル・ハツケンも寫眞機も序に投げ込んでガラガラ岩の槍の腹を左手から廻つた。そんな氣持だったか今でも解らないが東嶺、北嶺を越して小槍と大槍との鞍部に出た。八高の人が三人小槍の上に居つて下りて來ない、合圖をして登つても良いかさざめた。表面の一枚岩をトラバースしてサムエーに入つた。この一枚岩にはマウエル・ハツケンの小さい方を一本打ち込んで置いた。下は千仞の谷底、高瀬の溪谷だ。吹き上げて來る風がひさしい。緊張と努力の内に小槍の頂上に立つた。

三時迄頂上に居たがさういふ雨が降り出した。さつきの三人は十五分ばかり先に下り出した。雨がよい／＼ひさくなるのでこれでは到底、頂上に居つてその一行の完全に降るのを待つて居れなくなつた。斷りを云つて、諒解を得て人達の邪魔を

しない様到大廻りをしてさつき登つた面の反対側即ち裏面を下つた。鞍部に着いて山靴を穿いて暫く休んだ、雨が段々ひさくなる様だ。未だ下りかけつゝある三人に聲をかけて小屋で待つてゐるから茶でも飲ませうとその由を告げて槍の方へ登つた。上の方で「伊藤さん、伊藤さん」と呼ぶ聲がする。N氏の入夫の林蔵さんだった。雨が降るのに私の歸りの遅いのを心配して合羽を持たせて迎へを出して下さつたのだ。飛ぶ様に小屋に歸る。

小屋は今朝がた天候だったので又満員だ。小屋の人達の厚意で自分とN氏を下の別室へ移してくれた。N氏は「酒杯を舉げませう」と云つてコニヤクを注いで下さる。自分の爲に乾杯をして貰ふ。今こそ初めて岩を登つたさうな喜びを感じた。食慾がついて夕食がうまかつた。

今夜は遙く遠征してきた。小屋の「小淵」さんが話をしてくださる。ふさ机の上の宿帳を繰つてゐる。巨大のSちゃんやんの仲間のM君の名を見出した。二階に上つて鉢詰になつて疲れて寝てゐる人達の間にM君を見出して起した。二人共その奇遇に驚いた。名物の栃羊かんを嚼りつゝさちらも尋ね合つた。まさか會へるさば夢にも思はなかつた。君は北海道の家へ歸る途中の十日間をアルプスに入つて來たのだ。上高地の様子も聞いた。ひよつとすると二三日中にSちゃんに會へるかも知れぬ。さ云ふ。明日中に有明彦ガンバルと云ふので「お疲れ」を云つて別れる。M君に氣の毒だったが下に寢床が三つであるので失敬した。北海道で馴鹿の冬毛が手に入るこの事で頼んで置く。

寝る時には沖田さんがN氏と自分の二人にカマ鹿の皮を借してくれた。温かい。二階は鉢詰の大温床だのに下でゆつくりと寝るのは勿體なかつた。

澗谷の岩小屋へ

今日も怪しい空模様だ。然し少々曇るも出来ない。四日目なんだから上高地へ下る人達もある。M君は早くから出立した。待つてゐても何時天氣が良くなるか確かな見込みはない。穂高縦走を諦めて槍澤下りだ。厄介を掛けた人々に別れを告げて又ガラ／＼の歩きにくい道を下つてゐた。大槍の小屋の傍で、槍で會つた八高の人達がキャムプしてゐた。然しその人達も今日上高地へ下るこの事だ。雪溪の傾斜がゆるいのでグリセッドも痛快でない。途中有明口の塚田云ふ人夫にあふ。元氣な男だ。赤、硫黄、から北嶺へ出るコースをやり度いが連れて行かぬか云ふ。自分の身分ではとても人夫なんて仲はれない。

槍は露だつたの下は良い天氣だ。横尾の尾根を仰ぎ乍ら一俣の小屋に着く。晝食を終へる。

雪解けの水、萬年雲の下をくゞつて来る冷たい水が滔々流れてゐる梓の流に沿つて横尾谷の入口迄来た。殘雪のある兩山の尾根がくつきり輝いてゐる。屏風岩も高く天空に聳れてゐる。奥穂高の入口さ書いた石碑の所で一さやすみする。

休んでゐる内に急に又、穂高に入り度くなつた。その岩山への執筆が振り捨て難い。ヒシ／＼と岩の誘惑が身に迫る。未だ一時を過ぎたばかりだ。前後の考もなく夢遊病者の様にふら／＼と横尾谷を辿つてゐる。落葉が深く路を埋めて一歩一歩と歩いて行く足がふわり／＼と度々の中へ入る様だ。林の中の道、秋らしい感のする谷、この谷は穂高の谷の内が一番秋にふさはしい谷だ。出来るなら晩秋の頃軽い荷物を背負つてやつて来度い。森や林の中を彷徨ひつゝ、空想を給ふに一番ふさはしい谷だ。靜かさの漂ふ谷。途中から道が流の左に移る。そのあたりから道は登りになつて行く。横尾本谷に別れて澗

谷に入るのだ。屏風の裾を漸く廻り切つた。雪が谷を埋めてゐる。落陽のてり返しがひさしい、さう／＼耐へられなくなつて色眼鏡を取り出した。何と云ふあたりの景観だらう。屏風、前穂、奥穂、澗澤、北穂に囲まれた澗谷の美しさ。雪がたくさん残つてカールを埋めてゐる。雪の解けた所には長い眠を終へて待ち切れなくなつた草が一寸明を出してゐる。黴い岩に白い雪。雪溪の下を流れる水の音が聞えるばかり。岩小屋の下の雪のテラスにやつて来た。荷物を雪の上を下ろしてぞんだ。雪の上にはつきり投げてゐる山の影、眼鏡を通して眺む草木の緑さ。ピツクルで雪を掻いてきれいな所を口に入れた。その冷たさ。谷底には早く夜が来る。五時近い頃だつたので早や黄昏がしのびやかにおし寄せてくる。クランボンがもう夕暮れの薄暮まで堅くなりかけた雪に氣持の良い程良くくくく込む。岩小屋を探すのに就取つた。横尾の岩小屋は路の直ぐそばにあつてちぎにわかるが澗谷の岩小屋はガラガラ岩ばかりの所へ大きな岩が一つ轉つてゐてその下が洞になつてゐるものだから仲々見付かりにくい。漸く辿り着いた。早大の人達が互に挨拶をかはす。大抵澗谷が普通であるのに今日はゆつくりしてゐる。未だ早いので薪を集めたり早大の人達と話をしたりする。やがて近くの岩へ練習に行つてゐる人達も歸つて来て賑やかになる。之も早大の人達だ。

何と素晴らしい夕焼だらう。今年山へ入つて初めて見た美しい夕焼だ。明日は天氣だ。澗澤や奥穂の西側に黄金の輝きを見せて沈んで行く太陽。空にちぎれて飛んでゐる雲にその名残を見せて華やかな一日の終りがやつて来た。

ふら／＼やつて来たので米を持つてゐない。オートの一罐を頼りにしてゐるが作り慣れぬせいでうまく出来ぬ。味付も何も持つてゐないので閉口してゐるが早大の人達の厚意で米を貰ふ。焚火にあたり乍ら人達と快談する。色々話をしてゐる内M氏云ふのがさうも何處かで會つた様だ。二人共さう云ひ合つた。記憶を辿る内にやつこわかつた。澗田の河原で

會つた早大のリーダーだつた事を思ひ出す。親しみが猶更ら深かまつて岩小屋にふさはしい話が盡きない。日氏や王氏とも近付きになる。良い人達だ。早大は凄やましい。山岳部に良い先輩があり部にも立派なリーダーが揃つてゐる。

斯くして岩小屋の夜は更けて行くのだ。「燈籠の山」穂高は黒い夜の帳の中に腰の様な姿で靜まつてゐる。銀河が流れてゐる。星の輝きが美しい。穂高星夜、寝るに惜しい。岩小屋の入口で燃わてゐる焚火も火が暗くなつた。壁となつてゐる岩にうつる人影がゆらぐ。寂しさはいや増して来る恐ろしい様な靜けさの夜だ。蠟燭の淡くゆらめく燈を中心にして聞くなる。靜かに夜の宴が初まつた。ブランデー、山の淀の遅し飲み。自分もその變ひに加はつて岩小屋の夜の更けゆくを惜んだ。カラカラカラ、カラカラカラ、細間なく響く音。岩の落ちる音だ。異様な響、穂高の夜の更け行くを告げる音か、山男の子守歌か、毎日毎日、吾等時間、ひつきりなしに響く音。身も引き緊まる様な戦慄を覺ゆる。シューシューフツツに首をちこめ乍ら、小屋の一夜を、最後の穂高の夜を惜みつつも、扱はは眠りへこさつて行く。……

上高地へ

又一時頓眠りから醒まされた。岩小屋に寝る夜の習慣になつたさを見る。寒さが身に浸む。マツチを取り出してラナルネに煙を入れた。人々はすやくと煙やかな聲息を洩して平和な夢を辿つてゐる。彼から抜け出して残火ばかりになつてゐる所へ枯枝を積んで吹き初めた。白い煙がゆらめいてばつと火が燃わした。細松の枯枝がパチパチと勢よい音を出てる。他の人々の眠を驚かさまいと氣になり出した。黒いビロードの様な空に輝く星、岩小屋の前に腰を下ろしてゐる人が寒さを感じて中へ入つた、も一度眠られると思つてラナルネを吹き消した。

日の出前に起き出した。雪を一杯詰め込んだ飯盒を火に掛けて置いて離談する。

岩小屋の屋根になつてゐる平たい磐岩の上で朝の食事をする。飯は雪を解かして煮いたのだ。美しい谷の曙を眺め乍ら、山の朝の美しさ。今日は良い日だ。穂高を越して上高地に下りよう。早大の一行は前穂の北尾根に向ふので早やく出發、自分は今日下るのだからぐすくしてゐた。出發が七時になつた。ガラを横切つて湖谷の雪溪にかかつた。アイゼルを穿いてピッケルを頼り頼り穂高小屋に登り着いた。

重太郎は下へ荷物を取りに降りてゐて留守だ。二時間ばかりも待つたが上つて来ない。煮飯をしてゐる時松下や中島が登山客を案内してやつて来た。一緒に上高地へ下らうと云ふ。

奥穂から前穂へ、足の早いので有名な中島と一緒に一番先頭を歩いたので随分疲れた。他の人夫が荷が軽いから持たせうと云ふが、折角一人で歩いて来たのだから上高地へこのまゝで行き度いからとて厚意だけを受けた。上高地へ槍澤を下つて行くつもりだったので荷が大きい。穂高には無理だつたが然し良い経験だつた。

前穂の頂上では長く休んだ。霧が一杯で下の眺めをかくしてゐる。東京高校の人と知り合ひになる。一人は中學校だ。云ふのにその元氣の良いのには驚いた。自分の學校の人達にこんな人があれば良いに思つて見た。一枚岩も無事通つて、岳川谷の森に入つた。ガラガラ路が足にこたへる。さうせ上高地だからと思つて人々に遅れてゆつくり休む乍ら歩いて行つた。温泉が見えてゐて仲々行きつけない。長い森だ。中島や松下と話し乍らさうさう河童橋の袂に出た。七時だ。人々に別れて清水屋の方へ歩いた。

上高地に着いた。さうさう眠つて来た。いでの上高地よ、森よ、河原よ、梓の流れよ。穂高よ！ おまへの頃は楽しい

ものだつた。おまへをぐるり一周したのだ。望み通りに、又縦走路も殆んど歩けただらう。思ひ残す事はない。無事に歸らしてくれた。十六日間は長い旅だつた。然し楽しい旅だつた。そして又短い様な氣持もする。温泉宿に一寸寄つて櫓を渡つて對岸の中瀬に着く。天幕が六つも張つてゐる。一行は早やく来たんだ。部長や友や小さい人達。なつかしい人々。やがて持ち出された数々は未だ食事の讀んでない自分歸りへの御馳走だ。文字通りに山海の珍味だ。なつかしい人達に囲まれ乍ら盡きぬ話にキヤムプの悦びは益々わいてくる。

夜も更けて白樺の林に洩れる焚火も寧々、二三人と連れ立つていでゆから橋を渡つて歸つて来る時、空には銀砂子の星が瞬いて銀河がさつと流れて、熊澤の三本槍から奥徳高への橋を懸けてゐる。明神の上に一つ星がピカリ。空の眸の様な氣持がした。梓の川音も心持が靜かになつた様だ。

(一九二七・八・三十一)



南アルプス大門小屋スケッチ 前田 敏 文

南アルプス白峯三山甲斐駒縦走記

香 月 慶 太

昭和二年七月十二日

南アルプス行の第一夜を中央線の汽車の中に明した。吾々一行は各々七貫松りの荷物に歯五貫程のルツクサツクを引ずつて、七月十二日甲府驛に立つた。十二時三十分乗合自動車で鵜澤に向ふ。約一時間で鵜澤の町に着く。こゝで又飯富行きバスに乗換へ、目的地に着いたのは二時半。時間は早いがこゝから荒倉に行く、トロは朝の八時三十分の二つよりないので致し難く村はずれの坂本屋旅館に宿をさる。食後は前の早川の河原の散歩。十時床にもぐり込む。西山温泉を想像し乍ら寝に付かうとしたが何だか掻くてく仕方がない。到々一晩中蚤にせめられてねられず、徹夜して重税しをして居た。

九月十三日

昨夜の蚤のために一睡も出来なかつた僕はねむい目をこすり乍ら七時四十五分このエゲツナイ宿屋におさらばを告げた。早川を渡るこゝ四丁程にして大釣橋に出る。それを渡つて一丁程行けば新倉行きトロがある。道を少し行けば両側の岩層の中に薄山な貝の化石を見出す。黒い岩の中に白い貝が散在して居て美しい。ピツクルで細さうとするが岩が堅くてすぐに破れて失ふ。丸今のトロの所に出たのが丁度八時。このトロは新倉の水力電氣を設立のため材料の運搬をするもので吾々はその便乗をしてゐる譯だ。馬の引く十数臺のトロがガタ／＼動き出す。眼下には真赤な水流に白い泡の飛ぶ早川を見、

向ふの方の雄大なる山を仰ぎ乍ら四時間のトロ旅をつゞけて十二時荒倉の小村に着。全村皆バラツク立て、カフエーあり料理屋あり、礦山氣分の濃れた村だつた。氷屋でマダロのすしに腹を作り荷物の整理をして一時過ぎ教へられた方向に道を辿る。三つのルツクサツクを二つに詰めかへる。お互ひの荷物約九貫餘。早川に沿つて駄馬の如く奴隷の如く只喘ぎ乍ら溯る十分歩いては五分休み谷間毎に水を呑み徐々たる歩みの中に尾根又尾根、谷又谷と山は深く、小島の嶺より早川のせ、らぎの他は何者も聞へず全くの幽静の境を渡る。約一里、突然吾々の前に千仞の谷を前に數百尺の高所から二段になつて落ちる一大瀑布が現れた。その崇高なる事、その壯麗なる事到底筆致に盡さる可きものではない。偶々人がきたので何さいふ瀧か尋ねたが知らない云ふ。この道は水力電氣敷設のために出来たトロ道なので最近開けた處で從つて人々にも餘り知られてゐない瀧なのだ。その數千丈の谷にはコンクリートの橋がか、つてゐる。前田にスケツチをしてもらひ小憩の後トンネルをくゞつたり谷川を渡つたりして再びくゞく。厨のルツクサツクが喰ひ込む。只地圖を照し合せて深く入りこむ事二時間にして下湯島の村に着いた。こゝもバラツクのみの村である。五時を過ぎてゐる。然し吾々の行程は未だ一里足らず残つてゐる。泣きたい様な氣持になつて下湯島と上湯島との間の丘で休んでゐる。一人の男がやつて来た。偶然な掛り合ひで話しをする事が出来、案内人に関する事等の詳細を知り序に朝光の事もたのんで置く。朝光の父親はこの邊の山の主だ云はれてゐたさうだ。然し今年からはもう年だから山には行かぬさうだ。今では朝光が一番よい案内人である。さには先甲斐山房會から聞いて来て居たから早速頼んで置いた。少量の荷物を、明日西山温泉に朝光に持つて来てもらふ様に云つて預けて出發す。ランタンに火を入れ葡萄酒に元氣をつけて重い足を引ずり乍ら夜道をてくる。左は早川の急流が下の方にひゞいてゐる。右は切り立つ山が吾々の上に覆ひかぶさつてゐる。月の光はさざされてゐる。天候はよくないらしい。

前田は足が吊るさ云ひ出す。昨年の事を思ひ出して心配する。然し僕もこれ以上歩けないさ云ふ程に疲れてゐる。かへすゝも昨夜の夢がうらめしい。突然吾々の目に白い立札が寫る。西山温泉の立札だ。右は新温泉、左は舊温泉と書いてあるらしい。先に舊温泉がよいと聞いたから左の道をさる。後少し思ひはするが足はもう動かぬ。到々座つたまゝ立てない様になつた。ルツクサツクすれがいたい。八時半やつて今夜の宿西山温泉に到着。すき腹に簡単な晚餐をつめ込み早速風呂に行く。露天風呂、室内風呂がある。やつと出た星の明りをたよりに湯灌にうたれ乍ら今日一日の疲れをやすめる。湯から上つて何をする間もなく床に入る。七時半もかゝつて三里の道を歩かねばならぬ荷物が頼にさわる、等考へてゐる間に寝入つて了ふ。

七月十四日

本當ならば今日から縦走の第一歩を踏み出すのだが案内人との打合せのために滞在する事にした。然し心は緊張してゐる。か六時には目が覺めた。早速風呂に飛び込む。早風呂の心持よさ！朝食をすませてから明日以後の行程に就いて色々考へる。家や學校に通信する。十二時近く約束して置いた朝光が尋ねて来る。如何にも信頼出来さうな人だ。頼もしい様な氣になり、すぐ打ちくつろいで今後の行程に就いて相談する。中食の時間が来たから膳を共にする。漸くプランが出来上つた。然し仙丈を中止するのは残念だつたが朝光が餘り腹を勤めるので日本唯一の御影石高山云ふ肩書につられて行く事にして丁つた。最初は兩方共やつつけ機かしたが吾々は廿二日迄に松本に行つて尋常科隊の上高地行に合しなければならぬので日数がない。順調に行つてもやつと行けるか行けないかだ。ノンビリした感じの南アルプス連山なら、こちらもゆつくり歩かうぢやないかこの意見がましまつた。荷物が重いからも一人一人夫を連れて行くことにする。食料米は、人夫衆は一日七合、

メシ等は五合と相場が決つてゐるさうだ。さても一日に七合や五合は食へぬがその餘分が糠飯の米に充てられる事になつてゐる。米全部で一斗二升、味噌や鮓はこゝで分けてもらふ事にした。明朝八時を約して朝光はかへる。玄關で人夫は岩魚を釣る人を頼んで置く。午後三度風呂を浴びて前の湯川に下りる。水の緩な水にタイダーを冷して置いて前田に三枚程スケヲチをしてみらう。夕食は食堂に行つて食べる。夜は何もする事がない。十一時この温泉最後の入浴をした。丁度一日に五回も入つた事になる。やがて草木もねむるだらう十二時に近い頃、只湯籠の音だけを耳にして靜かに湯に浸つてゐる時吾々の念頭には俗界の塵芥と云ふものはすっかり消え失せて了ふのである。上つてから明日の用意を一すして直ぐ寝る。

七月十五日

いよく目的の行路の第一日が来た。六時半起床、風呂に行きたいがダレか来るさいけないからこゝで我慢する。八時朝光が人夫を一人連れて来た。米等を分けてもらつて出發。湯川に沿つて下る。早川に合した所を右へ渡る。丁度奈良田の村の中途位の所で白河内の殘雪を見る。奈良田で農家の冷水に喉をうるほし元氣をつけて向北に進む。人夫は五頁、案内人は三頁と規定されてゐるさうだが人夫は八、九頁案内人は七、八頁も持つて呉れて居た。村を通りぬけた所で釣橋を渡り早川を右手に見て少し行き廣河内の澤に出た丸木橋の傍の苔藓した岩の上で中食をする。前田の素早いスケッチの中に三人の姿が書き出される。それから澤を渡つて尾根ばかりを、上つては下り、下つては上りして單調な落道を行く。天候は快晴。顔や手がビリ／＼する位やきつける、喉がかわく。やがて澤の北行する所に来る。少憩、近く／＼落ちてゐる新しい新聞紙と繻絹の殻によつて二日先に出發した九州大學の一行もこゝで休んだのだなと知る。この邊の水はもう氷の様に冷たい。手が痛い程である。澤を渡つて尾根の上に出てそれを越せば、タル澤である。これを横切り又尾根に出る。こゝからはもう大森林

だ。何百年何千年も斧を入れられぬ木がウツサウツサとして繁茂してゐる。地面は總て青い苔に覆れて足を踏み付けるのも氣が引ける位である。所々太木が朽ちて倒れてゐる。原始林の様な感じがする。濕っぽい穢臭い匂ひがする。冷い空氣に盛夏の暑さも忘れて了ふ。氣分がセイセイするので足が軽い。然し苔のために斜面等は歩きにく／＼骨が折れる。大門の澤に出てこれに沿つて西行する。河原は歩きにくい苔の上以上だ。靴の山綱が響にさわる。一寸油断するまゝ足をすべらす。四ツ廻りの様になつて行く。測るにつれてガレが多くなり斜面が急になる。大唐松山の黒い峯が前に現れてゐる。始めは雨泥山からアノ山を通つて農島に行かうなんて考へてゐたんだアノ前田と笑ふ。未だか／＼小屋の事ばかりを思つて歩くさかへつて辛い。やつと小高い所に根屋を見付けた。ソレと急ぐ大きなガレが二つも横はつてゐる歩行がはかばかぬ。さうかこゝか喘ぎ乍ら大門小屋に着いた。この小屋は材で立てたさうだが、この邊の木を切つて来て太い針金で木をつないで作つてある誠に粗末なものだ。然しアルプス氣分が出て申し分ない。僕等は早速カツエルでココアをして興奮をうながす。人夫の衆は鋸と山刀を持つて薪木を集めて行つて呉れる。やがて夕飯の仕度がさゝのつた。大きな鍋の中では米がグツ／＼つばやいてゐる。餘りに夜のトバリが下りて黒いヴェールはこの世界を包んで了ふ。ラタルネに火をつけて食事をす。日誌を付ける。人夫の衆は飯がすむとすぐ寝て了つた。明日は今日以上に辛いと聞いて僕達もすぐスリーピングパウダにもぐりこむ。今日の行程三里半、小屋は南岸の一入り込んだ所にある。水は小屋の裏に清水が湧き出て居る。薪木は勿論その邊にいく／＼でも轉がつてゐる。ひさい寝れに、横になるさ一横に、寝入つて了つた。八時半。

七月十六日

全行程中で一番苦しい日だ。天氣はよし、早くから起きた外の三人は飯をたいたり味噌汁を作つたりして呉れて居た。前

田は早や小屋のスケッチをして丁つて食器を洗ひに行つてゐる。急いで食事の準備をする。今日のコースの話をし乍ら朝食をすます。七時出發、尙石のガレを端ぐ、前田はビッケルが大分邪魔になつて居るやうだ。やつと澤の北に曲がる所で始めて雪に接する。元氣が出て雪の上に躍り上る。こゝから少しが雪渓だ。一丁ばかり行つた、澤の二俣の所で休む。これからは明日迄水がないさうだ。雪渓の下にもぐり込んで水を水筒につめる。恐しい程つめたい。左の澤の雪渓を登る。急坂で歩行がにぶい。モチ／＼足を進める。雪がかたいのでよく滑る、小さい雪渓がボツ／＼とあつて一寸面白い。ガレの様な所ばかりで疲勞が甚しい。もう少しで登りつめる云ふ一寸手前で休憩、人夫の衆は第一の飯を食つた。吾々は餘り腹がへつてなかつたので後ですることにしておいた。右のハヒ松の中の急坂を攀る。とても急だ。白樺の細いクネ／＼したのが一パイ生へてゐる。この道は昨年切り開いたばかりの道ださうで未だ歩きにくい。所々胸を突きさうな所に出會す。雪田があつたので僕と前田はこゝで中食をフツ／＼かつた。峰の上だから風が少々強い。ハヒ松も短いものばかりで、崖の上に立つて歩くのだからすぐ滑つて足をふみ込む。杖が少々頼りにならぬ。ハヒ松をコイでは石コロの上を行き、これをくり乍ら農鳥頂上を目がけて突進する。農鳥の上は平坦で岩が所々にボツ／＼あつてあちこちにハヒ松の塊がある。岩つばめが飛び交ふてゐる。南を見れば赤石、惡澤、鹽見の諸岳が眼前に控へてゐる。すぐ下は大井川の源だ。鹽見岳の大ズレもよく見へる。岩に腰を下して苔を喰り乍ら四方の景色に見られる。富士の端麗なる雄姿も格別な趣がある。今迄の苦勞も何も皆忘れて小走りの様にして農鳥の一等三角點の上に立つ。空罐の中に澤山名刺が這入つてゐる。農鳥が見へないか一目を丸くしたが見付け得なかつた。農鳥の頂上は全部小石を以つて覆れてゐる。岩は赤味がかつたデコボコの黒い岩でそれにはバリ／＼の苔がついてゐる。その苔は味噌汁の中に入れて喰へば食べられる云うがガイドが説明して呉れた。味も何もないさうだ。フト玲瓏

の事を思ひ出して尋ねると、昨年から禁獵になつたから獲られない云つた。雨の翌日にはよく岩の上等で毛を干してゐるさうだ。冬は狩人がよく惡澤の方に出かけて行つて必ず一日に二頭位の獲物は持つてかへると惡澤の方を指さした。色々話をしてゐる間に大部時間が経つたのでソロ／＼石室の方に足を進める。農鳥と同じ位の丘がその西北に通つてゐる。それを越して下に降りればそこに室があるさうだ。四方の景色に見られて、トモすれば足を石の間に狭みさうだ。ハヒ松と石コロとの上を危い足取りで行く。農鳥の端の所に來た時向ふの方から二人の人が走り乍ら來るのを認めた。ア、人だ！ 一日人を見ないさう面白いものだ。先方の人は一羽の雷鳥を見付けて石をぶつけてゐた。「ヤア」簡單な内になつかしさがある。今夜は石室で？ 「ハア」「チヤ又後程」二人は急いでゐるらしく農鳥の方に行つて了ふ。吾々もモチ／＼丘を登る。登り始めた所で人夫の延道が雷鳥の誰をつかまへて來た。雀位の大きさだ。これはさつきの雷鳥の子だ云つてゐた。ボケフトにその誰をもらつて入れ、下に見へる今宵の宿を目がけて丘を下り始めた。急な坂だ。朝光が急に、今夜は室に這入れるが知らん云ひ出した。さつきの一行が室に居ると思つたからだ。それに室を見れば煙が立つてゐる。さうすれば未だ何人が残つてゐるんだな、云ふ事がわかる。そんならさうで寢やうか。丁度石室の一寸手前に雪田がある。あそこは風も當らずによいだらう。マア行つて見やう云ふ事になつて降りつゞける。五分程で雪田についた。ガイドが室の中を見に行く。前田と僕は腰を下して、さうか室の中で寢られる様に願ふ。ガイドがうれしうな顔をしてかへつて來る。室の中は今一人の案内人だけで先の二人と三人ださうだ。占めた。元氣を起して室迄行く、年寄りの案内人が未をさいでゐた。「ヤア」「今日は」等云ひ合ひ乍ら室の中に入る。紅葉を作つてのむ。水は、常はないさうだが丁度湯にまけて、雪が流れてゐるからさう桶で水をくみに行く。やがて先の二人がかへつて來た。明日は農鳥には行けないから今日行つて來たさうだ。晩飯は辨當の

残りでお茶を作る。香気な旅の晩だ。大分風が出て来た。ホタツた顔を外にさらしに出る。星は銀砂の機だ。美しい。月は頭の上で微笑んでゐる。黒い大きな圓盤の山々が今靜かに張りに臨んでゐる。危いさは知りつゝ、自然の大氣に引づられてアチコチミヅラつく。九時半就床、大分寒い。シュラーフザツタの天窓を開けて縮み乍らねる。火はチヨロ／＼と山小屋に透し氣分を出す。煙を擧げてゐる。雷鳥の聲を石の間に聞けて置いてやつたが、この寒さにはふるへてゐるだらうといふ心配をする。皆の寢息がリズムにひびく。何時の間にか夢の國にすひ込まれて了つた。

七月十七日

室にははち切つた月が寒々こふるへてゐる。小さな星がまたゝいてゐる。石室の中は冷々こしてゐる。たき火が最後の息を引きさるかの様にかすかに明滅してゐる。「さよなら」「さよなら」「では御無事で」昨夜偶然同宿したK校の一行は出發した。山々は間の中に未だ夢をむさほつてゐる。朝の四時である。Kと人夫とは昨日の疲れが死んだ機になつてゐる。ガイドは起きて薪をくべて煙草をふかしてゐる。石室の中は焚火の煙で一パイだ。目からやたらに涙がにちみ出る。朝餉の鍋がかげられる。間のグエールが一枚々々がれて東天の空は今靜かに開けてゆく、紺碧の空に白味が、つて来る。むく／＼と波うつ雲が、桃色になる、そして山々がもやの中に一つ／＼浮出て来る、眞赤だ。靜々たる日輪は英雄の如く嚴かに雲海の果より、そして夜の天地にぬむれる總ての物に今日の日の始まれるを知らすかの如く、徐ろに現れて来る。何と云ふ崇高さだ。その日の光に富士のたゞ麗な姿が浮き出て来る。己に星も雲も露もその前には影をひそめやがて甲府盆地が一萬尺の脚下に廣がり出る。富士五湖が朝日の光を浴びて反映する。好天氣だ。前田の日記だ。僕は寢坊で南アルプスの御來光もそのための見損なつた。それで此の部分は前田の美しい記録の一節を拜借した。(今後其部分は前田の日記を基として書

いて行く事を機め御断りして置く)。

「オイ！飯だぞ！」皆は起きてもう鍋を前にしてゐる。早速茶碗と水碗とひつ揃んで飛び込む。四人のさゝやかな食事が青天井の下にひろけられる。大時半、今日の登高が始められる。東の富士秩父、地蔵風風の諸山が近く遠く或ひは輝き或ひは紫色にかすみ高山でなければ見られぬ絶景だ。南を見れば農鳥岳をバツタに建つ石室がシオンボリ淋しうに残されてゐる。さ半らの繪だ。西には左から赤石、ツル澤、鹽見岳、遠くは木曾の山々迄が手にさる様に見える。北は相ひ憎く間の岳にさへざられて見へぬがそれでも左の方には三棟を越して仙丈の英姿が浮び出てる。岩と斜面との競争が繰り返される。未だしつゝ夜露に濡れたハヒ松をこぎ乍ら行く足元はぐつしよりぬれて了ふ。野呂川の流れが脚下に曲折してゐる。やつと着いた。頂上だ、一時間半を費やしてゐる。ノンキな旅だ、前の雪道を前導した富士の美しさは如何だ。北を見る。北アルプスの全景がパノラマの様に展開されてゐる。槍、穂高、乗鞍は勿論の事機の噴煙から白馬、立山の方迄も白く光つて見える。前田は素早く二三枚のスケッチをやつた。ガイドやポーターは煙草をブク／＼やつてゐる。夏の太陽だ、やはり膚にこたへる。前田の首が眞赤だ、鼻筋が赤くなりかけてゐる。僕は登山帽を着てるから餘りやけない。只腕がヒリつく。前の北岳に向つて進む。その後には駒ヶ岳の白い肌がひかつてゐる、間の岳と北岳との鞍部だ。一照する。フトこゝから左の鞍部にラツセルしては如何かと思ひ付く。手ぶらで間の岳から北岳往復が二時間かゝるさうだ。この荷を持つて北岳に行けばそんなに時間をさるだらう。皆で直接下にラツセル出来るか如何かを調らべる。ポーターが一丁程先の尾根に行つて見て来る。大丈夫行けるよ。頼母しい報告だ。しかし朝光は仲々そうしやうさは背がなかつた。この態度も又頼母しい。大事に大事を踏む心持がうれしい。こゝで中食をおつかう。食後朝光は尙念入りに調べてゐた。そしてやがて、「ちやア行きま

せうかい」云ひ乍ら歸つて来た。朝光の賛成を得ればもう大丈夫だ。安心して荷物を置いて出發用意に取かゝる。バイナツブルの鐵結を一個持つて行くことにする。北岳は案外に樂だ、しかし荷物があれば二倍の時間を費すだらう。今迄進つて身が軽いから飛ぶ様に北岳の頂上に進む。赤茶けた岩ばかりだ。頂上は、くたの脊の様になつてゐる。北側の頂が最上點である。四方の眺に見取れて了ふ。十二時だ。雪に冷したバイナツブルに舌鼓を打つ。こゝからの眺めは間の岳の頂上と略同じだ。只小太郎岳への峯がよく見えるだけだ。下の方に大樺池が小さく見える。頂上の東北面は數百尺の絶壁である。昔は銅の堂宇に黄金の像で名高かつた日の神も今は只石を刻んだ小さな名ばかりのホコラになつて淋しく取残されてゐる。風ふけば音あり、云はれた音をしのぶ。十二時半下山の途に付く。鼻の先をかすめて岩燕が飛び交ふ、こもすれなくすれ落ちさうな岩に爪の先まで注意をはらひ乍ら下りる。ひさい岩だ。靴がすべつて幾度もなく膝を冷す。ころがり落ちた石は數千尺の谷底をめぐりて碎け飛び停る事も知らない。高山植物がこの一萬五六百尺の山頂まで可憐な姿を荒くれた岩間からのぞかせてゐる。雪に包まれ壓し付けられて春を知らない草花も夏の陽の下に可愛く微笑んでゐる。大きな自然の壓迫である雪から開放されてその美しい顔を出したのだ。涙ぐましい種な感じだ。こうした氣持の内に吾々の心は一人にて淨化されて行くのだ。大自然の一石一草にさへ同感ししてその大氣に溶け込む事が出来るのだ。突然東の谷から霧が湧いて来た。急ぐ。一時先の肩の所まで歸つて来た。荷物を背負ふ。これからは今迄數千年成は數萬年この方誰一人として歩いた事のない土地を行くのだ。何だか心が躍る。道へ松と白樺のブッシュだ。手袋をはきシャツで體を全部包んで下り始める。急な斜面を松の枝に振り下り乍ら下りて行く。吾びしろ落ちて行くのだ。下に行く程松の丈が高くなる。針葉が肌をさす。さもするさお互ひの姿が見へなくなる。「オーイ」「オーイ」と聲をかけ合ひ乍ら下る。道い松のブッシュがすぎれば直ぐ又

白樺だ。大丈夫と思つて握る杖がギンと折れたり、グツと踏んだ土地が木の葉の上で足を滑らしたり、一通りの幸さではない。荷物の反動で體の自由が削がれる。二時半漸く少し開けた所に出る。白峰キャンバイやギンバイがそこいら中に亂れ咲いてゐる。少憩、朝光と延道が先年の朝露の宮様のお供をした時の思出を語り合つてゐる。「サア、いかすか」と云ふ朝光の言葉に夏の午後の陽に夢心持になつてゐた僕は驚いて立上る。少し下りれば澤に出た。愚痴をこぼし乍ら木々の枝につかまつて急な澤を下る。二時近くやつと眞澤の本澤に出て雪溪の上で休憩した。雪溪は小枝と松葉でマダラによれてゐる。その中に蹄鹿の足跡が點々印されてゐる。しばしの後吾々は谷間に沿つて出かけた。時としては瀧の上にも出會した。時としては雪溪のシュランドに立ち止るのを喰つた。その度毎に吾々は急坂の木の間を四這ひになつて難所を横から越さねばならなかつた。朝からの疲れに今先のラッセルで足は只機械的に動くばかりだ。やがて雪の上に人の足跡を見出す。多分二三日前の人だらう。谷合は益々峻峻なるので吾々は山の中腹まで離れ登つた。前も後も右も左もさうも切立つた山の尾根先ばかりだ。再び本澤に下りる。微臭い、洞穴の臭でも想ひ出さうな臭ひが鼻を突く。二俣の小屋は一向に見えないが谷は大部開けて来た。歩行もすつと楽になつた。ポーターの延道が岩魚を釣るさ云ひ出した。手際よく川原柳の枝を切つて来て釣竿を作る。日は未だ高い。小屋は間近だ。朝光は赤ら顔に微笑を浮べて煙草をふかす。さうさうと流れ落ちる瀧壺の早瀬に四五度半がひらめくさ早針先には魚が躍る。腹の朱色に光る岩魚は砂の上をはね廻る。手に取つて見るさ形は鮎さ大差ない。上高地の特産に居る岩魚はは分違つた所がある。「ヤモメ」と土地では云ふさうだ。飛沫の飛散る清流の中に動く黒姿は到底吾々の目にはわからない。延道は二三分の間に五尾程を釣り上げた。毛針が企みに岩魚の鼻先に投げ入れられると思ふさ鱗が白く赤く陽の光にきら／＼輝く。四時に近い、ボツ／＼釣り乍ら出かける事にする。重い荷物を負ひ乍ら身

經に延道は釣り上げて行く。前田は飯盒に一パイ魚を入れて居る。朝光が河原柳の枝に魚を通してさけてゐる。五時近くに三棟から發した野呂川との合流點に着く。雨俣だ。前田と僕を待たせて置いて二人が小屋をさがしに行く。丘の上に小さなネコラが垣間見ゆる。歸つて来た朝光が、もう少し下の方にあると書いてあつたよと云ひ乍ら荷物を背負つた。僕達も續く。二三丁ばかり行く。川の左岸の小高い所に、まだ新しい小屋が立つてゐる。苦心して川を渡つて小屋に落着く。例に依つて早速コ、アが出来上る。熱いのに舌鼓を打つ。延道は一人で又魚を釣りに行つた。よほど好きらしい。夕飯の仕度をする内に、はや暮れ易い谷間の日は薄暗くなつて行く。前田が顔を押へてヒリ／＼するまゝ居た。夕飯がにやる頃竹ぐしにさ、れた岩魚は鹽にまぶされて二十五六尾も焚火の廻りにつき立つ。僕は近頃餘り川魚は好かぬ様になつて来たがそれでも二三尾頭からかぶり付いた。とても素敵な味を持つてゐる。やがてラタルネにはの暗い火が入つてゆめくほかに吾々はもう寝に就いた。ひさい疲れに綿の襦になつた體は板敷きのこんな粗末な小屋も黄金の宮殿にも優る有難いものだつた。谷間の響きが耳にやかましく入る。ランタンを消した後は焚火の煙がチヨロ／＼と天井に映る。山小屋だと云ふ感じが一入きつく感ぜられる。

七月十八日

五時半起床、延道は起きるさすぐ又釣に行つたさうだ。よほど好きなんだ。朝光も「上手なもんさ。この山ちや一番だね」と云ひ乍ら微笑してゐた。煮返る味噌汁の中に昨夜の残りの干し岩魚が小さく千切つて投げ込まれる。油が浮く。やがて又數尾の魚を振ら下けて延道がもつて来た。簡単な朝食がこの美味な味噌汁で振られる。生きた魚の腹をさぐりから殊の外うまかつた。出發用意がなつて小屋を出る。昨日の様に延道が先に釣りをし乍ら進む。魚は柳の枝に通して朝光がさけ

た。魚の数が殖へるに従つて道が進む。複雑な様で單調な河原を玲瓏やチンの足跡をさぐり乍ら延道の後を追ふ。空が曇りだし、それに河原沿ひだから餘程寒だ。さ云つても一方は岩鼻が水の中に突出してゐるさういふ様な所が幾つもある。その度に滑る足にビク／＼し乍らその岩鼻を攀ちねばならなかつた。まして兩側が絶壁の場合等命がけだ。直立した様な岩では僅かな裂隙さきむした木株とそれに細い木の枝が何度もなく吾々の命の綱となつて呉れた。振ら下つた木で根がみ抜けたり、飛び下りた岩がすり落ちたり苔と枯葉の上にある物の危険さをしみ／＼味はつた。さうしても徒勞の外ない時は案内人や人夫は附近の丸太を持つて来て、自分は身の切れる様な水の中に浸り乍ら、橋を作つて渡らせて呉れた。ソラジがはき度いが足袋がないため残念だがこの靴のまゝで歩かねばならない。時には一間餘の所を重い荷物を背負つたまゝ、飛び越さねばならなかつた事も一再ではなかつた。十二時である。小仙丈の澤に着いた。天氣が悪くなつて来た。汗が冷へて寒い。附近の枯枝を拾ひ集めて焚火をし乍ら中食する。水の様な水でレモンウオーターを作る。砂糖も豊富に入れたから美味い。もしこれが間の岳の上でも飲めたらナア等と笑つた。數丁行けば大仙丈澤に出る。この邊は所謂「テッポウ」と云ふ材木を流す所が澤山ある。今から二十年程前に自分もまだ若かつた頃この山の中に這入つて来て、木を切り出した時の名残りだ。朝光は昔を偲んでゐた。二時頃野呂川とはなれて北澤に入る。北澤の開口では少し分危い懸崖をやつた。この澤は比較的水量が少ないので歩くのには大した苦痛も感ぜられない。延道が魚と一緒にカッセルの誰を捕へて来た。愛くるしい眼をクル／＼させて居た。可愛さうだと思つて處してやつた。如何にも悦ばさうに／＼バタ／＼と羽ばたきして向ふの岩の上に停つたこちらを向いて首を振る姿は持つて歸りたい様な氣を起させた。澤の東に曲る附近になつて今にも泣出しさうだつた空からボツ／＼と滴ぐが落ちて来た。ソラ急げ、で夢中になつて足を早める。小石の上り下りは轡をグタ／＼にして失ふ。やつと北

澤峠の下に付いた頃雨も止んだ。一服する。朝光が二十年昔の思ひ出語をして呉れる。朝光の御自慢は自分達三朝香の宮様と一緒に寫した寫眞を持つてゐる云ふ事である。小屋はもう直ぐだ云ふので早く着いて飯にしやうと急ぐ。やがて木の間に北澤の小屋が目に入る。オヤ、煙が出てゐる。何となく親しい様な氣になつて馳け付けて小屋に首を突込む。「ヤア」挨拶をして中へ入る。三人に案内人一人の四人達だ。簡単な會話を交へる。岩魚が料理される。竹ダシにつきさ、れて焚火に焼かれる。鍋がかけられる。五時半夕飯を食べる、今日は昨日等に比べるゝ疲れ方が少い。七時半明日の天氣を氣にし乍らシユラーフ、デブクに這入る。もう後二日だ。體を大切にして置かう。しかし明日の天氣は實際心配だ。今にも又降り出しさうだよ。風が吹いて来たぢやないか。ラチルネの煙がボタリと白い滴を板の上に落す、同泊の人達の寢息が聞へる。前田ももうねたらしい。雨は急な坂ばかりださうだ。早くねむらう。

七月十九日

五時フト目が覺めた。珍らしく一人で起きたのだ。「今日は早く起きたらうや」「馬鹿もう五時だぞ」前田なんかには五時云へばもう早いのではないらしい。天氣が思はしくない。前田は、昨夜一時に目が覺めて外に出た時、風は強かつたが星が所々またゝいてゐたし、三時に起きた時は空は暗れ上つて無數の星がチカ／＼して居り、仙丈には月が微笑んでゐたのに云つてゐた。風は強い、治りさうにもない。今にも降るかと思ふ程暗くなつたかと思ふと陽が仙丈の雪田に映へる。風の嫁入りだよと笑つた。朝飯を不安の中に終へた頃から愈々天氣が悪くなつた。サア烈風と共に夕立の様な雨が降つて来た。サア今日は行けるだらうか？「むつかしいネ、小屋ぢやこんな雨が嵐ぢや大變だ」と朝光が云ふ。ガイドの言葉だ今日一日龍城を決める。四人達は澤沿ひに兩俣迄行くんだから風はこたへないだらうと云つてゐる。出發することにしたら

しい。名刺の交換をする。東大の一行だ。「では御大事に、さようなら」「兩俣迄は澤沿ひで樂だから雨さへひきくならなければ大丈夫でせうよ」こうした言葉の中に一行は小屋を去つて行つた。急にガラシなつた小屋の中に煙がくすぶる。焚火がチロ／＼と淋しげに燃へてゐる。食料品も明日限りで米がなくなるかも知れぬと云ふ不安や、天氣を氣にし乍ら龍城してゐるので到底氣には出来ない。米は後二升程しか残つてゐない。午飯はお粥だね。我慢しやう。腰節やするめ等があるから萬一の時は大丈夫だがもし明日までも天氣がなほならないならば戸臺に出やうと考へた。朝光に相談する。戸臺迄は割合樂だが只一つ北澤峠を通る間の平らな所が少し危い。風が強ければ歩けないだらう。しかしそれは河原ばかりで危険は少しもない。道も大して遠くはない。だけさ河れにしろ仙丈迄も断食して来た目的の胸をやつつけないのが残念だ。午飯のお粥がかけられる。飯を喰ひ終つた頃から空模様は幾分よくなつて来た。暮も仙丈の頂を去つた。風も静ないで来た。朝光がきせるを落したから云つて附近の木の小枝を切つて来て作り始める。針金を火にくべて枝の髓をジリ／＼と焼く。もう少しさいふ所で割れる。延道迄も加はつて作る。面白さうだ、遂には僕までがつり込まれて了つた。色々の木の枝を取り集めて来てやつて見るが完成迄は仲々行かない。餘り堅すぎたり餘り軟らかすぎたりして適當なのがない。到々こねりこね見付けて来た、これなら樂だ。中に軟い髓が這入つて居る。二三度針金を通せば直ぐに穴が通る。延道は手頃なのを作つたが最後の一削りで割つて失つた。紐でゆわけてそれでも充分煙草をふかせて居た。朝光は根氣よくやつて居たが金のきせるをつくりのものを作り上げた。僕はパイプを作つた。僕のが一番不細工だつた。太くて口ざわりがよくない。ザラ／＼してゐる口が荒れさうだ。三時頃もう何もする事がなくなつて了ふ。四人は只沈黙して火を見詰めてゐるばかりである。山小屋の午は物憂く物淋しい。天氣は略なほつた。仙水峠の方に陽が當り出した。「さうだ今からでも七條迄行けるだらうか」「先の人

達が七條にはもう人が這入つてゐる云つてたよ」「イヤ、駄目だ。さても行けないね」朝光の力強い聲に又黙つて了ふ。四時、少し早い飯の用意をする。明日はひどい坂だから成る可く早くねなければならぬ。五時夕飯を喰ふ。食後二日ばかり濡つた日誌をつける。前田はスケッチをした。河原を散歩する。ねるには餘りに早い、仙丈岳の大きな陰が仙水峠に映る。夕焼だ、うまい。明日は晴だ。風が出なければよいが心配し乍ら小屋に歸る。朝光と延道は薪木を集めに行く。少しの間山程持ち込まれる。六時半火をよくして置いてシュラフ、ザックにもぐり込む。朝光は焚火の火を切らせぬ様に火のすぐ側にねた。

七月廿日

五時目がさめる。朝日はまだ小屋まではさしてゐない。晴天だ。日本晴だ。仙丈の雪田が純白に輝く。今日は朝だ。気が浮き／＼する。米もたつぷり腹が膨れる。飯の出来る迄、延道が釣つて呉れた岩魚の鹽焼を家への土産にするために前田と半分宛に分けて荷造りする。やがて鍋が下されて晴れ／＼した氣持で朝食を喰ふ。若芽を餘り澤山入れたので味噌汁がまるで若目に味噌汁をかけた様な工合になつて了つた。けれども美味しい、昨日の事なすつかり忘れて失つて悶氣な談笑の中に飯が終る。今日は出来るだけ歩かうと云ふので急いで出發の準備に取りかかる。六時半小屋を出る、二夜の宿だつた北澤小屋はまるで住みなれた吾が家の様に思れて別れが惜しまれる。今日の行程は最後の花をかざる甲斐駒登攀なんだ。廣い大石のゴロゴロとしたそして闊の三尋もあらうと思はれる大木が丁度屍の様にあちこち横つてゐる、澤山云つた様な感じの少いこの北澤を上流へ指して渡る。杖の石付きが石に當つてカチ／＼と音を立てる。水がサラ／＼と流れてゐる。單調な歩行だ。十丁足らずの所で澤が急に狭つて小さなカスケードがかつてゐる。少憩、朝光がこゝから七條まで水がないから水筒

に水を入れる様に注意したので冷水を一パイにつめる。水筒の外側に水滴がすぐ付く。右岸の榎木林を行く。はひ松もある先頭立つた僕はズボンが濡れてぬれて氣持の悪い事この上なし。朝光に代つてもらふ。数丁続く。やつと林をぬける。今度は岩のガレの上だ。よく盆栽にしてある様な穴のあいた岩ばかりだ。赤黒くて凸凹で一すわつても傷をしさうだ。ゴロゴロと動くこれ等の岩の上をピョ／＼飛び乍ら行くのは痛快だ。朝日が／＼やく、空は眞青だ。フト下を見るに古水溜の様なものがある。木の陰になつて暗く水草のある所は害獣の住家の様だ。よくこんな所に沼があるものだなと不審に思ふ。水はきたないさうだ。左の林の木梢にチョッピリ胸の白い頭が見える。後数時間であの上に行くのだ。ガレを横切り終へる。突然眼前に甲府盆地が展開される。しばらく見なかつたので何さなくなつた。左に駒の、處女の肌の様な無垢な純白な姿が太鷗に輝き乍らそびてゐる。何だか崇高な氣分に光される。右にはアサヨ峰の尾根が見える。この峠の這ひ松は西側は岩ばかりで東側にのみ密生してゐる。丁度散髪屋で頭の前から半分をかり切つた様に思へて驚きがある。西風がつよいためのだ。木の枝だつて皆東の方にばかり向いてゐる。前田は早速積具を取り出してスケッチを始める。朝光と延道も僕は岩ガレの所で雑談に花をさかせる。駒島が駒ヶ岳でなくのも面白い。九時前田のスケッチも出来上つたので出發する。郡界を沿つてゐるのだ。所々に杭のある事で解る。前田と二人先に登る。最初森林であつたのが足の運びの重くなるに従つて雑木に代り、這ひ松となり遂には石ばかりの所になつて了つた。アサヨ峰がすつかり見える。平凡なものだ。その向ふに地蔵廟風の英姿が浮んでゐる。目を轉じて北方を見れば、左に仙丈の大きな姿がドツシと控へ真北に駒島の切つ立つた峰が見える。常ならばこゝで午飯を食ふんださうだが未だ少しも腹がへらぬの時が餘り早いので駒の頂上であつたかゝるにこゝにする。この峰から岩の上ばかりをゴロゴロと少し降り又大岩石の間を縫ひ上を這ひして駒の頂上に突進する。後を振り

退れば戸蘆川がうねつてゐる。戸蘆の村も見へる。昨日はあすこに下らうと云つて居たのだな。道で二つのバーチに會つた。北澤小屋に行くさうだ。この山の石質は前にも述べた様に全山花崗岩で包まれてゐる。芦原のロッタカーデンも同じだ。しかし蘆木や這ひ松が大部澤山生ゐてゐる所がある。その邊は岩が圓いのだらう。頂上はブル／＼する様でロッタカーデンもつくりだ。大きな柱の様な石が数個突出してゐる。その一つによじ登る。こゝでも一萬尺近いのだ。馬頭觀音が祭つてゐる。唐金の立派なものだ。中食をあつかふ。山では最後の食事だ。所々に劍が祭つてゐる。パイナップルに喉をうるほす。出来れば今日中に里まで出たいと思ふ。時間はまだ十一時半だ。下には甲府の町から日ノ春、蘆ヶ原がすつかり見へる。汽車道見へないかなと一同は笑つた。前田はスケッチをして呉れる。錫岳の西腹にトタン屋根の小屋がボツチリ光つてゐる。アサヨに續いて東南に地蔵風、醫師の白い花崗岩の頭が見へる。遠く富士がかすんでゐる。秩父の連山も雲の中に頭をあらわしてゐる。北アルプスの雪がかゝやく。下山の途に就く、十二時半だ。道がわるい。雪の上をすべり乍ら下る。道は益々悪くなり所々に鎖りが振ら下けられてゐる。人夫の衆の荷物はもう殆どないが吾々の荷物は消耗品が進入つてなかつたので依然五貫位だ。岩には邪魔になつてしやうがない。やつと七條の小屋に着いた。爺さんがゐる。こゝは七合も云ふ。御菓子に湯茶をすゝる、御菓子は久し振りだ。美味い。登山者の署名簿に署名する。この邊で天幕を張る筈だつたがこんな早ければ里迄下れさうだ。この小屋の爺さんに別れを告げて五條へさ下る。途中蘆邊が二つ程あつた。行者にはよいなと思つた。大門澤の附近の木々は全々廻きが違つてゐる。然しやはり大森林の様な感じがする。五條迄は七合目からもすぐ下に見へてゐたので近かつた。小屋が二つある。片方は無料休憩所で山の尾根の切り取られた様な断崖のすぐ下にある。地方は少し下つて又上つた所にある。この小屋の方が古い。こわれかけた様だ。水は一丁程行つた所に湧いて居る。有料小屋

の横に岩穴がある。雨の時なんか一人位ならそこで、も寝られぬ事はなからう。こゝからは新道と舊道の二つがある。舊道をゆくことにする。最初は相當急な登りだ。兎に會ふ。未だ三時半だ、この分なら日の春邊迄歩けるかも知れない。登りつめれば後は下りばかりだ。藁な道だ、もう足さへ前へ出してれば勝手に下れる。朝光が昔の思ひ出話をして呉れる。途中で五條の小屋の人に追ひつかれる。一緒に下る。平凡な道になつて了つた。朝光や延道は五條の人と今年の靈の話をしてゐた。それを聞いて前田は僕に郷里のかひ、この話をしてくれ。やがて五時半横平前宮に着いた。サア里だ、里だ。社務所の様な所に行つて御茶を吞ませてもらふ。前田は早速スケッチブックを持って寫生に行つた。これで純粋な山の生活はこの五時半を以て終つたわけだ。前田は素早く二枚程スケッチして歸つて来た。駒ヶ岳登山の印をおして記念にする。六時こゝにいさまでして先の五條の人と一緒に田圃道を歩く。數丁行つた所で別れた。日は西山に没しかける。ふりかへれば今下つた胸が、ボンやり夕日を背にしてかすむ。何だか云ふに云はれぬなつかしさに目に涙する。紫色に全山脈がギヤける。さらばよく。又来る年にまみへするだらうよ。山も吾々に健在なれと云つてゐる様だ。親しみのある山々だ。やがて日はすつかり没しきつて失ふ。秩父の方では稲光がしきりに走る。雷の嫌ひな僕は心配でたまらない。しばらくすると雨粒がボタリと顔に落ちる、もう氣が氣でない。暗い夜道を目くら目つ方に小走りに飛ぶ。全く燈火のない所に出た。まるで狐につまゝれた様な氣持がする。稻妻は未だ光る。美しい様で恐しい。もう四人共黙々として歩くのみだ。疲れを通り越して夢中だ。實際五里夢中はこの事だらう。遠くかすかに燈火が見へる。しかしそこまではたつぱり二里はあるだらう。日ノ春だ。サテは日ノ春まで歩かねばならぬのか。方向がさつぱりわからない。ぼんやり秩父の稻妻で見當がつくだけで、雨は降らずにすんだ。もう空は星ばかりだ。銀砂の様だ。間の岳の石室を思ひ起す。しかしあの時の感じと今のこの感じとはすつかり比較

出来ぬ程に異つてゐる。今は餘りにも寂れた吾々だ。さこそ當てなく夢中で只東にのみ歩く吾々だ。火は日ノ暮のが一つボツチリ遙かあなたに光るだけだ。頼りないこゝ其だし。森をぬけ、丘を回り橋を越へ田圃道ばかり、さこまでさもなく續く様な白い様、まるで未知の恐しい所にでも續いてゐると思はれる程單調な道だ。フト自轉車の人に會ふ。最後だと思つて道のりを聞く。すぐ三四丁です。うまい。十三四丁と思つてゆけば大丈夫だ。歩く、只歩く。充分十三四丁來た。やつと村に入る。八時やうやくの事で自動車の乗場に着いた。二時間云ふもの只もうろうろして歩いたのだ。道のりを自動車屋の人にきいたら二里半が三里は充分ありますなと告へた。さうだらう。二時間ブツ通しで一度も休まずに歩き廻れたんだからな。自動車は最終が故障だからさて丁度來か、つたトラツクに便乗させてもらう。こゝは青柳云ふ所だ。今から直轄に行つて宿を取る心算である。九時。四十分を費して四里の道を突走る。代金三十錢。實際初めてこんな激しい自動車に乗つた。しかしトラツクの中には五六枚蓋が敷いてあるのに。運轉手に御禮を云つて自動車屋で聞いた宿に飛び込む。これで九日に渡る南アルプス白峯三山甲斐駒嶺走の行程は無事終りを告げた譯である。朝光はホロ酔ひになつて大いに氣を擧げる。風呂から上つて床に付いたのが十時。思ひ起せばこの行程には吾々一生の思ひ出になる事が幾つもあつた。

(二〇・十一・三)

クレメンツルツペン

G・W・ヤング
石川欣一譯

クレメンツ・ルツペンはその時すでに五十の歳を越してゐた筈である。ヒョロ／＼して、思ひがけぬ所に妙な角度が見ゆる奇怪な身體つき、そしてオープン・アクトルの靴が彼の固い、やせた腰の後から、變な格好につき出てる。而もひとたび岩に觸れ、氷を踏み、通路も碌に無い場所を疲れず俺また大股に急ぐさなるさ、こんな風な調子の惡さはすべてなだらかな「力」のカーヴに變るやうに思はれ、彼は堅強なフォームの確かささ優美さを以て動いて行くのであつた。山の農夫のはけしい生活は、彼を肉體的にも心理的にも、磨り耗らし曲け歪めたが、彼の快活な精神には手を觸れなかつた。

彼は若い時インデル教授のもで訓練されたのであつて、その影響はホテルの顧客をたよりとして暮した三十年間に、彼の身にしみ込んだマナリズムにさへも——このマナリズムは山に入つてゐる間は全く影を消すがホテルの廊に一步足がかゝると同時に、はさんさ喜劇的にあらはれる——打ち消さないのであつた。抑へても抑へ切れぬ子供らしさ、冒險に對する華美なユーモアさは、彼の貧乏が彼に、子供は一人もゐず牝牛を九頭持つてゐる彼の競争がたきのトニー・ワルデンの方が、牝牛二頭の子供九人の彼自身よりも如何に好運さうに見ゐるかをしみると思はせる時にでも、彼が煙つたい小屋で私と一緒に次の登山を立妙不思議に企劃しつゝ、私の耳に如何にもわるさかしけに Have you news for Sie, Herr Jung!

さ強く時にも、敵軍を逃けた所を捕まつた生徒のやうな見ゆすいた無關心で、彼が「発見」した胃袋をふざけまはる時にでも、あるひは——これは最も見馴れた顔である——夕方我々が家路に向ひ、そして例の致命的なピアザに近づくと、肩ごしに私に一言をくれ、我々の勝利による彼の大惨憺を情動的な *and Sie aufrecht, Herr!* に和け鎮める時にでも、常に彼の氣むづかしい関々をつゝみ、彼の胸や皺から洩れ出てゐた。彼の閉眼は彼の性格と世渡りの方法との通稱であつた。胡桃みたいに皺のよつた、褐色の顔と顔まに付いた細い曲つた二つの瞼目には、悪戯と計画との薄青い噴火山が、限定された出口に取つて餘りに生々々明光を放してゐた。

クレメンツはあらゆる場合に、ローンの深谷端にペンナインスを指しては、自分は「あそこにある連中みたいな一流のガイドではない」と主張するのであつた。が然し彼自身の山々は、後向きに歩くことも出来る位よく知つてゐた。彼はもつと人の大勢行く地方にゐたのならば、必ず有名になつたに違ひない。彼はその時すでにアレクサネオンを百回ばかり登つてをり、ネストネオンに至つては何度登つたか覚えてゐられない程であつた。この年齢でより安全な、より敏捷な岩と氷の巨匠が、この奇妙な動作態度でより勇敢な、よりしつかりした冒険者が、山を、それが幾許の金銭をもたらしたが故にでなく單に山その物として愛すること、彼の如きは他に類を見ない。

この彼に、晩年に近く、一つの機会が與へられた。それは早くべき一少年である。登山の規範とロマンスにあこがれを持つた一少年である。彼はこの上もなく陽氣な交友關係をそれからつくりに上げた。夜あけ前の暗い時に、私はいつも「方」の喉咽言——喉よりもむしろ肺の言葉で、私にこつては常に山の正しい言語である——によつて起される。私が本當に腹盛を離れ、着物を着て了ふ迄は、白髪まじりの頭が、用心深く明かされた下から、のぞいたり引つこんだりしつゝける。我々のサ

ツクは前の晩に死さ準備されてあつた。そこで我々は闇の中を歩き出す。近くのスロープを上下するとき、足の方では草と百合の新しい温つた匂がし、また夜明け前の風のためた戦慄は灰色の光の約束を断切つて身動きし、しつこりした衣服の下から睡眠の聲を返す。私にこつては、アルプスに於る「短い」一日の思出は、必ず露にぬれた草や、松の枯葉や、水の上の濡れたモレーン砂礫の早朝の香ひに、先に行く影のやうな姿から来る、泥炭にいぶされたフェルトやダブフル（一種の和紙）の暗示が、氣持悪くなく交つたものに類連してゐる。恰度「大きな」一日の思出が、太陽の照らさぬ氷河から吹く夜風が舌に與へる清冽な「石に似た」味に、前方にある、あるひは私が手にぶら下げたランタンの、焦けた金具と蠟燭脂の、鎮しき深い、頭痛を起させるやうな香りが混じり合つたものであるやうに。

附記

こゝは Geoffrey Winthrop Young 氏の著書 ON HIGH HILLS (Methuen & Co., London, 1907) の一節を譯したものである。實は夏の初めから伊羅君に依頼を受け、何か書かなくては濟まぬと思つてゐましたが、殊に山の経験がない、殊に最近の登山界の傾向とは大體違ふ點にする私が、下らぬことを書いても仕方がないと感じ、すこし面倒臭かつたけど辭書を引き引き換へてやりました。翻譯があるといけませんから場所を略記します。同書の四〇頁第六行から四一頁第二十四行までです。

Chamonix Region は Chablais 地方のオイドで、ヤムス氏が少年時代に突入り込んだ所です。私は同氏の文章を讀んでゐて、つくづくこのルツベンが好きになりました。そして、日本にも、こんな程度に好きになれる案内者があればいいと思はずにはゐられませんでした。寧ろ、不幸にして、このやうな男に接してゐません、かゝる案内者を知つてゐられる方は幸運です。

文中ティンダル氷河とあるのは、氷河の研究に有名な英國の博物學者 Peter John Tyndall (1820-1893) です。人格的にも偉大な人で、臨分アルプスの各方面に影響を残してゐます。マナズムといふ英辭は翻譯しにくいですが、とにかくルツベンは三十年間もホテルのお客を相手にしてゐたので、いくらか番頭さんみたいな所が出来て了つたのでせう。それを山に入るさうすりかり換り落してすふけど、歸つて来てヒアザ（これは山下ではなく、日本の總務みたいなもので、ホテルの客間の隅方なんぞに外氣に面してあり、椅子を

ならべてお客さま達が景色を眺めたり煙草を吸ったりする所です。に一歩足をかけると、言語動作が急に變化して番頭式になるのでせう。それから通送路が二度出て来ますが、最初のは「あなたの爲に願ひのものがあります。若旦那」といったやうなことで、あそこはお氣に入りましたか」といふやうな譯です。

右のやうなことを、高等科の方には必要ないでせうが、譯資料の方のためにと思つて書きました。

ルッペンに關してはもつと多くのことが書いてありますが、あまり長くなるからこの位でやめておきました。こんなものでよければ又いつか翻譯します。

(九・二七) 石川 欣一

小 槍

檀 淳
伊 藤 愿

幾つもの山脈が群り合ひ競ひ合つて横はつてゐるその奥、靜かなる流の廣く谷間の朝夕、默せる森林、環ゆる峰々。天魔の如き颯々岩山、その頂の暖たかき光の動搖、之こそ希望に溢れ底知れぬ理想を胸にひそめて、若き日に憧れを抱く我等男の子の惹ひ揚である。忍苦の幾時間、劇しき岩稜の登攀、未知なる山頂への戦ひ、其の強き猶みなき努力こそ我等が若き日の歎びである。斯くして岩は今や近代的登高精神に燃ゆる若きベルグシュタイガーの心を把握してゐるのである。

x x x

x x x

幾日かの山歩きの後、我等登山者の群れは北アルプスの盟主槍を訪ずれる。毎年の事半ら槍の姿は若きアルピニストの胸に一種の懐しみの情を興へてくれる。槍を訪ずれなくては何だか物足りぬ様な氣持を抱かせる迄に觀しき深いものとなつて了つた。

之の大槍の西側に面白い岩がある。大槍を訪ずれる者は誰しもが氣付く小さい乍らも怪異な岩峰がある。小槍と呼んで岩質は槍ヶ岳と同様で硬い。穂高連峰、北嶺等と共に同時に生成されたらしい槍の一部と推定される。原始の雄々しい血を送せる若きアルピニストのせめてもの心のやり場として憧れを一身に集むる小槍。今年の八月には秩父宮の御登攀によつて

一躍世に有名なつた小槍。

曾ては吾々を寄せ付けじと威嚇してゐた彼も今は、若きアルピニストの憧れの的となり、Rock-climberの一度は訪ねるべき試験場となつた。今年我部でも三回も登つたりしたので之を一編めにして此處へ収録する。

六〇



雄れ登高に生きて居る。岩はこの意義に於て最も僕を引付けるのだ。勿論軽微な近代的のヒロイズムに駆られてではない。岩は僕達には無くてはならない離れる事の出来ぬ親しき友だ。或時は厳格なる父でありその膝の上に寝れば無限の幸福を感じるのだ。

英人が Lake District を持つように僕達は芦屋の岩山を持つ。Grange は小さいが實に好い練習場である。先輩を持たない僕等は全く涙ぐましいまでに精進した。小き岩小屋に露營の夢を結んだのは幾度か。雨中を賑々々「Rainbow」した事も度々ある。



空に鋭く屹立して居る。午前六時修達一行（徳、野田、松本、西村）は拾肩小屋を出發す。七月の太陽は僕達を祝福するかの様に輝き僕達の心を限りなく燃やした。四人は英國製 100 Feet の繩を肩に一〇米の拾繩を肩に Rhoe, Hammock を用意し槍の肩から右へ進み間もなく別れて左へガレを下つた。岩壁を Inverse して大槍と小槍のザツテルに着いたのは六時半。

六一

今年七月、鳥帽子の方から槍へやつて来て、二日の嵐の恩従の後小槍を試みた。今年僕達は初めてやつたのだ。以下はその記録である。

(一九二七、七、二〇)

悪魔の魔舞の様に暴威を逞しうした連日の嵐は全く静まり大氣は心行くまで澄きつて居る。大槍は飛雪一つなき大

Route に付いて研究するにゲッテルから續く東横は Square-at-edge になつて居て傾斜が鋭いが努力すれば登れそうだ。
 1) の square-cut-edge の幅の三、四米の Slab を traverse する Narrow chimney がある。下の方は身體は入らぬが上方
 はや・廣くなり幅は一尺餘である。この盡きる所に素敵な Anchorage がある。裏側を見るに先づ手頃の Tunnel-chimney を
 通り Terrace に達す。それより Smooth slab を登る。Anchorage に達する事が出来る。Route は裏側を取る事に決る。
 ザイルは 100 feet なので二組に分け最初の Party は横、野田次は松本、西村。僕と野田は無言の中にアンザイルンして
 惜氣もなく Crampion ネールドブーフを捨て脱になる。最初は手頃の Chimney だ。高瀬の溪谷は數千尺の眼下に深く横はつ
 て居る。僕は緊張そのもので第一の Terrace に到着した。途中 Chock-stone があつたが無事に通過す。懸念して居た Egress も
 無難だつた。「オーシ」N が来る。再び Terrace を二段登る。次が難場だ。何の手がかりも無い Smooth slab だ。

この丁度中途に去年神戸高商の三好君の打つたハツケンがある。左手でためすに全身をたくしても大丈夫だ。僕は念の爲
 Hammer で二三度打つた。カンカンと澄んだ響が大槓に、たまして莊嚴な氣分に打たる。愈々何も手がかりの無い Smooth
 slab をハツケン一つを頼りに衣服の Friction を利用して登る。心臓の鼓動が手にさる様だ。呼吸が烈しくはすむ。生死の
 彼方へ生命の躍動へ。其強き腕のみなき奮闘の後に Anchorage に到着する。こゝには都合の好い Belaying-pin がある。ラ
 ストの N を完全に確保する事が出来た。N が無事に Anchorage に立つる再び僕は動き出す。先づ小時の間裏側を絡んで表に
 出て殆んど垂直な所を岩を抱く様にして登つた。岩は非常に緩んでゐて注意を要した。

Rubble を攀る。頂上に達す。N も来る。時計を見るに三十五分も経つて居る。僕等には全く一瞬間に思はれた。二人は
 昂奮して互ひに今は身も心も渾然として高鳴つて来る。友の顔には無限の喜があり、こゝに浮んで居た。紫の煙も黄金の水も

知らぬ僕達は唯だ若き意氣があるばかりだ。

小槍の頂上は一坪位でケルンが一つ積んである。美しき岩壁は映いて居なかつたが紫黒の苔が反つてびつたり調和して見
 わた。冷い風が吹上げて来て二人の頬をかすめる。数日前通つて来た鷲羽岳、蓮華岳、双六岳、嵯峨岳、西嶺足根の連峰が
 蜿蜒と横はつて居ても云はれぬなつかしさを覺ゆ。巖壁の如き大槍の西横は Red Climbing には面白さうな所だ。

小憩の後 D N の順で降り始める。上り以上の緊張を以て先無事に二人は Anchorage に達した。この Anchorage の素敵な
 Belaying-pin に槍繩を利用して懸垂で Terrace に下り再び Chimney を通つてゲッテルに歸る。待つてゐた二人は心から成
 功を祝してくれた。降りに費した時間は三十分。第二のパーティー松本、西村が同じルートに登攀した。二人のタイムは短か
 かつた。成功した一行四人は包み切れぬ喜を以つて小肩に引き上げた。

(續 記)

七月二十二日 昨日はひさしい嵐だつたので小屋にはお客はない。只前から根氣よく滞在してゐる人達はかりだのでひつそ
 りしてゐる。當にした友の一行は既に一昨日上高地に引き上げて終つたのだ。今日も又あまり天氣は良くない。霧が晴れそ
 うもない。穂高縦走も之の分では當分駄目らしい。里心がついて上高地へ下り度くなる。午後になつてやつと暫く霧が晴れ
 た。好機を逃すべからず小屋を飛び出した。

餘儀ない事情の爲め獨りでやる決心をしたのだ。小さいリュツクサツクにはハンマー、ザイル、マウエルハツケン、ミ序
 に寫眞機、ココア入の水筒を投り込んでガラガラ岩の槍の腹を右手から廻つた。こんな氣持だつたか今でも解らないが東嶺
 を廻つて北嶺の方を越して小槍と大槍の鞍部に出た。大槍の腹を廻るだけでも興味はありそうだつた。八高が三人登つてゐる

る。合圖して用意に取りかかる。

六四

鞍部にリュックを残して出發する。西南面のフェリスをトラバースする事に決めた。○はあるにはあるのだが不安定だったので○の丁度中央（挿入の小袖表面圖のM點）にマウエルハッテンを一本打ち込む。カチン／＼と哥いた音があたり
の岩壁に響く。思はずその音につり込まれる。左手でハンマーを振ふのでうまく行かぬ。
指を少々擦りむいて血が滲む。タストして確信を得たのでそのハッテンを利用してザイルを以て自己確保してこのStep
をReverseしてCrestに軀を入れた。辛じて入る事が出来る位の廣さだ。ハッテンにかゝつてゐるザイルをアップして
身に巻いた。ハッテンを打ち込む爲に僅かな○の間に全身の體重を托して緊張してアルバイトをなした爲、早や疲勞を感じ
てゐる。

このCrackは奥行はあるのだが幅は一尺位だ。軀をトツプリ入れて休息する事は出来るがChimney-technickを用ひる事
は出来ない。それで動作する時は之より軀をはみ出さねばならぬ。

右側のリツヂに寄りついて登攀する。膝と手とでしつかりリツヂをかゝへての動作だから衣服のフリクションを大いに利
用した。之を登り切つて一寸又フェリスをトラバースして次の稜を越す。壁になつてゐる所だ。これもこのリツヂに沿つて
直ぐPressだ。Rubbleを歩んで積石の處へ、頂上だ。前記の三人は挨拶す。

ハッテンを打つた時間も合して十七分要した。三時迄頂上に居つたが霧が晴れない上に、意地悪く露シヨンがやつて来た
寒さを感じて来た。E點（挿入圖參照）迄は上りと同じローテを取る。E點よりは裏面即ち東北面を下る。E點の繪圖及びフ
エリス中途のハッテンを利用してセルフビレー下る。テラスへ着いてテムニーを通り鞍部へ出た。

雨がひきよくなつて来る。アルバイトの後の氣安さを淋しく味ふ。一人でやる岩登り。正統ではないだらうが、又別の愉快
もある。小屋へ引き上げるには稜の西側を廻つたから丁度大槍も一周したわけだ

（伊 慶）

小槍のルートに就いて

小槍が今ではRock-climberの一度は登るべき試験場となりそのルートでも云はるべきものが出来て了つた。即ち西南面
のフェリスをトラバースしてクラツタを利用して登るの、東北面からテムニーを通りテラスを経てその上のスムース、ス
ラブを登攀し西南面のルートに合するのが普通のものである。

其他エキスパートに取つてはP點（挿入圖參照）即ち西南面を全部トラバースして西北側の稜から登るのがあり、又全然
東北面のみを登るのがある。最後者のみは未だ手を着けられずに残つて居る。Smooth ridgeなのをそれに加つてOverhang
氣味なのが困難なる原因だ。然し工風次第でやれぬ事はないだらう。

も一つ二つ面白いのを云へばSmooth ridgeの東麓のみ迫るのや西南面の中央の稜のみをつたつて、頂上へ至るのがあ
る。又大槍の西稜と小槍とを連絡して試みるのも快であらう。要するに岩質、根盤地、登攀時間等の諸點に於て岩登りの適
當なグレンデである。

六五

VON HANS MORGENTHALER, „IHR BRIGG“

いくせの楽しい美はしい旅多き青年時代は過ぎ去つた。曾つては多くの山友達と一緒に連れ立つては、あちらこちらの山々に登つたのだ。我々は常に限りなく次へ次へ幸福を捜し求めた。そして最も美しいもの——山こそ我々が知り得る最も美しいものであらうと信じた事が屢々あつたのだ。そしては遊び、我々は直ぐ又新しい山登りを試みた。

年若い友を私の神聖な場所——山に連れて行く云ふ事は私に取つて大なる喜びであつた。何故つて、彼の心にそれが如何に氣に入つたか云ふ事を發見した時には、それは私に取つて美しい日であつたんだもの。

然し又、屢々只一人で山へ行き度い云ふ衝動をさうしても抑制する事が出来なかつた。さうしても堪へ切れなかつた。然かも之は私の考へ及ぶ限りの最も美しいものであつたのだ！これ以上に美しいものはあり得ないのだ！最も小さい山すら私には巨人に思へるのだ。さあぬだに既に大きな瞬間がなほ無限に續り行く。單獨行こ云ふ事は私に取つては最もうれしい心のさきめきだ。

君は私のこの行動を烈しく呪つて、輕はずみださ呼び然かもその言葉に非難の響を含ませて云ふ。

有難いことには若い時には氣輕なものだ。事實私はこれ迄屢々たつた一人で出かけたんだ。

それが輕はずみだつて？　そう云ふ君の言葉こそ輕はずみな言葉ぢやないか！

瀧澤谷洞澤岳登攀

伊藤 藤原

殘雪に彩られた男性的な、跳する様な岩壁、初夏の爽やかさを感じさせる山、蒼し之は上高地や横尾から眺めた穂高に外ならない。即ち穂高云ふ山は信州側から見ると、その峻しきにも或る躍りを持つてゐる。即ちその峻境の如き穂高も全容として見るときは一種の美を有してゐる。然し乍ら飛彈側より之を見る時はその山容は全く別題なものである。黒味を帯びた岩、押しつける様な峻壁、實にその大峭壁は人の近寄るをすまも假借しないさばかりに威嚇してゐる。實際飛彈側より穂高を望む時はさうして登れるだらうかと疑ふ程である。亦之に伴ふてその谷も信州側の岳川谷の明るさを有し、又横尾谷は長閑さを有して登山者を魅惑し登行への憧れの念を起させるに比して飛彈側の谷は何と云ふ陰鬱さであらう。搦て、加へて麓の密林の奥深さその無氣味な、すまいは暫更に人の心を暗くさせる。

此の峻な理由からして信州側の穂高云ふもの、一般的であつたに比して、飛彈側の穂高についてはあまりに知られな過ぎた程であつた。然し近來 Rock climbing の發達に伴つて、之を試みる人も出来て、この瀧澤谷を除いた外は殆んど總べてが人間の觸感を知つて了つた。又この唯一の瀧澤谷すらも、昨年八月 Rock climbing の先覺者たる朝日新聞の藤木九三氏によつて北麓のキレットへのロープ、及び早大の四谷氏一行によりて瀧澤岳へのロープが廻かれた。此れで嘉門大爺さんの折紙をつけた飛彈側の谷もすべて手を着けられ、極められた事になる。然し乍ら依然として、飛彈側の谷は信州側の谷に

比して試みられる事が少く、新しさを有してゐる爲に壁石甚だしく、天候に左右される事は想像以上である。加之、飛弾側の谷は殆んど絶てが淵を持つてゐて、降雨後には淵の水量が甚だしく増し登攀は全然不可能なる。昨午前記二氏と前後して R・C・C の西岡一雄氏も同じくこの淵澤谷を試みられたが、数日來の降雨積みの爲め、水量は非常に増加し、壁石甚だしく然かも激流に多くの岩が混じりて危険極まりなき爲、其跡を排して雄淵の上迄行かれたが遂に引きかへされた程である。で今度自分がこの谷を試みるに當つても、此の天候とその登攀の時期に就いては随分心配した。七月初旬蒲田の今田旅館に泊つて、由緒を招んで話をした時にもその事が第一の論點であつた。彼は今や無理だ云ふ、雪が多い云ふのだ。雪の多いのは初めから覺悟して来たが、然しその爲水量の多い事さ水の時期以上に冷い事が氣がかりだ。そして彼は私が一人でやる云ふ事に對して多少の懸念を懷いてゐるらしかつた。

然し私には登攀の時期が何より問題だ。駄目になれば無理をせずに引きかへそうと思つてゐた。

淵 澤 へ

七月十七日 いよいよ淵澤をやるのだが昨年既に三組も之に手を着けたので初登攀の悦びは味ふ事は出来ないにしても、その三組共が案内を連れて行つたのだし、今自分はほんまに一人でやるのだと云ふ別趣な心持を懷いてゐた。

槍平の室堂は實にすばらしい所だ。室堂の窓を開けて眺めてゐる奥穂と淵澤の「谷」の東側から黄金に輝いた朝日がその明るさを増して行く、薄雲に眠つてゐた岳も目を醒ます。また薄雲の罩めた林から駒島の明らかな啼聲が響いてくる。焚火も良くもつて自在にか、つてゐる湯もたぎつて来た。簡単な朝食を済まして、七時三十五分、大島のおつさんの「ためら

つて啼う」の聲に送られて室堂を出た。

一寸こゝで今日のコンディションに就いて云はう。荷物は出来るだけ最大限に切りつめた。リュックサックは淵の下をくぐる事を豫定して小さい方、ゴム防水の内袋のあるのを持つて行く事にした。中味は寒さを感じた時の用意に毛シャツ上下地圖、磁石は常の通り、飯盒一杯の飯と水筒には濃厚なコ、アを充した。デイルは一人だから十米、ハンマー、それからマウエル・ハッケンは二本用意したが使はなかつた。ピッケルとシユタイガイゼンは未だ雪が多いこの事で持つて行く事にした。靴はクリンケルと丸紙を打つたもの。もう此れ以上は制限出来なかつた。

密林を縫つて室堂から三十分程で淵澤の入口に着く、八時五分。少憩の後、流れの右岸に沿つて進む。残雪がある。クレバスが口を開いてゐる。九時、第一の淵の下へ来た。雪は淵の直ぐ近く迄續いてはゐるが淵の水に倒られて、端は丁度シュルンドの様になつてゐて非常に危い。

掘ロープだ。右を取るか左を取るか、一寸困つた。此のあたりの地勢を少し述べて見よう。此處は兩方から二つの澤が入り込んでゐる所で左の澤は屏風になつてゐて、此れからも小さい淵が五六條懸かつてゐる。その右が多少木が生れてゐる場所、その下はやつぱり岩だ。その右にある澤がこの巨龍があるのだ。即ち左手に相當な淵とその右に大きな本淵が深ましい音を立て、岩を削つてゐる。此の場所に立つてあたりを見廻す、何と云ふ窮屈さを感じるであらう。身は峭壁にすつかり圍まれてゐる。淵は轟々たる響き共に身に迫つて来る様だ。聞いているのは今登つて来た澤の流れ口だけである。

この三方共切り立つた峻な岩壁の何れかに據つて登攀しなければならぬ。之が最大の難關だ。右するか左するか、暫し淵

の下に立ちつくしてコースを考へた。若し左手を登るゝすれば瀧の左手にある幾分手がかりの多くありそうな岩を攀ち上つて、前に少しく述べた樹木の少しある所へさつ付かれるのだ。それをうまく利用すれば瀧の上、左手へ出られそうだと。右を取るゝする。三四十米位な水の流れてゐる岩壁——手がかりは十分あるので安全だ。——をよち登れば一寸した Terrace がある。尙此の上は屏風岩で然かも細い水が瀧をなして落ちてゐる。此の中腹——さ云つても此の Terrace から二十米位上方——に何ぞかすれば、左へトラバース出来そうな裂縫がある。又 Terrace から左へ捌めば、即ち瀧の右手に當つて Gully がある。二十米か二十五米位だ。然しその Gully の下へ行くには頭から水を浴びて行くのだから随分つらい。昨日南澤を降つて瀧の中をくぐりつゝ足場を求めゐるには閉口して丁つたので、なるべくならば此の水を浴びる事だけは御免蒙り度いと思つた。それで此の裂縫を左へトラバースして瀧の上へ出る事を考へた。

先づ直上は屏風の様だから右の草付の方へ、うんぞ滑んだ。随分不安定な事だ。書き落したが瀧の下でアイゼンはつけてゐた。それは雪から岩へ移るのに雪の端が *anhand* の様で *step* を *cut* せなければならぬ程で危険だつたから。草付を攀んで上へくぐり試みたがうまく行かぬ。遂に *Oberrhang* に突つかつた。オーバー・ハンダは二度目だ。色々工夫したが結局駄目、仕方がないから *rim* を試みようと思つて降る事にした。下りには自己確保法を使つて岩角や灌木の根を役立たした。

前記の Terrace 迄戻つて考へ直した。草付で案外長く苦しんでゐる。今時計は十一時二十五分だ。二時間半もかゝつたんだ。胸中には何だか不安さが湧いてくる。何でもない事だが今朝室堂を出る時靴の紐の切れた事も氣にかゝる。——山男の感傷が一度に断定して下さるな、山ではほんの僅の事も氣になるものだ——引きかへそうかとも考へた。十時半にも近くなつたでは時間も充分と云へない。然し今日の晴天を取り違がしては明日を保障する事は出来ぬ。……

引きかへすにしても、せめて瀧の上迄出よう。濡れても仕方がない Gully をやる事にする。頭から水を浴びつゝ Terrace から Gully の下へ滑んだ。下へ行く迄に全身はビシと濡れた。此の Gully は *チムニー* と云ふには廣過ぎるもので *Basking* は使へない。四肢を踏張つて一ぱいだ。そのフリクションを利用して登るのだ。岩質は粘土性を帯びてゐる。Gully 中途迄は Gully もあるが上はそれが無い。加之、水で濡れてゐる。傾斜は六七十度位もあるだらう。上部はそれでも、つゞき傾斜がひさしい。小さい岩は相當に落ちた。此のあたりから足場を切つた。登り切つて Gully 上部にある *Back* に取り付いた。此處から上へ出るのによつて Gully を登り切るのミ、一寸下手から右へ傾斜のひさしい *Back* の岩の所へトラバースしてガラ／＼の岩で出来てゐる上の Terrace へ出るのこの二つの路があるが、後者を取つた。ガリーの上部のテラスは草地だ直ぐ下はガラ／＼の石の河原だ。それは瀧の落口へ續いてゐる。なる程水量の多い筈だ。直ぐ近く急雪溪が來てゐる。少し休憩する。食事をしようとして箸をつけたが一箸しか食へぬ。これではいかぬと思つたが、仕方がない。水筒の *コア* を一口飲んだ。Gully には十二分かつてゐる。腸が丁度このテラスを温めてくれた。水に濡れた寒さもあり感じない。休みつゝあたりを見廻した。瀧の落口の少しを除いては又直ぐ急雪だ。

實際由緒が話した様に種だ。第一の瀧で見た通りの景色だ。兩側は峭壁だそして右手の岩壁からは之も細い瀧が三四條雪溪を叩いてゐる。まあ何と瀧の多い筈だらう。そこを見ては瀧だらけだ。此れから先でも屢々この様な眺を恣にする事が出来た。二十米の細い水が白煙を擧げて懸い岩から迸り出てゐる右様は實に美事なものである。天氣が良かつたればこそ、こんな餘裕を持つてあたりの景色を眺める事が出来たのだ。

十一時迄休んで立ち上つた。草地から少しガラ／＼を傳つて直ぐ雪溪に突つかう。雪溪の下の流れに、石が混じって流れるのでゴロ／＼と物凄い音を絶間なく響かせてゐる。今にも雪溪が下へ陥ち込みそうではびく／＼ものだ。黒く汚れた雪溪を向はも進むと又急に直面する。まづ正面に見た淵だ。所謂第二の淵と稱するものだ。雪溪の端はまづさきと同じくシュルンドになつてゐて足場が危い。やつ／＼淵の左手の岩へ寄り付いた。

この淵の落口や岩は仲々複雑な形をしてゐる。即ち岩にり着いたまゝ下を覗き込んだ。宛然、洞穴まがりははない。その洞穴の底を、雪溪の下を、淵の水は轟々たる響をたて、泡を立て岩をかんて流れてゐる。暫く見てゐると気が遠くなりそう。下の方のを覗き込んで岩の様子を見るに、下の方は大體に於て右手が手が、りがありそう。然し上の方は見るに右手の方は峭壁になつてゐる。左手は無理をすれば多少さも手が、りを見出せそう。その上に右手を登るゝなれば一度下の方へ降りてそして淵の底を這ひつゝ、右側に渡らなければならぬ。なるべく水を這ひるゝ云ふ様な事は此の際免れ度いたまへそうせなくとも全身濡れ鼠になるのだから。そして若しこの際水勢に打たれて一歩足を踏み滑らしたら……雪溪の下を泡をかみつゝ流るゝ奔流の爲め雪溪の底をく／＼つて、第一の淵の落口へ出るだらう。然しその時にはもう命はないものこそなければならぬ。若しその上に雪溪が落ちて来たなら、……昨日の南澤の事を考へても恐ろしいと誰が保障出来る。もしたら久しなへに萬年雪の下積だ。……さてもそんな事は出来ない。無理をしてゝも左を行かう。斯く決心して淵の水に濡れ乍ら左側の手がかりを探しつゝ全身緊張の内に途中の一寸したテラスに出た。そこで流の水を這んで飯を食べようとしたがやはり食へぬ。ココアで一時を凌ぐ、十一時二十五分だ。少憩の後又上へさ向ふ。幾分寒くなつて来て長く休めぬ。寒さゝ云へば第二に登つた淵で水の中へ手を差し込んで手が、りを探すのに冷めたさで手がしびれた様だつた。

ピツクルミとランボンの使用で五十度を超す様な雪溪もぐん／＼登る事が出来た。槍平が小さく見わるゝ、又それを圍む密林も。霧の時間からは美しい笠岳が見えたりする。穴毛谷も見えゐる。登つて行くに従つて谷がいくつ／＼右左から入つて来る。右から第一に洞澤の西へ出てゐる尾根を越して白出に通ずらしいもの、左からは又北穂の大キャレットに出るらしいものが入つて来る。

落石が頻分ある。最初は縦走者だまばかり思つてゐたが、ふと、目前の一つが急に雪溪をする／＼するさ落ちるのを見て唖然とした。落石の危険をさける爲に谷の右か或は左かへ寄り沿つて進む。ガスを踏むゝても危い。この谷に限らず雪溪側の谷はすべてが雪に岩に埋まつてゐて、その岩たるやほんの一寸の係り合ひで重り合つてゐるのでうっかり踏むと直ぐ小規模の岩雪崩を起す。一度小さい岩雪崩に乗つて一問ばかりづつてからは雪があればなるべそれを行く事にした。さう／＼雪溪はなくなつた。脱ぐのが面倒だのでアイゼンをつけたまゝガスを登る。洞澤の峭壁は益々おつかぶさつて来る。傾斜は急になるさう／＼雪がかり出した。見通しが利かぬ。これで随分隙取つた。岩が大分しつかりして来た。頂上はもう近くらしい。さうもあまり右へ来すぎた感があるので、谷を左へ取つて見た。これ迄は大抵見當で右へ右へさ進んだ。傾斜は益々急だ。頂はおつかぶさつて来る、四つ這ひの登行だ。出口が見え出した。

さう／＼細い鞍部に着いた。二時五十五分。鞍部に跨がつて車を入れる。谷を一面霧が罩めて了つた。それに比して横尾の明るさ。屏風が眼下に眺められる。常念も午後の陽に充つてゐる。氣のせい／＼するカール、数時間の緊張した気分からやつ／＼解放された。信州寄りには金ほうけがきれいに咲いてゐる。何と云ふ長閑さだ。只一人恋に此の情景を味はつてゐるのだ。何と云ふあれ小屋へ着いてからさ未練を残して、アイゼンを脱ぎピツクルミをリュックにく／＼つて洞澤の北を縦走路

の通りに登る。暫くすると「オーイ、オーイ」と呼ぶ聲がする。氣のせいか雲漢の方から聞える様だ。又昨年の「二の舞」ではないかと思つてこちらも應酬する。少し行くにつれ先で聲がする。尙も進むと呼んでゐる人達に出會つた。淵澤の小屋はまだですか」と云ふ。色々聞いて見るに案内人無しで初めての人は五人の穂高健走だ。肩の小屋を六時頃に出たそうだが初めての事と迷つてたのださうだ。之も随分無謀な事だ。一緒に穂高小屋迄伴ふ。

淵澤の頂上へ着いたあたりは霧で良くは見えず。眺望の利かぬ事程残念な事は無いがやむを得ぬ。ガラを踏んで穂高小屋に着く。重太郎に會ふ。やつとゆつたりした氣分になつて今朝から初めてマドロスをくはへる。四時。室堂で知り合ひの仁助や勘一郎に會ふ。安心したせいか急に腹が空いて、汁を買つて飯盒一杯の飯を平ける。

ゆつたりした氣分で小屋の外で腰を下ろして夕靄の中に沈み行くあたりの山々、彼戸や笠のあたり一面に横引く五色の雲海を眺めて一日の愉快なアルバイトを終へた。心地良い酒醉に浸つた。

今日は晴天に恵まれて穂高は實際大退屈だ。お蔭で小屋は職員だ二十何人の群集だ。然し不足は云はぬ。一週間振りで蒲團に寝られるんだ。……何と云つても山小屋の楽しさだ……

七月十八日。四時頃には空一面銀星が輝いてゐたのに七時頃さうく嵐になつて了つた。若し昨日之を延ばしてゐたら？何とも云ふ事の出来ない、一種名狀すべからざる氣分につまされた。

吹き舞る風は岩を動かして小屋の屋根を揺つて勢甚だ險惡だ。此れでは一日籠城だ。丁度脚の良い休養だと思つて香氣に構へ込んだ。寒さがひさしいので重太郎の厚意でストーブを焚いてもらつて毛布にくるまつて寝ころぶ事にした。外には嵐が荒れ猛つて小屋の外へ一歩も出る事は不可能だ、便所へ出る事も出来ぬ。

それでも晝頃少しやみになつたのをねらつて、一部の人は淵澤谷を降りて行つた。それで小屋も靜になつて、良い氣持でストーブの側にくるんで五時頃迄寝た。實際山小屋でなくては味はへぬ氣安さだ。

七月十九日。嵐はやまぬ、然し鳥帽子方面から来る友の一行との打合せがあるので少くも明日中には槍へ行かねばならぬ。それで嵐がやまなくとも白出しを下つて室堂へ歸る事に決めた。丁度人夫の勘一郎も中尾に歸る云ふので中途迄一緒に出掛けた。十一時半に小屋を立つて室堂へ歸る。大島のおつさんも歸りがあまり遅いので萬一を心配してゐて呉れた。

後 記

淵澤——飛彈の人達は通稱「雄淵健走」の谷と云ふ——を終へてその感想を云ふ様なものを書いて見度い。由勝も蒲の上へ出ればあさはかる事が出来る云つてゐた。實際やつて見ればさうだつた。この谷は彼の云ふ様に事實、糧を立てかけた様な谷だ。兩側は峭壁だから如何にもする事は出来ない。それに雪とガラスの數時間のアルバイトだからあまり感心したコースではないかも知れぬが、人のあまり入つてゐない谷だけに確かに新鮮さだけは持つてゐる。パーティとしてやつても、亦單獨でやつても注意すればさう大した危険は感ぜられない。只くれぐれも注意すべきは落石だけである。飛彈側の谷は何れも落石が甚だしい。今年八月、柳谷から西穂へかゝらうとした某高の一行中一人は落石の爲大變な損傷をされたさうだ。大變の毒な事だ。その落石にも三通りある。自然に落ちるの、穂高健走者が無意識に、或は意識して——それは飛彈側の谷はさても人が登つて来る云ふ様な事は考へないから——落すのである。自分もこれを心配して十六日には肩の小屋へ行つて沖田さんにこの事を注意してくれる機願で置いた程である。最後に登攀者自身達が落すのである。某高のもこれであ

つたさか云はれてゐる。それから登る時期である。昨年は皆八月にやられた。七月は未だ雪が多い。八月には勿論少くなる。それで七月と八月との比較であるが、七月には雪の爲にガスを踏んで行く苦痛は免れるが水量の多いの水の冷さには困られる。雪溪の端がシュランドになつてゐて危険はある。然し八月には以上の反対な現象が起る、そして雪の多い時よりも時間が多くかゝる事である。要するにこの谷は七月でも八月でもあまり大差はなからう。私は出来るならもう一回九月の初旬にやつて来て天候の良い日を見定めて雪の殆んさない時にやつてみたいものと思つてゐる。そして此れに入つてゐる澤を探つて行くのも面白いプランだと思つてゐる。又此の谷は瀧の多い谷だからさうしても水量を考慮しないわけには行かない。瀧の落口の形状から云つても水量の多い時にはその僅かな通路も水に覆はれるだらうし落石も多くなり瀧に石がゴロゴロ混する事も多いだらう。ピツクルはさうしても缺く事は出来ぬだらう、雪の多い時はアイゼンも必要だ。然しガスの登行さなるさ、傾斜も急になつて四つ這ひだからピツクルは邪魔になつてリュックへ納めた。それからこの谷は瀧の苦戦だからさうしても瀧れるのを確定せなければならぬ。それに瀧が瀧れると必然的に来さの伴ふ事も覚悟せなければならぬ。實際、水を頭から浴びたり、水の流れてゐる岩にかゝつた時に袖口から水が流れたつて瀧を濡らすのだから積極的の事は出来ぬかはりに一寸した防具位ほしいのはやむを得まい。これがこの谷での一番困つた事だつた。それから一つ附け加へ度い事は腹は空いてゐるにもかゝらず食欲のない事だ。飯をしつかり用意したのに彼に立たなかつた、この事は早大の四谷氏一行も書いて居られる。私はココアの濃いのを持つて行つたので大分助つた。之はあまり大した事でないかも知れんが一寸考慮すべき事と思ふ。要するに普通の谷々子に飽きた人にも面白い谷である事を保證する。

(一九二七・八・二五)



芦屋 ロック ガーデン 萬物相

岩場の幻想

＝ 芦屋 ROCK-GARDEN の追憶 ＝

藤 木 九 三

「ちよつと待つた」

「何うしたさいふのだ？」

「あぶない、危険い…… あなたは危険だと思はないか。コディエが上から綱を投げるまでお待ちなさい」

—— ドフネ・アルプスのテート・デュ・ペラードの密をめぐつて垂下した扇状形のギャリーをのほり詰め、かなり廣いレツデをトラヴァースして上のテレースに出るために、約五メートルのフェースに面し、先頭のコディエがする／＼と容易く攀ちたので、二番の私も何気なく手懸りを描んで一足ぐいさ乗り出さうとした時である。ラストのガスパールが斯う不意に怒喝つた。もちろん、先頭のコディエがザイルを肩に懸けてゐたが、その時は未だアンザイレンはしないでコンチュアスで攀つてゐた。それに今コディエが攀ちた岩壁は、かなり急ではあつたが手足のホールドは選擇に苦しむぐらゐに豊富だつたので、私は先頭に鉤られた形で、毛頭危険なさの感念を抱く餘裕もなく、不用意さいふよりは寧ろ無意識に、蹤いて攀はら

うさしたのであつた。

七八

ガスバールに怒鳴られた私は、驚いて岩壁から身を離し、彼の命の儘にコディエが投げる綱を待つために佇んだ。そしてガスバールの氣を鎮めた輕率を悔いて憤慨返つた自分を見出すのであつた。それは私にまつて、海を越え、曠野を横切り故國を後に二十日餘りの長い旅行の後、初めて接した憧憬のアルプス登攀に第一歩を踏み出した日であり、多少精神の昂奮が私をしてこの老ガイドを怒らせる輕率を取てせしめたのであつた。實際、ガスバールが名も無い東方のエトランゼーをアルプスの巔に導く責任を、忠實な行動を思つた時、私は穴にでも這入りたい氣がした。そして私は從順なアマチュア登山家として、心好くこの老ガイドの命に服した。その時である、ふと幻影のやうに私の頭に浮んだのは、故國の岩場——「芦屋の ROCK GARDEN」であつた。

二

ROCK GARDEN——それは勿論、ドフネネオアルプスの岩場に比すべくもなく、恐らくはアルプスの何處の岩壁の一つにも劣る貧弱なものはあるが、それでゐて、私は猶ほマツターホルンのイタリアン・リッヂを降つてゐる時、またはビーボンのチムニーやエンゲルホルナーの一枚岩に腹這ひになつた時でも、常に頭を去らなかつた懐かしい岩の幻想であつた。しかもそれは、單なる幻影や追想のみでなく、アルプス登攀の實際的なテクニツクの上に、この ROCK GARDENにおけるトレーニングミブラクティスミが役立つたことに對して、私は深く感謝せねばならない。

近代的なロツク・クライミングでは、テクニツクの研究と應用に、細心の注意を要することはいふ迄もないが、それにも

増して必要なのは「岩に馴れる」ことである。芦屋の岩場が、塵埃した脆弱な花崗岩で、「岩」さういふよりは寧ろ「砂」さういつた感じであり、アイガーの石灰石の絶壁や、ドロマイトの壁では響くやうな鋭い岩壁の觸覚さとはちろん較ぶべくもないが、岩に馴れ、岩に親しむといふ點から、殊に初心者練習場として、狭いながらに纏つた感じが得られ、岩の威壓的な感じを受けないで、岩と共に嬉戯するといつた氣易さで行動され、しかも慎重を要するデリケートなバランスを取る場合など、精神集中の點から、却つてこの狭く纏つた岩場が好影響をもたらす。殊に、岩の構成の變化ミ種類の夥しいことは、それがサムブル的であり、繪圖的な小規模に過ぎないにしても、あらゆるテクニツクの練習に堪へ向きである。R.C.C.の若い人々の間で「イタリアン・リッヂ」を呼んでゐるアレトなどは、恐らく本場のアルプスでも然う多くはない特徴を持つてゐる。此處では木登り式のリプス・クライミングを経験することが出来るし、また高崖屋根から谷を隔て、西のリッヂに突入して登り、ROCK GARDENを訪れるクワイマーの眼を射る最初の岩である「GATE ROCK」の登攀などは、その城岩形のエツヂに沿ふルートには、少くとも一晩で二時間を見て置かねばならぬ。更に、風化したアンサウンド・ロツクの觸覚に嫌ひたら、奥高崖の東側に懸つてゐる「CASTLE WALL」を試すことだ。それは標高で亡くなつた石黒君が最初に攀つた懸湯で、一枚岩の絶壁が、岩に觸れると弾き返され相な感じを催し、花崗岩の本質的な硬さ、鋭さの裡に、何處か柔かい光りさを感じさせる。此處ではホールド・ブーツは脱ぐべしで、素足の觸覚を経験するのも、クラッダス・メンに取つてまた忘れられない岩の誘惑である。このロツク・ウォールを登り詰めるさ、城山から續く道牒の尾根だ。ひと汗掻いた後にこの山頂に立ち、パイプを繰らせながら脚下に展けられたロツク・ガーデンの展望を描くのは格別だ。晴れた日なき、ピナクルの尖頭に立つて紺碧の大飯淵を航行する白帆の眺めなき、全く特色ある景觀だ。

七九

三

英國の岩場ミアルプスとの關係を、その儘に「青屋の ROCK GARDEN」ミ日本アルプスに當て替へても、誰も抗議を挟む餘地はないと思ふ。更にそれを、一足進びに歐洲アルプスミ ROCK GARDEN と結びつけることも、私にとつては無理だとは考へられぬ。

テート・ド・ユ・ペラードの岩場で、老ガイドに "Wait minutes," と怒鳴られた瞬間、それは本能的に、自制を挟む餘裕もなく、私の頭に関いた感念は、驟然に一種の反抗であつたことを自白する。それは勿論登山家としてはあるまじき僥倖であり、自負であり、次ぎの瞬間には當然なる悔悟、自制の自分を見出したが、一時的にもせよ私をこの感情の塵たらしめた原因は、アルプスに比較にならないにしても岩に馴れ、岩を恐れない慣習で、技術的に従くとも一通りのプラクティスを経たからである。もつと露骨に表現すれば青屋の ROCK GARDEN で養はれた「岩を見る眼」があつたからに外ならない。この経験ミ自負は、多くの場合アルプスの岩場では物の役に立たないにしても、その感情ミ経験を制御するコントロールの如何によつては、非常に役立つことを私は證明できると思ふ。

例へば、私達は、しばしば青屋の岩場で「懸垂」の練習をする。岩登りの数ある技術の中でこの「懸垂」は当初者にとつて危険な感を抱かしめるものはない。しかもそれは、ロツタ・クライミングの實際には稀有な場合に應用される技術で、殆んど絶命の際に限られてゐるが、その経験だけでも岩の恐怖を緩和する點で大きな効果を齎す。岩登りの危険の多くは技術的な失敗よりは「岩の恐怖」若しくは岩に不馴れな事が原因し、同時に岩を見くびり、岩に馴れ過ぎることも同様の怖

禍を齎すといはれる。ロツタ・クライミングの要諦は、より多く岩に親しむ機會を持つと同時に、正しく岩を理解し、正しく岩を磨くる練習を積むことである。

この立場から、阪神地方のクライマーは ROCK GARDEN を持つことにより、一般の山黨が六甲山を持つ以上に、恵まれた地位に置かれたことを自覺せねばならぬ。近年日本アルプスで、岩登りを主とするクライミングの顯著な記録の多くが、青屋の岩場に親しむ若い僚友によつて作られつゝある事實は、恰も英國の湖水地方の岩場ミアルプスとの關係を暴露たらしめるものがある。

更に、私自身の経験から ROCK GARDEN における練習が、アルプスの岩場で役立つことはいふまでもなく、殊にド・フネネ・アルプスの峰々や、シャモニーの谷に垂れ下つた氷河を劈き、鋼鐵の針を取ねて突き立てた姿のエーギユの峰々が、何れも六甲や青屋の ROCK GARDEN を構成する岩と同じく、花崗の岩のピークであつたことが、青屋黨である私にとつてそれだけ親しみを感ぜしめたことか。テート・ド・ユ・ペラードの岩壁に直面して、ROCK GARDEN の幻影を描いたことは、全く理由のないことではなかつた。

四

ROCK GARDEN と離れることの出来ない關係にある山黨のグループがある。それは言ふまでもなく R.C.C. だ。このグループに就いていふ事は烏合がましいが、兎に角ロツタ・クライミングが現時の隆盛ミ理解を得ず、同じ山の仲間からすら危険を敢てする邪道呼ばばりをされ、糞子扱いにされた時代、それは僅か五六年前のことではあるが、然うした嘲笑輕蔑

をうけながらも、このグループの人々は、人眼を避けてしばしばROCK GARDENに立て籠り、忍苦み試練の時を過したものであつた。それは歴史的な噂ばかり古い事でもなく、またその登山界に對する業績も未知數ではあるが、それでいて今日既に固執的な憧憬れを持つに至つたほど、日本の登山界も急進な發達過程を辿つたことは事實である。世間では最早、ロック・クライミングの経験なく、ザイルハンドリングを知らない者は登山家の仲間から遠放される形である。

この趨勢から、ROCK GARDENとR.C.C.の誕生は、もはや固執的な雰囲気の中に置かれてゐることを云つても見當違ひではない。仲間の連中が初めて彼處でトレーニングをやつた時分は、高座屋根にせよ、萬物相にせよ現在のやうに立派な路や、コースなどは勿論なかつた。わづかに高座の諸節から谷を遡つて奥高座に達する路で、城山から岩梯子を経て黒岩に通ずる道社の尾根筋がコースとして知られてゐたに過ぎなかつた。それが今日では、尾根といふ尾根はトリコニーの齒型で蹂躪され、ギアリーもスパインも、ほとんど原型を破壊され盡うしてゐる。「あの時分」といふと、少しく大袈裟に聞けるが、兎に角私達が垣わられぬ「岩の叫ぶ聲」に魅せられ、初めてROCK GARDENを根城としてトレーニングを行つた頃には、脆弱な岩質ながら、構成の怪奇に自然の斧鑿の砂趣が味ははれ、規模の少い代りに變化に富んだ岩相は、暗黒寂莫の雰囲気の中に岩そのものの力強いタッチで人の魂を奪ふものがあつた。そしてもちろん、あのGRATE ROCKも現在のやうに、一手一足に無残なハムマーの跡を刻まれるやうなこともなく、その稜角線は最後にオヴァーハンドを見せる上反りの、すつきりした線の魅力を感じしめたものである。

數あるROCK GARDENの岩場の中でも、つゞも岩相の怪奇と變化に富み、感覺的な魅力を持つたものは墓場(GRAVE)と呼んでゐる場處である。それは荒涼であるもののやうな灰白色の岩場で、雨水の風化と消磨作用が彫刻した、精妙巧致なレリーフである。前世紀のモンスターを偲ばせる海坊主のやうなの、踊り出した骸骨、サボテンの化物といった風の怪物の姿態が群舞してゐる。夕映の後の暮れゆく靜寂な山氣の中に浮んだ「墓場」の寧い景観は、ダンタの地獄篇のセツトを見るやうな幻想的な場面を描きだす。

更に「墓場」のニードルやスパインの罫をひき追して、同じ灰白色の扇狀形のタローワールが翹つてゐる。それが恰もモン・ブランのエーギユキやドロマイトに較べることは不當かも知れぬが、兎に角この垂れ下つたタローワールは懸垂氷河を思はせる。殊に澄んだ午後日光に曝射された時などは、花崗岩の熾烈な反射は色眼鏡の必要を感ずる程で、そんな時などは、殊にタローワールが懸垂氷河の外貌を偲ばせる。また技術からも、この岩場の登攀にはトリコニーよりはシュタイグアイゼンの効果が多く、壓迫した花崗岩の砂壁にぐくりぐくりと喰ひ込むスパイクの觸感、山男の太い神経に心地よいリズムの共鳴を催す。それはウエツターホルンの氷壁の登攀を聯想せしめる。更に、このタローワールの登攀にはアイスクテクニツクを應用する快味があるからであるから素敵だ。氷河を持たない日本の山では、冬から春にかけて、特種なビークを攀ちる以外には経験することの出来ない、ビツクルの生命を試すことが出来るんだから愉快だ。ビツクルの魂は、尖鋭なあのビツクの突端に凝つてゐる。その生命と、魂と、自分自身の全身靈魂とが相搏ち、冷たい火花を發するところに浮いた技術の莊嚴がある。

五

'ASHIYA LIFE'は、岩小屋の登見ら利用によつて、一段の愉快さを増した。それは高座の諸筋を遡つて、奥高座の少し

手前の左岸、すなはち遺跡の尾根から下る斜面の中央に位置してゐる。ロツク・クライマーが岩小屋生活に憧憬を持つことは本能的だ、それ以外に解説し修飾することは野暮の骨頂だ。潤澤の岩小舎を極高、および錫杖のそれについて考へて見るが好い。たゞ此處では、岩小屋の特徴だけを紹介しよう。

——原始人が、終日山野を狩り歩き、重い獲物を擔いで、棲所の岩穴に歸つた光景を想像する。そしてその岩穴が現在の岩屋の岩小屋だを考へてみたまへ。なほ太陽が高く輝いてゐるか、暑い夏の月明の夜だつたとする。彼等は直ぐ、小屋の屋根を掩ふたグレイシャー・テール型の巨岩の上で、汗になつた濡ひもの（若しそんなものを着てゐたとする）を脱ぎ捨て、何はさて置いても獲物の料理に取りかゝる。その日の獲物が豊富であり、満月の夜であつたならば、仲間を呼び集めて焚きたる月明りに照らされ、岩のグラウンド・テールの上で大騒ぎを初めるに違ひない。……

この怪奇な幻想を、現在の岩屋黨に當て落めても、大した苦情を挟む心配はないと思ふ。ROCK-GARDENの岩小屋の特徴は、この原始人たちの酒宴場？ になる大テールの笠石である。小春日の午後など、岩の觸覺に嫌きた物憂い卦を、すつ裸で「トカゲ」を纏め込むのに拵へ向きだ。紅葉がは入つたら、催足しなくつても仲間が下から大聲で呼んで呉れる。岩を視る眼がつかれたら、伸びをしなつても首を廻せば幾々とした青海原が慰めてくれる。秋の夜なき望遠鏡を覗きあけて、このテール岩で星座の布配や運行を観測するのも妙だし。話しに嫌きたら「藁の油」の合唱も面白い。

都屋か？ それは迷宮だ。少々しぶも吹き込むし、岩膚を傳ふ點滴が滲むが、それはテント用材で防ぐんだ。水が不便だつていふのか、贅澤はいひつゝなしだぜ

六

ビラー・ロツク (CELLAR ROCK) と呼んでゐるのは、懸垂岩のある萬物相のリフチミ「墓場」の間に介在する獨立した小さいピータだ。イングラントの湖水地方の有名な岩場にちなんだ理だ。此處にはエグレスにチロツク・ストーンを孕んだチムニーが懸つてゐる。それから燭燭岩 (CANDLE ROCK) が懸垂岩に面して、殆んどバーベディキュラーなピナクルを押して立ててゐる。このキャンデル・ロツクの初登攀などは相當に緊張させたものだ。向つて正面の左脇に、根方を灌木に掩はれた小松がある。こゝから右に、エツヂの缺けたレフチに沿ひてトラヴァースし、中央より少し右まで出る、左頭上に一つの手懸りがあり、それを利用して右上の足場に取りつき、更に左り上斜めに走るクラツクに沿ひてキャンデルの頂點に達するのだ。このピナクルの登攀は ROCK-GARDEN を日本アルプスに譬る、先づ「小槍」か、錫杖の「烏帽子岩」といふ筈だ。更にキャンデル・ロツクで愉快なのは、その下降だ。それには補助ザイルがあつたに越したことはないが、たいていはアンザイレのザイルを解いて間に會はせる「捨て綱」なんかは、もつたないから誰も使はない事にしてゐる。ルートは登路と反動の山側のザツタルに降る、それには「懸垂」の單脚式を利用すれば安全だ。そして降りてからピナクルの頭に竊んだザイルのループを外すのが、時によつてひどく苦勞だが、それには必らず「俺にやらせろ」といふ志願者が多いから心配は無用だ。——軽く手ごたへある位に手繰つておき、振り出すループは、手許で小さく先きで次第に大きくなる要領で、機を計つて勢よく投げかける。そしてループの波が頂上に達するより少し早い目にじやくり、氣味に引つ張るんだ。この要領も馴れて来れば、カウボーイの綱と一緒で、技術としての妙味や、手際の冴ねに自分ながら會心の微笑を感ず

るものだ。小楯のアンカレージからフェースを懸垂で下り、さてザツタルに立つて、ループを唯の One Easy で外した時の愉快さは、けだし想像に餘りあるだらう。

PILLAR-ROCK の尾根筋を西に、地獄谷の本流を隔てて、ひまの岩場がある。「新萬物」で呼んでゐる奴だ。R.C.C. のファルムに出てくる舞臺は大部分がこの岩場だ。第二の懸垂岩もあるし、尾根まで抜けた複雑なチムニーも懸つて居り、外の岩場とはまた異つた特徴を持つてゐる。

芦屋の岩場は、まづたく R.C.C. の At home だ。自分の家の欄に置いたものは忘れても、ROCK-GARDEN の岩なら何處にそんな鼓が何本ある。何處のウォールに通つてゐるトリコニーの齒形は、仲間の誰が何時懸つた時のだといふことまで精通してゐるから不思議だ。そして近頃は餘り多人数が押しかけるので、萬物相のチムニーが落石や剝落した砂礫で埋つて來たから、一日仲間で掘鑿作業をやらうなんて議まである熱心さだ。

(千九百二十七年十一月)



ドフ井オ・アルプス エクラン峯 藤木九三氏



芦屋ロックガーデン奥高座ガリー 藤木九三氏

山のふところへ憧れ

伊藤 愿

寂しさの内に我が本来の姿、飾り氣を離れた姿を見出したさに我は漂然として巖に上る。

偶、呪、巖のわづらはしさを逃れて只一人、人間の觸感を未だ知らない薄暗い森を歩み、岩角を踏んで、疲れた軀一つを佗しく岩小屋へ運ぶにつけても、我は只管に心の慰安を求めたさに山を歩ふ。

人交はりて讀し得ぬ心の淋しさに、我魂は靜けさを翹ひて我を山ふところへさ調ひ行く。

あらゆるわづらはしさをかなぐり捨て、熱し易い生一本な心のみをひたし抱いて、彷徨ひ歩く我が姿。

空虚なる心一つを抱きしめて、高き山に、深き谷に、晝輪は暗き森に、我は斯くして心の巖へさ立ち出でる。

斯くも淋しく人の子は久遠の姿を慕ふのか。

しろがねの峯々、落葉深き野邊。

くろがねの岩山、魔人の棲家よ！

その重い荷は汝を苦しめざるか？ 返逆の子よ！

それ迄に汝は本然の姿が見度いのか？ 然かも只ひこりで！

故郷の言葉

Von Henry Hoek „Schnee Sonne und Ski“

我只一人、幾時もの登高を続けぬ。今や夜になれり、山の中にて春の夜に。
小屋の中は我一人、ひそりほつち
静さは萬有を支配して、只有るものは無限の静さ、神の有せる慰み
將又星のまたゝける。
山の彼方圓雪湧き上りその雪は銀鼠色に輝きて
白銀に光る雪の間に峡谷の踊くひそまりかへり
山の喘かすかに響く、寝れ寝れ、寝れよ、いさし我が子よ！
此處ぞ汝れが風の故郷、自由のふるさと
我は幸福者よ、悠びやかに氣もやすく
手足をさきはなされた如くに伸び伸びと感ず
之なら何時間でも休みなしに歩きまはり登り彷徨へそうだ
こんな冷い夜でも歩き通せそうだ。
然し、そんな事はもうどうでもよい。最早そんなことは不要だ。
我が知り得るだらうものはすべて我があたりに
否我が内に潜みある。
我は我が心の内に故郷を選び彷徨ひ歩いたその末
やつとそれを獲しあてた。
斯くて我は即ち萬有、世界、永遠ぞ。
我は斯く只一人にて來し事を限りなく悦ぶ。
静寂よ！夜よ！星よ！汝れに感謝せんあらん限り。
汝れを愛せんこようなく！あたかも天空の無限の如くに。
銀色の雪、高い峰、瞬く星よ！我れ汝れに感謝せん
汝れこそ我が望みの、選ばれたるふるさとなれ
汝れと我れひたし結びて
限りなく生きたし、ふるさとと共に
その生活、その生命こそ、樂しき豊かなる奇しきものなれ！

登山の危険に就いて 翻譯

From G.D. Abraham „How to climb safely“

「……業々しい、又何と金のかゝる自殺の方法であらう！」と山登りを知らない人々は斯く這登山に就いて、あたかも我々が Neumatt の山頂の樅松を股き越す様な冒險を敢てするかの様な酷評を與へる。

嚴然と雪面に登じた Matterhorn に起つた慘事の知らせが下の村に届いた。村の若者二人が墜死した。村には大騒ぎが持上つて、村人の心は暗澹となつた。

山の災難は殆んてすべて登山者の慎重や常識が逸せられてゐたこと云ふ事に起因する。人間の傲慢に對する自然の恐ろしい復讐だ。

近來登山熱の勃興と共に山に於けるアクシデントも頻繁に傳へられる様になつた。然しなる程數に於ては多少増加したがその登山者總數との比例を考へて見ると決してそれ程多いものではないのである。

現今の登山者の數は十年前に較べ二十倍以上に増加してゐる。そして又冬期登山と云ふ事も今やウィンタースポーツとして一般に認めらるゝに到つた。

兎も角、斯く多數の人が山へ登る當然の結果、アクシデントも多くなつた。然かもそれが登山と云ふ事に就いて何の智識をも持ち合さない人々の起すアクシデントが多いこと云ふ事は注意すべき事である。

盲蛇に怯るすの聲で、危険な山腹を攀ち、クレバスの口を開いてゐる氷河や、果ては雪線以上の高所迄もエーデルワイスや珍しい高山植物を採集に出掛けて行く。突然脆いスノー・ブリッジに踏み込んで、落ち込んだ雪の中で跳いたり狂ひまはつたりするのだが、その果ては落ち込んだ氷河の中で凍死してしまふのだ。ふと横切らうとした雪の斜面には思ひ掛けのない水の切筋があつて、はつと思ふ間に足を踏み滑らして非常な勢で落ち込んでしまふ。新しくして無謀な結果はその生涯の最後となつてしまふのである。之が一般にアルプスで起るアクシデントの例である。

その内約一割五分位は熟練者のアクシデントであるが然し英人の遭難はその内でも五割に満たぬ程である。

之は決してそれかと思つて英人に勇敢さがないと思ふわけではない。その理由は何處にあるか？ 答は簡単である。即ち現今苟もアルプスに登らうと思ふ程の英人はもやみ前から英國の岩場で、ホールドに就いて、脆い岩の扱ひ方に就いて、尙又一般の登山の技術、ロープテクニク等に就いての研究をなし、それに習熟してゐるのだ。

斯くしてアルプスに安全に登る爲には先ず手初めに英國の岩場でみづもり練習すべきだと思ふ結論が出てくる。英國の岩場では雪線以上のグレイシャー・ブラクタイスやアイスクラフトを除いた他の一般のテクニクは充分練習する事が出来る。そしてそれ等にしても一般のテクニクを知つてゐる者に取つては容易に會得出来るものなのだ。その證據には英國のクライマーがアルプスに於て、あまりアクシデントを起さない事を見ても理解出来るよう。

由に於て年々幾多の悲劇が演ぜられる。墜落と思ふ事は如何なる場合でも恐ろしい事だ。實際人間が三百呎の處から落ちて三千里の處から落ちてゐる結果は同じ事なんだから。故にロツク・クライマーは周到なる注意を必要とする。ロツク・クライミングは今や確たるスポーツとして認められてゐる。年々 Expert は、勿論他の普通の登山路よりも険しいが

次々に新しいロープを發見して行く。今や如何にして安全に登るかと思ふ事になつてゐる。

私は今やブラクタイカクライミングの見地からして英國の Lake District の内 Windal Head の岩場をお勧めする。

Cumbrian の山は良い標古場である。ロープは色々な難客の程度に應じたものがある。要するに容易なコースから規則的にやり初めると思ふ事が肝要である。尙ほ好都合な事は、此處に於ける主要な標準的なロープには色々な研究がなされ難易の等級がつけてある。そのリストに従つて、最も容易なものから順序にその通り進めて行くのが最も良いと思ふ。

このリストは百項以上に及ぶてゐるが、その中の程度の高いものはほんの限られた極少數のエキスパートにのみ適くやり進められる事が出来よう。然かも中には多分全然登攀の不可能なものさへあるのである。

Windal 地方のロープは皆、ネイルドの齒痕が残されてゐて、然かも動んだ岩が比較的少いから練習には好適である。

變化に豊んでゐる色々な事をやるので一寸珍しい場所である。中には snowed out のよりも濃いものがある。それなんかは多分スイス一流のガイドでも怖毛を震ふだらう。それをよく無難な経験もない素人が試み様とする。そう云ふ忠言を伺ひ思はない輩がよくアクシデントを惹き起すのだ。

實際ロツク・クライミングに就いての一般の誤解を考へて見るに恐ろしい確な事である。アクシデントの犠牲者を檢屍した警官は「連中は實際、土着の人間が決してそれを試み様と夢想だもしない確な場所を越つた。然かも連中はアイスクラスを持つてゐないと思ふ様な事があつた。ホールドを作るアツクスなしではさうして登れ様か？」と云つてゐたが、實際こんな連中が多いのだ。

クライマーは度々烈しい衝動に驅られる事がある。又ロープの切筋と思ふ事は大膽恐ろしい事である。ロープが切れた爲

に取りかへしがつかぬ事が起るのだ。固定ロープの爲に災が誘導されるかどうかは疑問にしても、兎も角アルプスの頂には固定ロープがあつて、それが切れたら云ふ様な考は懐かれてゐるのだ。

クライミング・パーティが一本のロープに結び付けられてゐる云ふ事は外の事は得て置いても、若しリーダーが墜落した時ロープが切れないとすれば、之につながつてゐる後の人達はその爲一緒に引きずり込まれて落ちる事になる。之に就いてはビギナーに對する有効なヒントと共に簡単に説明すれば直ぐわかる事だ。

扱て、非常な絶壁で然かもスミースミ云ふ様な所は人間には行けそうにもなく、又大變危険そうに見えるがやつぱり多少の手懸はあるわけだ。多種多様な相をしてゐる尾根がありとすればその登攀の難易さはそれによつて決定される。ロープに絡つてエクスパートにリーダーされた一隊の有様は附近の自然の偉大さに比すれば虫けら同然だが、巨人の様な山の弱點を捜して征服して行く。此の場合最も熟練者が先頭して、適當な尾根を登らねばならぬ。二三十呎も登れば確實な良い足場が見出せるだらうから、そこで二番の登るのをロープを握つて援助する。三番目が来る前に又リーダーはロープを以つて安全を期して次の休憩場、テクニクで云へばアンカレージに連するのだ。この時二番はリーダーの登るのを注意してゐてビレ一してゐるロープを適當に繰り出してやる事が必要である。そのロープを巻きつけて、確保する岩角には小さいのは拳位のものから、随分大きいもの迄ある。之が所謂ビレ一とかビレイニングビンとか云ふものだ。

確保の効用に就いては *Wendle* 地方の最近のアクシデントに於て良く證明せられてゐる。

一九〇九年未經験なクライマーが *Crane Gully* の *Beale's Nest Ridge* を下から狙つた時の事である。これは英國の岩場の中でも最も困難とされてゐるものである。取りつきからして麓の方には、殆ど百呎にも達する様な切り立つた峭壁があ

る。此處には最初からして厄介な所で、この右側見も二十呎程に鋭い山破に達する所に有望な足場を持つてゐる。又左方はオーバー・ハンダに終つてゐる。毎この後を登るには只指先をさへるにやうくのキールドがあるばかりだから、足は宙ぶらさなるのだ。この短いが、然し困難な場所で行の上方を十二呎トラスしてゐた時リーダーがスリッパした。何の叫聲も上げずに左の岩の方へ落ちて来た。二番はロープを岩角に巻いてビレ一してゐたのだがその非常な緊張の爲めロープが切れて了つた。リーダーのアクシデントによつて如何なる結果が起るか？ 之は重大な事である。

之等のアクシデントに鑑みて、斯かる特別な困難なる場所では短き場合であればリーダーは二本のロープを使用してその危険に備へる云ふ事が考へられるに到つた。

然るに以上の *Beale's Nest Ridge* の場合はこの安全な方法が講じられてゐなかつた事に起因する。この場合は、先頭になつてゐるリーダーに取つて如何にロープが役立たぬか云ふ事を示してゐる。吾々が使用する唯一の英國山岳會のロープは二十貫の人間が十呎宙空を落下したのに耐へるテストを施してゐる。

リーダーが落ちても幸運にも尾根で止る云ふ様な場合もあるが、然しそれは稀であるから、結局リーダーはスリッパすべからず云ふ事になる。リーダーはその隊中最も熟練したクライマーであり全員を統制する者でなければならぬ。

リーダーが若し落ちるを豫知すればリーダーが甚だしく不都合にならぬ限り、そこを避けさすべきである。又オーバー・ハンダの如き所は二番の肩、頭等を利用した横の方法で登攀出来る。

リーダーの最も心すべきは慎重に登る事、手よりも足を利用し、下降の不可能の場所な可及的に避ける事、常に下降の際の爲めの餘力を貯へて置く事である。ロープが順調に来る様に小さな小さな凸凹にでも氣をくばり注意してこそ、極めて

困難な場所でもリーダーの安全は期せられるのである。下降の際はロープをこう云ふ岩角にからませば安全に下りられるのである。

困難なクラツクの登攀にはよく小さな岩が機代用となつてゐて、ロープをその後から巻きつけて大いに役立つ事がある。有名な初登攀に於ては屢々之の法が用ひられた。腰より解いたロープを下のリッヅからその岩にうまく投げ掛けテストして安全ならばリーダーに取つて素敵なうまい事である。こんな事は然し稀だ。そして此の場合多少宙ぶらになる事はある。こうしてリーダーは上へ登る事が出来れば恐ろしい墜落から免れてゐるが、然し又この時ロープが機になつてゐる岩から時に外れる云ふ虞がある。

見て、こう云ふ風な事が安全に登攀するに云ふ事に就いて多大の効果がある。斯くしてアルプスに於ける非常な技術の進歩發達となつて来た。遂にあの *Mont Blanc* の氷河に纏はれた鋭峰も征服されて了つた。一九一一年になされた數多き功績の内最も素晴らしいのはその夏に完全にコンディションに於ける *Alain de Gribou* 及隣峰 *Picet* 登攀であるが、後年此處でアクシデントが起つた。その原因を見るべきはリーダーの墜落、二番に婦人が居つた事、等であるが最も重大なことは此處は不安定な岩に當り且つ、數回トラバースがある云ふ事が露あわかつてゐたのにアンディレンしてゐなかつた云ふ事に起因する。之なきは正しく常規通りアンディレンしてゐれば不幸は起り得なかつた筈である。其他先頭してゐるリーダーの墜落云ふ事は近代的登山傾向の危険として考へられて来た事である。これに就いては一番二番云ふ様な重要な位置には最もしつかりした人を置いて、その危険に對して防禦すべきである。

又 *Highway* に於てはロック・クライミングの技術と共に否、それ以上にアイス・クラフトの技術を必要とする。この

地方では岩場の上に馴れた人には幾分様子が異なるから、良く細心の注意を以つて臨まねばならぬ。即ち時間、天候、雪、氷、其他山相とか一般の状態に就いて良く研究してその知識を得る事が肝要である。

又この様なハイアルプスでは一流のガイドを必要とする。ガイドの選擇云ふ事もむづかしいが、又その待遇もよく心せなければならぬ。無闇に多額の金を與へる云ふ事は良いガイドを墮落せしめる事なるのである。良いガイドを雇ふのは老練家に俟たねばならぬ。

現今雪線以下の岩に於て熱線な若いクライマーは自信のあまり、アルプスを殊に比較的小さく容易なものを、こもするにガイドレスで登らうとする傾向のあるは憂ふべき事である。此う云ふ事によつて起つたアクシデントは殆んどアクシデント總數の八割に達してゐる云ふ事は容易に觀過する事の出来ない事である。ガイドレス云ふ事は山の相貌、地勢、特殊な變化しやすい天候等に就いて精進した後でなければ、決して試みるべきではない。

本國では夏期、冬期共にロック・クライミングに就いての熟練家であつても、ハイアルプスに於ては二シーズン以上を一流のガイドと共に歩いた後でなければガイドレス云ふ事は危険である。熟練、常識、慎重を以つてすれば二つの危険を除いた外は大抵の危険は防止する事が出来るものだ。却その就二つの危険は避くべからざる危険にして、天候の急激なる險惡化及び落石がそれである。

避難所無く又救助される見込みもない様な高山で、嵐に遭ふ云ふ事は全く恐ろしい経験である。あの憧憬の *Jungfrau* に登つた人はその附近の最も有名な難所として *Greine White Marden* を知つてゐるであらう。幸福と不幸、樂園と地獄では隣り合せだ。輕率な、不案内な人達は自然の美しさに幻惑されて、しらす／＼にひそかにしのび寄る死の惡魔の捕虜にな

つて了ふ。又近代的登山の傾向によつて良く次の様な悲惨な結果を招く事がある。——思はしくない天氣の日に二つの登山隊が Jungfrau に登つた。そして行方不明になつて了つた。捜索隊は繰り出されたが死體は発見されなかつた。その代り他の一人の登山者の死體を発見した。彼もやつぱり悪い天氣の日に單獨登山を企て、その犠牲となつたのである。——扱て、豫測出来なかつた天候の急變によつて起つたアクシデントは、初めから悪い天氣の日に山に登つた爲に招いたアクシデントは明かに區別して考へる必要がある。前者は不可抗力である事を認められるが、後者はその責任は當事者にある。師卒の非難を免れないのである。又之が高山で起るアクシデントの馬鹿氣な原因になる事が多いのである。そんなに押へ切れない衝動を感じても、嵐の後三日を経過しなければ決して大きな峰を狙つてはいけない云ふ事は、安全を期する上に於て、遵守すべき言である。

之の外の避け得可からざる危険は落石及び、落水である。年々常に幾人かの犠牲者を出してゐるがその数は割合僅少なものである。

雪崩はその出る場所に就いては良く知られてゐる上に、その研究によつて避けられるから、暫くこれを措き、今は只太陽と霜との作用によつて起るものに就いて述べる。

山より比較的小さい岩片や氷片が落ちる。中には登山者自身が落すものもあるが、今之は別として、實際に考ふべきは天候の作用によつて起るものである。時刻も午後には之が特に著しい。故に之が危険帯として知れてゐる所は午後此處を通過するを可及的に避ける事が必要である。この代表的な二つの危険帯は Metchorn の Great Stone Couloir, Wetterhorn Couloir である。此處で行き暮れた隊は枚舉に遑がない。屢々アクシデントも起きた有名な難場である。登山者は、萬年

雪の中に私かに之等の恐ろしい危険が潜んでゐる事を良くわきまへねばならぬ。

近頃の記録を通じて見るに、單獨登山云ふ事は増加しつゝあるが、之はあまり正しい事ではない。雪の聖處を漫りに侵すものは死を覺悟しなければならぬ。若し只引き籠つてゐるだけならば岩山ですら二三年位は大丈夫生存出来ようが、一寸滑つたり墮いたりする事は只の平地でも危い事であるのに、況してや高山に於ては重大な結果を齎すものである。ほんの一寸した不注意から思はぬ事になつて了ふ。

大きな雪に蔽はれた峰では益々單獨登山に對する危険が増して来る。ハイアルプスの氷河では時に數百呎もの深さのクレパスが開いてゐる事がある。然かも屢々其等のクレパスはその上を雪の一層で覆はれてゐるので、平に見えて人を欺く事がある。この隠れたクレパスを発見するには仲々困難で熟練を要する。午後には太陽線が、このクレパスの上に照つてゐるスノー・ブリッジの雪質を柔かくする。この時こそ此處は單獨登山家に取つては全く死の陷阱である。

発見出来ない様なクレパスで起るアクシデントの數によつてハイアルプスの氷河を登つて行く事は、大變危険の様に誇張されて了つたが、然し之はロープテクニクによつて、安全を期す事が出来る。先づ人數は三人より少なくては不可である。即ち皆がアンザイレンしてこのクレパスのある所をよく知つてゐる者が先頭となつて、其の他のものは必ず先頭の足跡に依りて行けば、萬一その内の一人があやまつてスノー・ブリッジに踏込んで、他のものがロープを繋める事によつて不幸を防ぐ事が出来る。

又之に就いて登山者が若し墜落した場合之を一人で引き上げる事は仲々困難で、殆ん不可能である云ふ事は只二人よりなるパーティは高山に於ては危険である云ふ結論を導く。然かも之は相當智識ある人が良くやる危険であつて、毎年之に

よる犠牲者が出るのである。先般、二人のエキスパートが *Whispering* を登り終へて、降り初めた時に次の様な事件が起つた。彼等はゆつくり進み乍ら、雪山の切斷してゐる具合を見付ける爲、左右を見廻しつゝ、降つて行つた。勿論之は正しい方法である。クレバスがある時はその上の雪面は常に一寸下つてゐるものであるから、エキスパートにはこの機にして氣付かれるものである。先頭はその様な所を通る時は充分注意してゐたのであつたが、如何したのか突然彼の立つてゐる所が氷河の底へ落ち込み、不運にも彼も共に墜落して行つた。そのクレバスの縁に居た一人の仲間はやつと自分のアイスピッケルを雪に突込む事だけが出来て、それにロープを縛りつけて落下を防がうとした。然しロープの非常な緊張の爲めにピッケルが雪から抜けて了つた。彼は俯伏せに投出され乍ら死物狂ひでロープをしがみ握つてゐた。こうして約一時間半ばかり云ふものは非常な力ミ、不撓不屈の勇敢な行爲を以つて深みに引き込まれて行くのを防いでゐた。彼の救を求むる必死の叫びには何の答も聞かない。然かも己は次第々々にクレバスの中に引き込まれて行く。この時初めて彼はクレバスの中に落ち込んでゐる友の叫聲——恐ろしい救を聞いた。「ロープを切れ」……ロープを切り終つた時、只聞ゆるものは微かな呻聲ばかりであつた。……一人の生残者の急報によつて救助の爲め捜索隊が作られたが、悪天候に阻まれて出發が遅れた。その結果捜索隊の手によつて空しく死體のみが発見せられた。

大きな峰の一番の頂上は時としては雪のコレニスがおつ冠さつてゐる。これを上から発見する事は困難な事である上、又これは登り易いものだから、登山者はそのコレニスより離れた山の背面の險しい、傾斜に沿つてゐる安全な路よりも、危険でも登降容易な方を辿り勝である。最近のアクシデントがこれの如何に危険であるか云ふ事ミ、又同時にクライマーの沈着がこう云ふ場合如何に肝要なものであるか云ふ事を示してゐる。それは *Monte Diavola* の細い頂上で四人の學生の

一隊が遭難した時であつた。大きなコレニスは明かにわかつてゐたので、一歩々々注意して進んでゐたが突然リーダーは後方で物凄い音を聞いた。彼は直感的に思はずハツと危険を覺つた。コレニスの大きな塊は崩壊してそれと共に彼の友も谷底に落ちつゝあるのを目撃した。直ちに彼は反対側の險しい谷に飛び降りた。彼の墜落はコレニスを横切つてロープに繋がつたパーティが兩方にペンデュラムの様に振ら下がつて止つた。パーティは斯くして危機を逃したが不幸なことに、ロープがその非常な張りの爲に最後の一人の所で、切斷して了つた。一人の人間が黒い點となつて、雪崩の持ち上げる雪雲の中彼方へ小さくなつて行く。その悲壯な有様をその友は劇しい恐怖に戦き乍ら目のあたり突然見送つたのである。彼は二三度もんざり打つて三千尺もの谷底の *Chlorine* へ墜落して見なくなつた。生存者の内一人はその頂上を極めた。彼等は直ちに下山し、捜索隊の手によつて死體は発見された。

之の行は少くとも一人には非常な災禍を招いたのではあるが、リーダーの驚くべき沈着さミ、その良い處置を取る機敏さミがなかつたならば、その犠牲は四倍になつてゐるのだ。之によつてもリーダーの責任が如何に重いものであるか云ふ事が了解されるであらう。

登攀に成功した後その悦びのあまり、下降の際、外見何の危険もなさそうな雪の斜面を見るとき、一寸グレイセイドしたくなるものである。登山者はその雪の斜面の勾配に殆んど直角に立つて、ピッケルで體を後に支へ、それで制動し乍ら、蛇を取り乍ら滑降するのである。

然しこのグレイセイディングで下降する事は愉快なものであるが、屢々危険を伴ふものである。例へば突然氷の断面に滑つて来る事がある。丁度岩がある爲に雪面に太陽の光線や熱があたらない所は雪質がタルスタになつてゐるので、此處は非常な

勢で滑る様に滑つて行く。若し此の時突然前面に岩や深いクレバスが出現したら、殆んき命はないのである。大きな口を開いたクレバスが雪の斜面を横切つてゐても、一般に上からは仲を見ないものである。グリセイディングに依つて起るアクシデントの殆んき總ては、曾つて登つて慣れた路以外のコースを取つて降る爲に起因するものである。

之に就いては「以前に通つた経験のある所でなければ決してグリセイディングするべからず」と云ふ事は最も必要な事である。

最後に「仰つくり慎重に登る事は最も安全な登山法である。身體のコンディション其他に就て聊かでも危険の疑のあつた時は断然、中止して歸るべきである」と云ふ事を力説する。登山は斯くも熱心なる人達に對して多大の犠牲を要求する。壯嚴、雄大なる聖地への憧憬は限りなく人達を誘惑する。然し眞の登山者の資格は、常に冷靜なる理性を要求する。

登山者が岩山や或は岩壁以上の高山を如何にして安全に登るべきかを尋ねるならばそれは只、不斷の注意と慎重周到な觀察によつてのみ可能であるに答ふるのみである。

エブラハム氏の美しい文章をうまく表現し得なかつたのは甚だ遺憾である。拙筆を恥ぢる次第である。

(櫻澤、香月慶太、伊藤願)

【終】

穂高の遭難 救援記

伊藤 藤 愿

八月四日

その日は曇のない良い天気だった。山の親友である彌太のM君と共に上高地の小平のキナムプを出發してその峻嶒々岳の肩ノ小屋に來てゐた。權へ來た目的はこの附近で何か面白い岩を試みたいと思つてやつて來たのだ。

八月五日

山小屋特有の賑々しさで早く日が醒めたが二人共御來先を見るよりも宿帳を食ひ度い方でそれに天候の見込みもあり善んばしくないので九時過ぎ迄二階で寝てゐた。雲が多くてとても晴れる見込みはないが、然しあまり寝呆らしてゐられないのでさう／＼下へ降りて食事を済まし、経路をたどりして、一日休養を決め込んで、ロープの巻直しなんかをしてゐた。

すると午前十一時過ぎ殺生的小屋から使があつて「穂高に怪我人が出來たから人夫を出して呉れ」との事だ。驚いて様子を探れるが使はあまり真くは知らぬ。そして人夫が足りないとの事だ。Mと彼となら何さか役に立たうと云ふわけで頼まれて行く事になった。二人共リユタグサタは二つ宛持つて來てゐたので、小さい方にザイ

ルと地圖、磁石、草鞋、チョコレートだけを入れて、少々暇が降つてゐるので雨外装を着て殺生小屋へ駆け下りた。勿論草鞋穿きだ。自分達は平生山務ばかりを用いてはゐるが、穂高を殊に雨の日、早く走らねば草鞋が最も良いからだ。私は足袋を持つてゐなかつたのでM氏のを拝借して行つた。

殺生小屋には穂高小屋の主の今田軍太郎が雨の中に立つてゐる。シャタの上に直ぐ傘を差してゐるだけの寒そうなたたきでわかつたが着物を怪我人に着せてやつて來たのだ。彼から様子のおかしさを聞き取つた。昨日殆んど同時に北穂のネット附近に怪我人を奥穂で死人さが出たさ云ふ事だ。何處の人かと聞くに怪我人の方はわからぬが奥穂の死人は京大生の悪習?と云ふ。真く聞いて見るに何か紙片を見せた。黒髪でなくて石黒だ。石黒は二人は思はずハタと石黒だ。おまけに中津はMと同僚だ。大高を出て今年京大に入つた所だ。然し何しろ急を要するので、直ぐ避難地へと駆け出した。人夫は殺生から脚人夫二人、肩より小細と奥村、それに今田、M、私の七名だ。遂に殺生小屋から大坂、中ノ岳の中腹へつて雨岳

へ出る。今年初めて作られた朝霧峠の近道だ。

霧が昇つて雨が降つてゐる中を霧海や岩場を走つて行くのは中々難なことでなかつた。彼等八人は息を潰れてゐる事とて早い。こちらに草鞋になれてゐないので岩に鎖を繋ぎ登つたりして間分着しい。只管に走つてゐるのでさう通つてゐるのかかわらぬ。人夫に聞いてもたよりない。先頭へ走つてゐる今川を唯一の頼りとして皆が走つてゐるのだ。雨音近くなつて霧海路に合した事がわかつた。南岳の三角點に來たのは一時十二分。殺生小屋を十二時三十分に出發したから丁度四十二分かゝつただけだ。殺生から南岳迄四十二分には普通に見合せて置いた。通常ならば三時間位は充分かつて来るのだ。何しろ朝霧峠の案内人が先頭で面から空身で来るのだから筋道もない。それで南岳に着いた時は皆フーッ云つて息をはずませてゐた。暫くは人の一寸休んでまた駆け出した。もう霧海路を走つてゐるのだ。霧海も無事に通りすぎた。群八人夫がさうすれば通れぬでそれが皆の氣配りだつた。

つがて重太郎が「オーイ」「オーイ」と叫び乍ら進んでゐる肉「オーイ」と割合端な返事が聞けた。さうして居た。「今行くぞ」と呼ばはりつゝ、近附いた。霧の中からは音が立つてゐる人の姿が認められた。距離に獲つて獲つてはつきりした。面には何か布を巻いてゐる、白い布だらうが血の爲に紅になつてゐる。顔に濡れて重さうだ。端からは顔がたれてゐる顔に見ゆる。顔は血で濡れてゐる事は出来ぬ。傷が痛くもさうも正視出来ぬ。眼は赤く充血し、眼は紫色にはれ上つて、若てゐるスエーデンは破れて、手も

傷の跡にはベタトリ血がへばり着いてゐる。スエーデンの上には重太郎が着てた着物があつた。早速チコロレトを出して與へる「有難う有難う」と云ふ。然の様な様子だ。重太郎が「飯を食ひましたか」と尋ねた。見る足もさうには健康が罷いてゐる。食べてゐる様子もない。

彼等これから如何にして救ひ出すかに就いて相談した。この場所には最も困つた場所だ。何處からとも一番遠いのだ。南岳小屋へ逃れて行つても又何處かへ下さればならぬ。霧海路へ下るすには霧谷を下さればならぬ。之はとも無理だ。丈夫な者ばかりで無理な所だから。霧谷小屋へ逃れて行つても又何處かへ下さればならぬ。それに霧谷小屋へは難易を越つて歸るにはならぬ。こんな目に然かも後我人を連れてゐてはさうと無理だ。すると霧谷上高地へ下るす云ふ事になる。それには霧谷水谷を下すか又は一應霧谷の岩小屋へ行つてそれから上高地へ下るか二途だ。水谷を下るには霧谷と云ふので回答を決まつた。ゲイルを以つて小屋と幾分だが後我人を中にしてアンザインする。北風の腹をへつるのだ。人の通らない所だから通れない。それにゲイルが岩だらう。青心の末流の地味なやつて來た。三時だ。どうも道がはつきりしないらしい。もさうと路なんて無いんだが見當て行くのだ。四時。霧谷のゲイルを見つけてそれを握る。皆の意見がまち／＼だ。霧谷へ出られると主張するものさ。未だ水谷だと云ふものと分れた。天候は悪い見込はつかぬ。相談の結果もさうな途をひかへず事になる。然し今日はもう駄目だので野營すると決めた。それで食料がないので今更と奥村は霧谷

小屋路通つて明初早く飯を持つて迎ひに来る事となつた。ほんの一寸飯を喰つた。今朝から一度より食つてゐないんだ。

二人は食羽やなんか少しでも野營に役立つものを我々に残して、霧谷の如くに走つてもと来た途へ消れて了つた。

さあ野營の準備だ場所を選定して焚火の用意をした。出来るだけ多くの焚火をする事だ。飯を山程残し集めた。小屋が苦の末々タナだけで聞かれてゐる生の薪で火をこさへた手際には感心した。六時頃漸く焚火が出来た。合羽で小屋掛を急遽して怪我人を入れた。顔に未だはつきりさやまぬ。日はさうよりさくた。暗闇だ。只焚火が盛に燃えてゐるだけだ。飯を食ひ度いが食ふと明朝に差し支へる。チコロレトも皆でわけるとなつて了つた。何となく事はない。只焚火を見つめ乍ら翌朝を待つのだ。真傷者が傷の苦痛を訴へる。血に濡れた布を取つて軟膏を塗つて消毒をした。脚の傷にはオサを塗る。伐り突めた傷の上に積になる。腫ようするが駄目だ。九時頃雨は止まぬ。十一時。漸く空が晴れた。星を一つ見付けた。時はほん／＼に過ぎかつた。睡れぬ。一時間一時間を知つてゐる。時間のたつのが特選しい。長い夜。風も止まぬ。霧がこたへる。不安な心持だ。「霧海路の山」霧海でこんな風に、落ち付かぬ心を持へて眠り難く一夜を明す事は又さう得意ない。眠りは浅い。只うつく／＼してゐるだけだ。風が吹けば醒める。焚火が喜ばれば又眠める。うつく／＼とまどろむ事すら出来ぬ。

八月六日

永き雨へ疑き夜は明けた。あたりが漸くほの白んで來た。五時少

し晴だ。昨夜寝た飯を分けて、ほんの形ばかりの食事をした。

持つてゐたベタアードコンパスを取り出して同と共に現在居る場所の測定をやつた。即ち現在居る場所は霧谷(霧谷測點部五萬分ノ一)圖幅に於て霧谷水谷の東谷と書いてゐる谷の字と唐谷の唐の字を讀んだ丁度中央と云ふ事が測定された。この時は半信半疑だったが後になつてその正しな事を知つた。即ち之を初めて實用に供したわけだ。

焚火は増んどおきかりになつてゐたが水を掛けて完全に消した五時三十分。さあ出發だ。思ひ出の多い場所を後にして、真傷者を連れて霧谷小屋とアンザインするがそのゲイルの一端を取つて先導する。昨日來た所を引きかへすのだ。

途は相變らず悪い。然し真傷者は案外元氣だ。足取りもしつかりしてゐる。後導人さほろくない。害毒も瀧らぬ。只湯を訴へるだけだ。その患状は健康には感心した。昨日から色々聞き訊いた事で事件の大略はわかつた。

(八月三日) 大槍小屋を出發して殺生小屋よりの霧谷無難路(昨日教養隊一行が通つて来た道)を辿つて南岳路無事にやつて來た。その日は割合天候が良かったのだ。それで彼は獨りで案内人無しでやつた。曾つて一度も霧谷は通つた事は無かつたさうだ。荷物に約四重輪。勝手にセッケルと指し置いた。リニタチタタの上には毛布が結びつてあつた。南岳の頂上迄は無事だった。それから霧谷路の通り北嶺へ途を辿つた。南岳の頂上、北嶺のサレットの北、丁度南岳の長い尾根が終る所あたりで水道は左の側谷の中へ

入り場側より信州側へ移る所、事件が起つたのだ。途は左へからむが本當であるのに右へや、逆らしいものがある。うつかりすれば右の方へ行きやすい所を、初めてではあるので當然右へや逆通りまっすぐ進んだのだ。この途は當然行き詰りになる。行手は暗壁となりチムニの様なものにおつゝ、かかる。普通の人に當然引きかへさなければ行けない所だ。そこで荷物に大きいし、両手は塞がっている。失策を防ぐ事が出来なかつたらしい。懸念となつたわけである、頭部の頭部及び顔面、手足の傷、腰部の打撲はその時に受けたらしい。幸運にも途中或る岩角で止まつた。

するとその日天候は悪くないので、極高線走者が幾人も通つた。その内案内人松下もお客を案内してその日早く槍の肩の小屋を出發して極高を離れてゐた。南岳の馬根より北嶺のキレット附近を通つてゐる時何處かで苦しさうな故を求むる聲を聞いた様に思つた。留し様子を見たがわからぬのでそのまゝ、氣絶しになりつゝもあり真くない天候に余儀なくお客を連れてゐる事とて、極高小屋に急いだ。この時が凡そ十時半位だつたとか。

極高小屋で今田重太郎にこの事を告げた。重太郎は人夫一人と共に直ぐ捜索に来た。松下の言によつて二人は北嶺のキレットの方へ急いで行つてそこで聲を限り、呼ばつたが何の返事もない。探しあぐんで引きかへした。その際湖澤のあたりで呼んで見ると、敵かに返事があつた。又北嶺へ引きかへすと返事がない。

目に事にかゝる、小屋にはお客がある。やむなく引きかへして極高小屋へ歸つて来た。之は四時半頃の事だ。すると石

屋君が奥壁で墜死して遺骸は小屋の下方雪場にあると云ふ有様。二つの事件に一時に直面した彼今日は随分困つた。北嶺の遺骸者は氣絶した。石屋君の方の手番、遺骸をしなければならぬ。上高地に便を出さなければならぬ。小屋にはお客がある。人手が足らぬ。彼の當時頭脳は一方ではなかつた。

斯くして現れた八月四日は事行かぬ。不安、無様、氣絶の心地を抱いて薄暗い燈の下で寂して通夜を待たぬ。……翌る八月五日は天候は真くない。霧が晴れぬ上に霧さへ降る有様だ。重太郎は然し南岳の遺骸者が氣絶したので暗い内から飯を用意して捜索に出かけた。雨のツグ降る中を北嶺を過ぎ、南岳の足根にかゝつた。呼ばはつては返事が聞かないかと注意しつつ。幸ひにも憐れな姿の遺骸者を見つけた。……其後遺骸者はビシケル一本を頼りに死物狂で登山を極上つたのだ。そして救を求めんと少しく歩きまはつたらしい、然しそれは無駄だつた。救護の手来る見込のない悲歎の内、雨のツグ降る風寒、極高の岩角で一衣を脱したのだ。

重太郎は遺骸者に已むべくある衣類をかけ、飯を置いて、暫く待つてゐる様子をみて、養生小屋へ急いだのだ。重太郎がシヤター一枚の上に只雨合羽を着ただけの姿をしてゐたのは、此う云ふわけなのだ。

そのころ昨日通つた途を引返へして漸く北嶺の大キレットに着いた時、極高小屋から昨日の約束通り重太郎と奥村とが飯を持つて迎へに来くれた。外に上高地から上つて来た中如と湖澤とが一緒に来てゐた。七時五分だ。然し今暫くこのまゝで場所の真い處

迄進んでそこでザイルを解いて休憩した。握り飯をうんま嚼へて来てくれたのが有難かつた。十七分から五十二分迄つゝ休んだ。湖澤は現場にあると云ふリキツタを取りに出掛けた。

さあ之から一番困難な所だ。さつきの通りアンザイレンして出發した。難關は皆の懸命の努力で無事通過し得て北嶺の頂上を過ぎ北嶺と湖澤の間に着いた。之からはまづ直ぐに降つて岩小屋へ行くのだ。カラや雪渓も無事過ぎて十時に湖澤の岩小屋へ着く事が出来た。随分なアルバイトであつた。湖澤側から吹き上げる寒風、露の爲めザイルを持つ手はシビレて了つてゐた。眉毛には露の粒に濡れりつてゐた。連る一人なんかはもう顔の極高は、いくら金をやると云はれてもやつて来ぬと云つてゐた程だつた。

兎も角も岩小屋へ着いた。午前十時だ。もう之から後は大して案ずる事はない。焚火を焚いて暖まつた。やがて湖澤が自のリュツサックと茶褐色の毛布を持つて歸つて来た。谷の直ぐ口に毛布を認めて容易にリュツタの所在がわかつた。あり合せの飯盒で湯を沸かししてゆつくり休む。

岩小屋で休んでゐる内十一時過ぎになつて十人許りの人達が雪場を上つて来るのを認めた。注意してあると戸板を持つてゐる。石屋君の遺骸を取りに上高地からやつて来た人達だ。人夫の中には松下(兄や上高地に墓子行脚に来る金正の主人なんかゐる。學生風の三人はN君とT君と高橋の下。Mと一緒に雪渓を降り下り一行の所へ走つて行つた。N君は石屋君と共に遺骸現場に一緒に居たのだ。呆然としてゐる様子は程の毒な程だつた。湖畔上に受たけシヨツタ

は異状なものには違ひない。一行と暫く話をして一緒に遺骸を下るしに行きかけたが、岩小屋に居る人達には何と云つてないので一行から一寸離れて岩小屋の方へそれた。Tも一緒に。

後我人の方には大丈夫だといふ手もあるで別を告げて彼等一行は上高地へ、三人はT君一行の後を追つてカラや雪渓を上り初めた。急にMが立ちどまつて無表情な顔をする。石屋の死骸を見るに「認びん、痛々しい」と云ひ出す。重苦しい氣分が三人を支配する。誰しも同じ氣持だ。誰か云ひ出すのを待つてゐたのだ。期せずして三人は寂しい岩小屋へ戻つてゐた。MとTと自分。

初めて登る山は難關——死と云ふ事に直面した。重苦しい氣分に直面した。三人のこの時語つた事は共に本實時に我等の懐かに聞かれてゐた。岩小屋の内で語り合つた言葉はひとしお胸に浸み込んだ。人生の最も難關なる死に直面してゐる時だ。

それで三人は岩小屋に暫し居つてせめて遺骸が包まれてから行かうと決めた。カラ／＼岩の落ちる音のし初める頃大急ぎで登つて行つた。

撒包みになつて後松をしばりつけたまゝのほんの粗末な一箇の包。それが今ほ亡き後だ。太い紐をつけてカラや雪の上を引き下ろすのだ。後綱を取る自分もすればころびそうだが、人々は直ぐに軍靴を切つて、ばさ／＼ガサの上を滑るのだから草鞋はまたぐ間に切れて了ふ。

この取巻を自分手裏に思ふ人があるかも知れない。然しそれは山を知らない人だ。自分達は死者に對して出来るだけ丁寧にし度い。

が、さてもこれ以上は出来ないので。普通人が一人で下りるのすら危険な場所なのだ。然し若しこんな様子を父が見られたらと人々は囁き合っていたが……

岩小屋の下で戸板に移した。之からは前分譲したと云へ撥ぐ人夫衆の荷物は一通りではない。横尾の岩小屋で一行が来る時待つて来た横尾の上へこれかして吊るにした。泥白いシャツが濡ましい感じを一入させる。遺骸の上に置かれてある一束の荷物は、彼が生前親しかった友の手肉けし、せめての心遣りであつたのだ。

闇が深く、まるで携帯用の天幕を合羽代用として懸けてある道は狭く、悪い。吊るがつかへる事も難い。自分達はその後について行く。無言だ。然し時々N君に當時の様子を尋ねる。気の毒だつたが、ガリガリ零れただけの答へを得て大略は解つた。

新しくして白濁の森林省の岩小屋へ着いた。小屋をながしてふ番だつたが、うまく行かぬ。遂に仕方がないから軒下に遺骸を置いて三人宛人夫衆が遺棄する事となつて、其他のものは二丁離れた岩小屋へ行く。自分と同とは電話で島々へ連絡する用意を引受けて上高地のキヤムアに歸つた。そして五千尺のバラツキに居る大高の人達に清水屋迄電話を掛けに行つてもらつた。返事は島々で、監視その家で、明朝早く島々へ搬出さればならぬのだ。さ、そして石黒君の父君は島々で待つてゐられる事だつた。そこで一應事は済んだ。十時過ぎだ。五千尺旅館でN君と共に飯を食つてこの夜は自分達の親しい仲間、神戸高南のテントに寝た。昨夜の睡眠不足を取りかへさう。

自分が八月八日下山の締め島々へ来た時に石黒君及N君が前晩で會つた人即ち金正の主人に會つてその時の話を聞き、又N君よりその日の事件發生迄の様子及墜落の事等について聞いたので、之等は参考になると思ふから少しく書いて置かう。

(八月四日) 真い天候だ。大坂高校の連中がT君がリーダーで槍潭を経て進へ行つた。N君と石黒君の二人は岩川谷を経て橋高へ行く。朝より十時半頃小形のバラツキを出発した。之は決して悪い出發と一概に云ふ事は出来ぬ。何と云へばこの日の予定の橋高小屋迄は五時間位あれば十分なのだから。

岩川谷を登つて前橋高頂上に無事やつて来た。その時金正の主人の一行と會つて談話したり驚異を拂つてもらつたりした。さうだ。この時突かれた談話は思へば縁起の悪い事かのみ云つてゐた。さうだ。「山の頂上で自分のまはりには五色の輪光が出来る生得になつた——(註之は人夫の内にさう述べてゐるものがあるからだ)——それで、これから下へ落ちたら生得が死体になる……」さう云ふ様な事を話した。金正の主人は「山では不吉な事は云へぬ。てつさり言ひ申てました。」と云つてゐた。

其他不吉と云へばこの夏の山旅では彼のセツケルが折れた。落しものかし。

二人は三十分ばかりも休んで出發した。然し折からの霧で踏まつて北尾根に迷ひ込んだ。やがて様子のちがふと云ふ事が氣が付いて

引きかへし本當の縦走路を辿つて奥壁へと向つた。陽シヨレメンに時々隠れた。奥壁の手前の峰を奥壁の頂上と思ひ、又奥壁の間よりかすかに見えた峰(註これが本當の奥壁の頂上)が積石のある岩で尖つてゐるので奥のシャンドルと思ひ込んで前進した。前橋の北尾根の失敗と云ひ又今も……霧の中で二人は驚き過ぎて了つた。せめて霧なりとも晴れてくれれば……途を迷つた二人は萬軍つきてトラ／＼セツケルの跡を探し初めた。あちこち駆けずり廻つた末セツケルの跡を辿り、大慌びした。奥壁の頂上によつて来たが然し既に心の平静を失つてゐた。二人共草鞋は切れて石黒君は足袋だけになつてゐた。N君も片方だけは切れてゐた。石黒君は二人はもう諦めさうと云ふのを失つて通へない。要するに早く小屋へ辿り着きたかつた。ヨツタサツタの中には新しい草鞋を持つてゐたが穿きかへ様と云ふ様な風情は起らなかった。石黒君は「小屋はもう近くだからこのまゝ穿きかへすに行かう」と云つた。さうだ。石黒君は極端な経験者であるからN君より一切をまかされてゐたのだ。然しこの行は度々迷つたりしたのであつて、N君より先へ先へさういふで送んでゐた。さうだ。

探つて奥壁を小屋の方へ下りかけた。石黒君は先に岩を背にして降り出した。N君は自重して岩を抱きながら徐々下り出した。突然N君がはつと振り向き、友の背に飛びかかされてゐるを目撃して思はず堅くなつた。さうだ。石黒君は驚くとして、即ち普通道の道を少し離れた所、その場所には奥壁の小屋へ下りる方の急な場所の上へ、些微の少し上あたりで一ヶの相當大なる岩を感嘆して(岩が横のなれい)ので

あつてそれを踏んだものらしい)その餘勢自己も共に非常な勢で峭壁の所を二三回は飛越はされ乍らそれに伴ふ落石と共に唐谷の雪渓の方へ落ちて了つたのである。

この岩を下りて行く時彼は小屋を下に見つけてゐて二三回、小屋の前に居る人と「オーイ」と呼びかしてゐた。さうだ。その小屋の前に居たのが有明村の案内人大和だつたのだ。丁度大和は唐谷の岩小屋から奥壁小屋へお客と共に來てゐた時で喉を乾かして入る。岩に飯盒を小屋の外で洗つてゐた時だつた。それでこの様子を見てゐたのだ。小屋からは岩が邪魔してゐて、彼の落ちる時、時々彼の落ちて行く姿が見えかけた。さうだ。

大和と松平とが早速雪渓を降り下つて石黒君の落ちてゐる所へ行く。雪渓の所だが岩のわきで止つてゐたが既にこゝ切れてゐた。さうだ。頭を北に、背向けになつて、頭を降けてゐた。時間四時過ぎ頃だつた。さうしてゐる内に大和(橋高小屋の経験者)が歸つて來た。彼は北尾根の行方不明と云ふ人を捜してゐたのだ。N君も小屋へ連れ來られた。日も暮れるから上高地へ使を出さればならぬが今日もう駄目だ。それでどうする事も出来ないで石黒君の遺骸はそのまゝにして、小屋に居させた人々を寂しく送つたのだ。八月四日は斯くして過ぎ、五日は上高地に便をやつたり又北尾根の怪我の方へ手を要したり、検視の交渉等で漸く六日に上高地から人が來たのだ。六日の夜は前に書いた如くして白濁の森林省の小屋迄移し、七日熊本を越して検視した事になつたのだ。

これについて原因と云ふ様な事が云々されてゐる。サンデー毎日に大野氏がその原因として次の七ヶを挙げてゐられた。

- 一、出発の時間遅かりしこと。
 - 二、防雨具の用意なかりしこと。
 - 三、雨天の日、霧を冒して登山せしこと。
 - 四、経験を頼りに案内者をつれざりしこと。
 - 五、登山杖なくわらち切れ満足なりしこと。
 - 六、路に迷ひ心の平静を欠きしこと。
 - 七、小屋を見て氣をゆるめしこと。
- 即ち右の如くであるが之はあまりに山を知らざる人の言である。六、七の二ヶは可成りしても他は全然肯定する事は出来ぬ。一に就いては前に云つた通りで標高小屋迄の標定であるから時間は十分である。決して此の目的の爲には遅い出発と云へぬ。又三に就いては、この日はこの記事を讀めばわかる通り晴天であつた。霧は決していづれもあつてゐなかつた。標高は真く霧の往來する山であるが、それで霧が一時かつても又直きに晴れる事はよく常に経験する所である。それで彼は登つてから霧に會つたんだし、又直き晴れると思つたにちがひない。一時霧がかつたからつて中止せなければならぬ標だつたら山は歩けない。又この日は晴天だつたから、二の防雨具の件は氷解するだらう。五の杖のないと云ふのはこの原因にならぬ。富士と御岳の如き金剛杖をサヤ／＼ついで行く山ではない。岩の標高だ。岩場に出會へば登山杖は邪魔にこそなれ、役には立たぬ。岩場ではヒッケルはリニツクサツタへ取める事を考へて見るべ

きである。わらちの切れてゐた事は確かだ。然し岩を歩くには靴よりもわらち、わらちよりも足袋だけの方が歩きやすいのだ。之が直接原因ではないが、切れたわらちを穿きかへる餘裕のないのが、云ふ不幸な結果を齎したのである。わらちの切れたのはその落着きのなかつた當時の状態をよく證明するものと見るべきだ。殊る問題は四だ。即ち経験を頼りに案内者をつれざりし事なのだ。之は自分進學生に取つて大いに論じて置かなくてはならぬ事だ。自分進學生は他の人達と異り、金が豊富ではないのだ。なるべく費用をきりつめなければならぬ。人夫を連れたり火案内人を備へば之に聽した事はないのであるが、その費用にたへないのだ。未知の所へはやむなく進んで行く。若し彼が未知の所だつたら無謀と云はれてしまふが、彼が三回だ。然かも同じ所だ。之の場合案内人を連れてゐないなんて事で責めるのは無理だ。よしや之の事は案内人を連れてゐても必ずしも起らなかつたとは云ひ得ない。之は偶然だつたのだ。アタシデントだ。経験者であつたのに斯くの如き結果を見たのだ。故に余は山のアタシデントは神祕の境を出ていないではないか。疑はさぜられる點もあるのだ。此の意味より此處に真相を發表して、アタシデントと對する誤解を解き誤れる批判を排し、アタシデントに對する眞の研究に資し度いと思ふ。

石黒君の筆を拝し、故人の貴い犠牲によつて我々は何ものかを得なければならぬ。

記 録



年報 昭和二年一月—十二月

スキ練習

△山陰鉢伏山附近

西村格也、檀澤、伊藤忠

一月二日 山陰鉢八鹿郡—龍次村大久保(田中重蔵方)

三日 出雲八、三〇—牧場小屋附近にて練習

牧場小屋(二、〇〇)—鉢伏山頂上(二、〇〇)—休草—西ノ

第一ピーク(四、一五)新〇五、〇〇

四日 牧場小屋附近にて練習

五日 牧場小屋—杉ノキヤムヲ場—西ノ第一ピーク—鉢伏頂上

—歸着

六日 東尾根より鉢伏頂上—西ノ第一ピーク—小屋

七日 足坂よりは自動車通す—八鹿

立上其他にコーチをして頂き、大體御厄介になつた

△神鍋山

伊藤忠、鉢伏の給送(寄る)

一月七日 八鹿—江原—栗野やぶ屋

八日 御机山の頂上の小屋迄吹雪の中を上る。雨になつたので

引き揚ぐ

△伊吹山

檀澤、西村格也、香月慶大、伊藤忠

二月五日 住吉郡(後一〇、五七)

六日 島岡郡—春照村—二合目

尋常科の水野が来てゐた。三合目迄登つたがラストになつてゐてそれより上は駄目だつた

△神鍋山

伊藤忠

二月八日 江原郡(後二、四九)—徒歩—石井(前三、四〇) スキ

—を穿いて栗野着(前五、三〇) 習大の水野君等と共に

神鍋の東斜面で練習す

九日 神鍋の東斜面及噴火口の滑降

十日 栗野—江原郡—城崎

規模小、又雪質悪し

十一日 城崎—上夜久野

雪の爲に汽車不通、漸く上夜久野に行けば友の一行は引き揚げてゐた

△上夜久野

野田三郎、西村格也、檀淳、香月慶太
二月十一日 上夜久野到着（前二、〇〇）
あまり時間が早いので、聯の待合所で一睡した。スキー場の
奥で練習。午後四時頃引き上げ

△宇奈月合宿

野田三郎、西村格也、香月慶太、檀淳
三月十九日 準備の爲同村のみ先發
三月二十一日 大坂發（後一〇、四六）黒部へ向ふ。尙近聯が加は
る筈だったが、風邪の爲参加出来なかつた

三月二十二日 富山―三市―黒部鐵道―宇奈月、豊後到着。途中
より四村及び富山高橋の藤木加納の二君に由迎へてもら
ふ。宿は宇奈月宿。街路にも雪は非常に多く積んでゐる。
スキー場は半時間。小屋もある。少し練習する。朝大の
一行と同じ宿だ。

二十三日 今日内山氏にコーチを受く。ジャムプラインの練
習中香月は右のスキーを折つて終つた
二十四日 内山氏其他のコーチを受く。晩、闇へ行かれる内山
氏を歸送する

二十五日 今日少し雨降つてゐる。午後雨の中で練習。
二十六日 又雨だ。予定を早めて引き揚げる。宿はすつかり客
がなくなつた。朝大、富坂と共に黒部鐵道の吉澤氏の招待

大變考になつた。これが終つてから茶話會を開いた。

△六甲奥池キャンプ

金谷、伊藤、山本、井上、松野、眞野、岡部、近藤、野口、
淺野、安井、喜多、水野、富士澤、原、桑城、村上、橋本、
瀧川、藤田、田中、野村、藤本、吉川、入江、香月、淺井、
野田、檀、西村、伊藤
四月三十日 奥池―芦屋谷―中畑―奥池
五月一日 奥池―五箇ヶ大池―仁川

新しい人々の参加多く三十一名と云ふ大人数となつて、奥池畔
に七個の天幕を建てて大發會だつた。第二日は仁川の峡谷を
岩を捜し乍ら歩いた。仁川の峡谷は縦横して只ザイルだけを結
つて渡つたらしい所だ。スバライイ岩壁がある。

△芦屋ロッタガーデン

安井、喜多、入江、伊藤
五月八日 万物相附近で例の通りクライミング練習。R.C.C.の一
行と會ふ。藤木氏其他の人々

△シノキ山キャンプ

五月二十一日 参加者二十三名發會であつた。シノキ山キャンプ
地附近及ロッタガーデン等でクライミングの練習をやつて芦
屋に出る

△仁川キャンプ

五月二十八、九日 理科二年の發會として舉行。

で御馳走になつた。
合宿に御協力下さつた内山氏上林先生其他の方々に感謝致
します。

昭和二年度

△芦屋ロッタガーデン

安井、水野、香月、松本、伊藤
四月十七日 万物相や根城地附近でアンダイルンしてクライミング
懸垂岩でアップザイレンの練習

△芦屋ロッタガーデン

水野、安井、今村、井上、喜多、原、藤田、香月、松本、檀、
伊藤、近藤中佐
四月二十四日 例の所でクライミング、懸垂の練習

△山岳活動寫眞展覧會

四月二十八日 於特別教室三層
ロッタ、クライミング 一卷
日本アルプス 二巻
ランダムスライド 二十五巻

右の内ランダムスライドは藤木氏より拝借した。之は氏が最近
スイスから持つて歸られて一般に公開されてゐない大切な
ものを御貸下さつたものである。大變發會で室が狭すぎた。

△芦屋ロッタガーデン

安井、香月
五月二十八日 例の通りクライミング練習。万物相基場附近にて
△深谷池キャンプ
六月四、五日 夙川―鷺林寺―鳴天小屋―深谷池―仁川
この行は雨にたゝられて散々だつた。参加者橋本外四名

△芦屋ロッタガーデンキャンプ

井上、原、喜多、橋本、近藤
六月四、五日 キャンプを張つてクライミングの練習する積りで行
つたが雨に祟られた

△芦屋ロッタガーデン

安井、井上、足立、水野、佐岡、今村、藤田、香月、檀
六月十二日 例の通りクライミング、アップザイレンの練習。ゲ
ートロッタを試みる
この日は芦屋はR.C.C.や三高、京大等のパーティで賑つた

△西屋ロッタガーデン

西村、山口、松本、野田、檀、香月、伊藤
六月十八日 夏の計畫の相談會の後ヒキナリの爲めトレーニング
△西屋ロッタガーデン

井上、今村、藤田、近藤、淺野、足立、水野、安井、香月、伊
藤

六月十九日 根拠地及方物相附近にてクライミングの練習

△岩屋ロックガーデン

井上、村上、橋本、香月、西村、山口

六月二十五日 例のリクライミング練習

△岩屋ロックガーデン

井上、安井、足立、置瀬、今村

六月二十六日 懸崖岩方物相附近にて練習

△ロックガーデンキヤムプ

安井、井上、土岐、山口、松本、檀

七月九、十一日 夏期登山のトレーニングの爲めキヤムプす。クライミングの練習

十日朝キヤムプは懸崖に遭つた。山でこんな事のあるのは憂ふべき事だ。ランタンやアイゼン毛布等を盗まれた。

△岩屋トレーニング

征岡、今村、足立、置瀬、西村、香月、野田

七月十日 方物相懸崖附近にてクライミング練習

夏の山旅

△鳥帽子槍縦走

野田新三郎、土岐初雄、山口滋男、松本南、西村格也、檀淳

入夫、清水延治

十一日 晴 上高地—中尾峠—焼硫黄岳—中尾—蒲田—今田方
中尾あたりからひどい夕立にあつて、つづぬれになつて蒲田へ着いた。

十二日 曇、雨 蒲田(九、〇〇)—タリヤ谷の左岸に移る(一、二、三〇)—休憩(一、〇〇)—右岸に移る(一、三〇)—左岸の湖(四、〇〇)

十三日 曇、雨 出(九、三〇)—タリヤ谷渡渉右岸(一、〇、三〇)—右岸(二、〇〇)—雨どしく之を根拠地とす—右の谷を試みる(二、一〇)—三〇—休憩—左の谷を上る(一、三〇)—三、一五)—根拠地の石室(三、四五)

十四日 曇、晴 出(一、二五)—タリヤ谷谷との合(二、一五)—蒲田吊橋(一、三〇)—巨岩の所へ松高の一行と會ひ、キヤムプに厄介になる。

十五日 晴 出(七、〇〇)—瀬澤谷入口(一、三〇)—榎平窪(三、三〇)

十六日 晴 出(九、〇〇)—中崎の尾根で苦む(一、一、三〇)—榎平小屋小憩

榎平小屋(四、一〇)—南谷の北谷(六、四五)—途中度々霧にまか

る—三ツの淵の淵口(七、二〇)—中央の淵を下りる。一、二、左を

からむ—榎平窪(八、〇〇)

十七日 晴 雲霧(七、三五)—瀬澤の入口(八、〇五)—小憩—

第一の淵の下(九、〇〇)—湖の左方の草付きで苦しむ(一〇、二

五)—ガリーの下(引きか(一〇、二五)—ガリー上部のテ

七月十二日 晴 住吉原(後一〇、五七)

十三日 大町着(後二、〇〇) 對山館

十四日 晴 大町—葛温泉—湖小屋—野營地

十五日 晴 野營地—鳥帽子槍—野營地

十六日 晴 野營地—三ツ淵—野口五郎岳—赤岳—野營地

十七日 晴 野營地—鷲羽岳—三ツ又蘆華—双六岳—双六小屋

—磯原澤樂野營地

十八日 雨 野營地(九、〇〇)—西嶽—槍ヶ岳—小屋(二、〇〇)—暴風雨の中を雨に濡れながら小屋へ着いた。

十九日 暴風雨 今日には到底登山は駄目だ。滞在する事とする

山口で土岐とは入夫を連れて上高地へ下る。

二十日 曇 今日午後決定まらずに上高地へ下る。

上高地へ下る。伊藤は遂に來なかつた。

二十一日 雨 又雨だ。雨の中を歸るのも感心せぬから滞在する。雨の中で岩を釣に行つたが一匹もつれぬ。松本のイナ

釣のロープはとうも壊れた。

二十二日 晴 上高地—榎本—鳥ヶ—松本 天幕を清水屋

に置いて上高地を引き揚げる。

△鍋杖岳及槍穂高

伊藤盛

七月九日 大阪(六、三〇)

十日 晴 鳥ヶ—榎本峠—上高

ラス(一〇、三七)—少憩(一、〇〇)—第二の淵の下(二、一、一〇)—一、二、三〇—湖澤の北のキレット(二、五五)—榎小屋(四、〇〇)

十八日 暴風雨 滞在。榎太郎の厚皮でストリアを笑いてもらふ

十九日 雨 小屋(一、一、三〇)—白出澤を下る。槍ヶ岳登

道に出る(一、〇五)—雨後殊道を通る。霧の爲め誤つて、大窪

へ迷つた。澤をつたつて右へ出る。(六、〇〇)—瀬澤入口

(六、一五)—榎平窪(六、五〇)

二十日 曇 雲霧(九、〇〇)—瀬澤樂野(一、〇〇)—槍ヶ—小

屋(一、二五)—榎の一行は上高地へ降りた後だった。

二十一日 暴風雨、滞在

二十二日 曇 小屋—榎と東嶽及北嶽との鞍部を経て—小

の鞍部

鞍部(一、一五)—美即ち西南面を登る。アイアンフックを打

込む—小憩(一、三〇)—頂上(二、一〇)—美即ち東北面を降

る。—中部のテラス(二、二〇)—最下部(三、二二)—鞍部(三、二

二)—湖の中を小屋へ歸る。

二十三日 曇 榎の小屋(九、〇〇)—榎小屋(二、一〇)—

榎尾入口(二、一五)—川の左へ渡る(二、〇八)—本谷との合流點

を下に見る(二、三五)—岩小屋(四、五〇)午後は晴天になつた。

二十四日 晴 岩小屋(七、四〇)—榎高小屋(九、三五)—休憩—

出(一、二、三〇)—奥高頂上(二、〇五)—前嶺頂上(二、四五)

休憩(二、三〇)—上高地

△白峰三山甲斐駒嶺定

香月慶太、前田敏文

案内 澤澤朝光 人夫 澤澤延道

七月十二日

曇 甲府―駄澤―飯宮

十三日 晴 飯宮―トロで―新倉―下湯島―上湯島―四山温泉

(八、一五) トロは朝八時と正午の二回飯宮發着行きの出る。

十四日 晴 人夫を待つ 湯澤

十五日 晴 四山温泉―新其田―廣河原―チロ澤―大門澤―大

門小屋

十六日 晴 大門小屋―農島岳―間の岳石室

十七日 晴 間の岳石室―間の岳―北岳の鞍部 北岳―北岳の

鞍部―飯澤―剛俊の小屋

十八日 晴 剛俊の小屋―野呂川―大仙丈―小仙丈―北澤―北

澤小屋

十九日 天候陰湿のため滞在

二十日 晴 北澤小屋―備水峠―駒ヶ岳―七條―五合目―横手

前宮―牧場澤―芝峠

△上高地天幕生活

一行 伏見龍馬、香月慶太、(伊藤恵)

紙園寄、野村蘭夫、川本雄郎、湯川孝夫、植田俊夫、楠木義明

柴垣明、岡本英一郎、村上正一郎、斎藤武安、喜多又太郎、

同行 清水氏

三十一日 晴 有明―中湯温泉―燕小屋 小屋に着いてか

ら猛烈な夕立があった

八月一日 晴 燕小屋―四岳小屋―殺生小屋―槍ヶ岳頂上小屋

二日 曇 肩の小屋―槍澤―上高地

三日 少雨 清水屋に引き揚げる 滞在

四日 晴 平澤、横田氏は備水を繰り上げて歸る

△救護日記

伊藤恵

同行 騎天山岳部、水野祥太郎君

二人で精進近へ行って何か面白い岩でも捜すつもりが、穂高に

二組も遭難があつたので救護に赴いた

八月四日 晴 一人になった。騎天山の水野が小型平に頭張つてゐる

ので移轉する

上高地(一、三五)―穂澤(二、四三)―樫尾入口(三、三五)―一の

供小屋(四、一〇)―先鋒の大本営一行に追いつく 出發(四、五〇)

―穂澤小屋(五、三五)―五、五〇―大槍小屋(七、〇八)―七、五五

―肩の小屋(九、〇〇)

五日 曇雨 肩の小屋―殺生小屋(二、三〇)―南岳(一、一

二)―真偽者を見付く北嶺の北(一、五五)―北嶺の東側の下(三、

〇〇)―クローアルをならべたが下る事不能(四、〇〇)重太郎、

奥村の二人を穂高小屋へかへす(四、三〇)残つた人夫は小滝を

群人二人に野營の準備にかかる。合羽作りの小屋に真偽者を置か

七月二十二日 晴 松本―島々―奈川津―槍崎―白骨温泉、島々よ

り奈川津迄は自働車にて行く

二十三日 雨 白骨温泉―夏小屋―大ズレ―中の湯温泉、雨の

ため乗鞍岳へは行けなかつた

二十四日 晴 中の湯温泉―上高地

水力電氣の工事で良い道が出来かけてゐる。昨午通り清水屋の

隣岸、中瀬にキヤムプする。七時過ぎ伊藤が歸り、穂高から下

りて来た。櫻一行は既に下山してゐて會はなかつた

二十五日 晴 清水氏下山す。神戸高直の連中が訪れて来た。

明日の早い出發の爲め飯を焚いて置く。

二十六日 天候が怪しいので槍行は見合せ。終し午後二時

頃急に太陽が降り出したので三時より槍岳に登る。七時半キヤ

ムプに歸る。途中夕立にあふ。騎天山水野君高直の四山君等が訪

れて来る。今日の食事は通り飯政めだ

二十七日 岳川谷を少し登る。穂高にあつて引きかへす。岳川

川兄弟が上高地に来てゐる

二十八日 晴 岳川谷迄出掛けて行く

二十九日 小雨 上高地―穂高―島々―松本

△燕・槍嶺定

伊藤恵

京大平澤有一(卒業生) 横田氏

七月二十九日 晴 淺間温泉

七月三十日 晴 有明温泉

す。生涯松を伐つて焚火する。(穂高遭難参照)

六日 天候定まらず暴風雨の氣味あり。野營地(五、三〇)北

嶺の大キレット(七、〇五)―穂高小屋より迎へに来た中畑、奥

村、穂澤に會ふ―岩場の上(七、一七)―食事を(七、五二)迄―

北嶺頂上(八、二三)―穂澤岳と北嶺との谷(九、四〇)―溪谷の岩

小屋(一〇、〇〇)―上高地より人夫衆に會ふ(一一、三〇)―溪谷

を上り石黒君の遺骸を下ろし横尾の岩小屋を経て白澤の警務省

の警小屋に着いたのが午後八時。此處に遭難を置いて人夫衆は

御道夜、自分達は上高地へ歸つて神戸高直のキヤムプに泊る。

(一〇、〇〇)

七日 晴 上高地滞在

八日 晴 備水を繰へて上高地を引き揚げる

同行高直小橋田中君

△若屋キヤムプ

井上兄弟、香月

八月十、十一日 十日の夜より風雨になつて天幕は水浸りとなり、

ひどい目にあつた

△六甲天幕村

於六甲黄湯池畔

八月十三日より二十日迄

昨年もやつたんだからと云ふわけで又今年も天幕村を開いた。

未だ一般に知られてゐないから参加者は少なかつたが昨年のオ

熟睡の時よりも大成功であつた。隨意にやつて來て氣のむいた時歸れば良いのだからこれからとしく利用して頂き度い。アルプスも良い一寸遠い。六甲なら霧山とも云ふべき處で近いし、何とせずにはゐるのに丁度良い所だから毎年やるつもりだ。宿泊者は次の通りだつた。今度からはもっと大きくやれると思ふ。

香月、醍醐、(小林敏博) (朝比奈) 野田、登井、吉川、井上、湯川、橋本、植田、柴垣 (中江) 櫻
△其他部員中あらこらへ行つたものがあるが記録が提出されなかつたので省略する。

秋の山

△西屋ロックガーデン

井上、八代、近藤、野口、菅岡、置岡、足立、今村、浅野、安井、村上、醍醐、香月、西村、野田、上谷、伊藤、田村中佐

九月十一日 C. B. B. 山や R. C. C. 山 萬物相附近でクライミング、アラバザイレンの練習多数の参加者があつて盛であつた。

先日來の雨の爲め岩がゆるんでゐたので一二の頂上を受けたものとあつた。

△ラジオ放送 於大阪放送局

九月十一日「最難なる山の頂上雄健者」伊藤恵

△夏期山登報告會 九月十七日午後一時より

於生徒會所第一號ホール

岩が豊富だし然かも頑い岩ばかりで西屋の Living にはかり馴れた者に一寸勝手が盛つて貰い参考になつた。岩の機子も仲々複雑で種類も豊富だ。時々他へも行く必要を痛感する。

△山岳展覽會 (運動會當日) 四館二階

我部初めての試みたつたのに出品物も多く集まり大盛況であつた。今度からはもっと早くから計畫して数日間にするものを催したいと思ふ。出品して頂いた美津濃運動具店及日本貿易商社に感謝します。

藤木氏及直木氏には毎度毎度御厄介になり今度も珍らしい参考品をお貸し願つた。

△六甲縱走

井上、安井

十月二十四日 お多福山、東、西六甲等を経て秋の六甲縱走をやつた。面白い一日であつた。

△ロックガーデンキヤムプ

近藤、櫻木、野口

十月二十九、三十日 例の組根據地に張る。一日中霧が罩めて居て一寸面白かつた。

△西屋ロックガーデン

近藤、野口、大後、足立、醍醐、安井、村上、喜多、柴垣、香月

出席者 伏見部長 田村中佐
生徒部 二十四名
夏期山登其他興味多い諸があつて其他今學期の計畫について相談をなした。山小屋建設委員設置、「山岳部報告」發行に就いての打合せをなした。

△西屋ロックガーデンキヤムプ

伏見部長、近藤、置岡、井上、今村、水野、村上、安井、醍醐、柴垣、松本、香月、櫻

(當日参加者) 原、足立、醍醐、野田

九月二十四、五日 根據地方萬物相懸崖附近にてクライミングの練習 部長親らアラバザイレンの練習の熱心さ

△西屋ロックガーデン

伊藤恵

十月二日 地獄谷を溯つてリッガ傳ひに萬物相を経て懸崖岩に出る。C. B. B. を試みる。

△小金岳登攀

井上、菅岡、今村、喜多、安井、醍醐、香月、櫻

十月十五日 寶塚—霧山—丸山村—池の畔池の邊でキヤムプ。一週間程前に溺死者があつたとか云ふ特異い池だ。トラジションでもありそうで面白かつた。池のあるキヤムプ地である。

十六日 野嶺地—三ッ岳—峠野嶺地—小金岳往復

十七日 野嶺地—霧山町—寶塚。秋の山旅は面白い。小金岳は

十一月三日 C. B. B. 山や萬物相懸崖岩附近でクライミングの練習
△西屋ロックガーデン

井上、村上、安井、今村、足立、水野、醍醐、水野、櫻、伊藤
十一月六日 R. C. C. の岩登りて西屋は賑はつた。地獄谷を経て萬物相附近のラングリング。午後岩登の解散後アラバザイレンの練習

萬物相や岩小屋の方を巡つて歸る



今漸く、この「山岳部報告」を創刊し得た。この「報告」の主張する所は登頂のアルビニスムスで大體盡くされてゐるを信ずる。その故に内容も特にさう云ふ傾向を表現しようとしてゐる。この「報告」は決して記録を誇る虚飾的なものではないつもりである。若し之がそれに類した時こそ、その存在の理由を失つた時と考へる。單純なる記事を擧げたのもこの意味による。

この體式に於ても猶ほ自分は完全さを認め難い所が多い。次の號から追々改めて行くつもりである。一人でやつた爲不備な點の多い事を憂ふ次第である。誤植も多い事と思ふ。

今回はすべて夏山の記録、等に限つた。次號は岩等の研究號を出す豫定である。この創刊號も十月に出すつもりであつたのが種々な事情でこんなに遅くなつて了つた。

兎も角自分達の「報告」は今、産聲を擧げた、然して部長の創刊の辭に過つてゐるが如く吾等は之に就いて相當な抱負を有してゐる。此れを基礎として發展させて行きたい。

お忙しい所を無理にお願ひして執筆して頂いた石川欣一氏及び藤水九三氏に御禮申します。氏には此の「報告」創刊に就いて大變に御援助して頂いた。そうでなくとも大變御世話になつてゐるのに、

其他之に就いて色々御援助下さつた方々に感謝致します。(伊藤)

創刊號

定價 八錢

昭和二年十二月一日印刷納本
昭和二年十二月三日發行

編輯者 伊藤 愿
發行者 伊藤 愿

印刷所 甲南高等學校山岳部
神戸市江戶町一〇二

印刷所 田中印刷出版株式會社
神戸市江戶町一〇二

發行所 兵庫縣武庫郡赤山町
甲南高等學校山岳部
電話六四八二七三七番

冬山のシーズン来る!!



スキースケート
服装

其他用具豊富!

登山用具
空氣銃銃
ステッキ
時計

直輸入商

日本貿易商社

神戸市三宮町三丁目九六
電話三三一九九三番

(力食口夕道星)

人文地理學の最新權威

エルズワース・ハンチントン原著
京都帝大教授文學博士石橋五郎校閲
甲南高等學校教授文學士伏見義夫譯

人文地理學概論

定價 四圓

發行所

東京 株式會社 積善館
大阪

好評噴々

第五版發賣

洋服

登山服

スキー服

御好みに應じ如何様にも
仕立候

神戸市上筒井市電終點東

山根洋服店

電話 二一七〇
二一五〇

出張所 甲南高等學校前

運動用具
文房具一式
雜貨

甲南高等學校指定

竹内文房具店

兵庫縣武庫郡御影町

各運動具店の

登山用具取次致します

洋書 — 和書

地圖

參謀本部陸地測量部發行

山岳書籍

神戸市元町一丁目

川瀬日進堂書店

電話三宮 一七七三

山岳書籍

書籍 雜誌

兵庫縣御影町

寶盛館書店

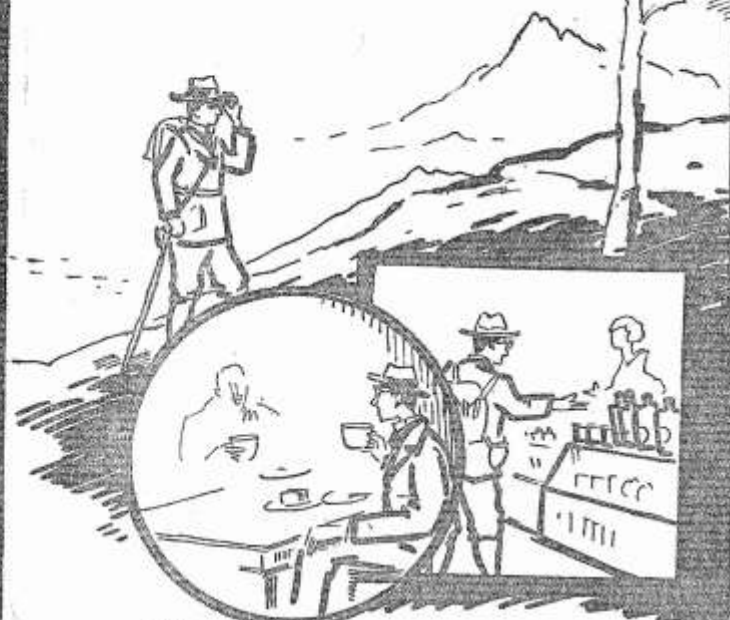
芦屋

寶盛館支店

電話四〇五
垂替火版一六六六七

電話八二五

登山の山前に西村へ



神戸市元町一丁目目鯉川筋
西村食料品部 喫茶部

電話三六一六

森永
チョコレート



健康への
跳躍！

チョコレート
の元気で
一足飛び！

贈賞カード入
五銭・十銭・廿銭



C-1

森永製菓株式会社

ス
キ
ー
ス
ケ
ー
ト
登
山
用
品
一
式

株
式
會
社

シマダ運動用品店

神戸市元町一丁目

電話三宮4271 振替内阪24014

山とスキー用具専門

西 岡 一 雄

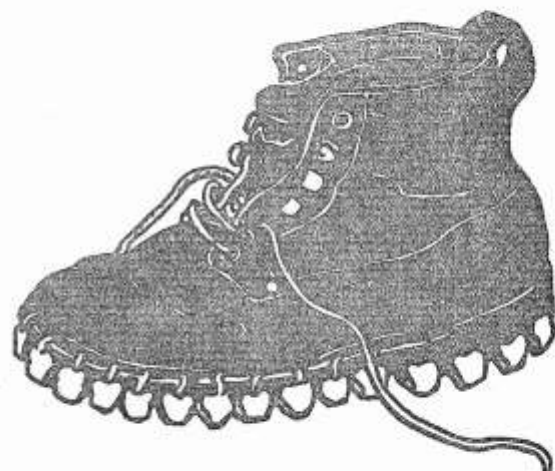
大阪市東區淀屋橋南詰停留場前

コドモ薬局内 電話本局 240

島 田 眞 之 助

神戸市下澤道一丁目渡川公園メゾー前

島崎ビル三階 電話本局809



スキー靴と山靴

専 門

日 ノ 丸 堂

京都市下京區四塚町 二中前東

電 話 F 2373

振替内阪 68259



阪神方面取次店

西 岡 一 雄

大阪市淀屋橋 コドモ薬局内



日本アルプス

への出発點

いてゆの谷上高地へ、槍へ、穂高へ

自骨、平ノ湯、中ノ湯の温泉へ

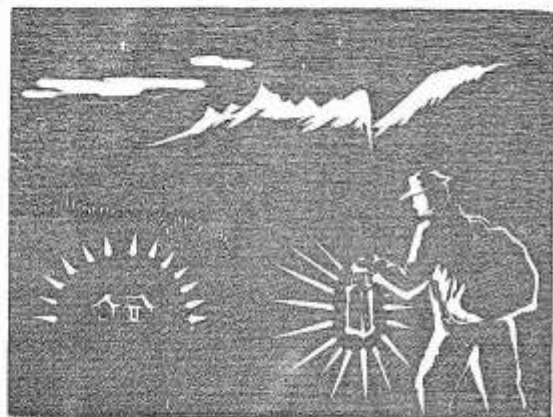
大町を経ては針ノ木立山方面へ

松本は之等の愉快な山旅への基點となり各登山口への交通の中
樞となつてゐます。

旅館は萬端の設備を整へて皆様の御いでをお待ちしてゐます。
御出發の時も御下山の時もこのアルプス旅館飯田屋を御利用
下さい。

信州 松本市

松本駅前 飯田屋旅館



上高地

海拔1500m

槍ヶ岳、穂高連峰、燒岳、霞澤岳に囲まれた静かな谷

美しい

いて湯

永き山旅に疲れし山人の故郷

上高地温泉

清水屋旅館

美満津の
冬山と夏山の道具！

MIMATSU'S
WINTER & SUMMER SPORT
OUTFITS

【型録進呈】

合名會社
美満津商店

東京・本郷・赤門前

槍^{やり}肩^{かた}小屋

(海拔一萬尺)

東から、西から、南から、永き山旅に疲れし山人を慰める完備せる山小舎、眺めは遠く、美しきセピアに彩られる樂師岳、立山から白馬まで。朝夕には高き榮光に輝く、穂高、笠、常念、燕岳の姿は大自然のなす畫であり詩である。

等。槍・穂高の縦走に際し、槍平や殺生まで下つて宿泊せねばならぬ不便を除かうと槍の肩即ち信濃國境鞍部三〇四〇米突の地點に小屋を建設致しました。槍の絶頂を極むるにも前日迄に是非此處迄御登攀せられ置くが非常に便利です。

槍ヶ岳肩 小屋

經營者 沖田信安

